

『玩[。]プー』
([。]が[。]ん[。]ぷー)

越[。]百[。]州[。]深
(こ[。]す[。]も[。]す・しん)

主な登場人物

- 星山柳治ほしやまりゆうじ .. 大手化学会社に勤務。主力工場の製造第一課長
- 星山美雪みゆき .. 柳治の妻
- 星山宙美そらみ .. 星山家の長女
- 星山球美たまみ .. 星山家の二女
- 天馬玲奈てんまれいな .. 日本感染症総合研究所の主任研究員
- 細井弘毅ほそいこうき .. 柳治の上司
- 猫田末男ねこたすえお .. 厚生労働省の役人
- 小野寺悟おのでらさとる .. 天馬の上司
- 大賀忠雄おおがただお .. 内閣総理大臣
- 太田六郎おおたろくろう .. 外務大臣
- 元橋七助もとはしちすけ .. 厚生労働大臣
- 荒井慎吾あらいしんご .. 経済産業大臣
- 田中建造たなかけんぞう .. 国土交通大臣
- 大泉信次おおいずみしんじ .. 環境大臣

○栗田賢一くりたけんいち .. 防衛大臣

○江木志功えきしこう .. 官房長官目次

目次

- ・プロローグ
- ・トイプードル ― 家族 ―
- ・南シグマ島 ― 震源地 ―
- ・日本上陸 ― 感染 ―
- ・プーの能力 ― 希望 ―
- ・宙美 ― 躍動 ―
- ・不正 ― 別れ ―
- ・タチキランソウ ― 自然の恵み ―
- ・新薬の開発 ― 人類の総力 ―
- ・エピローグ
- ・あとがき

プロローグ

満開の桜と青空。春の景色は淡く彩られている。その優しく爽やかなキャンパスのなかに宙美が立っている。腕のなかにはプーが抱かれている。トイプードルのレッド、六歳の女の子だ。宙美の顔をなめようとしている。宙美を絶望と孤独から救ったプーは、人類を救い、星になった。今、宙美が抱いているのは、初代プーの姪にあたる。

宙美は新たな旅立ちの日を迎えた。これから長野県の阿西村へ向かう。そこには、日本感染症総合研究所の中核をなす研究センターがある。大学の農学部でバイオサイエンスを学んだ宙美は、念願が叶い、同研究所へ就職することができた。

宙美は上を向いた。雲ひとつない青空。夜には満天の星空が広がり、愛おしいプーに逢えるかもしれない。

七年前に時間を戻そう。高校へ進学した宙美は、半年もの間、青空を見上げたことがなかった。

時計は朝八時を回っている。二階の寝室から寝間着姿でゆっくりと降りてきた柳治は、居間の扉に手をかけたところで固まった。中から声が聞こえてくる。ひと呼吸おいた。扉をそつと開けて中に入ると、ふたりの娘たちに声をかけた。

「・・・おはよう・・・」その声は本当に発せられたのかわからないほど小さい。勿論、返事はない。いや、声は届いていて、どちらかは返事をしたのかもしれない。しかし、柳治には聞こえなかった。

朝食をとっていた娘たちは、柳治がすぐ横のソファに座ると、食べかけのロールパンを持ってそれぞれの部屋へ戻っていった。テーブルの上には、二枚のお皿が残された。妻の美雪は風呂掃除か洗濯でもしているのだろう。浴室の方から微かな音が聞こえてくる。

十月十一日、外には爽やかな秋風がそよいでいるが、家の中の空気は、その夏のじめじめとした湿気を引きずったままだ。

朝から重々しい息苦しさを感じるのは誰でも嫌なことだ。だから、休日の朝は娘たちの食事が終わるの見計らって寝室から出てくるようにしていたのに、その日はタイミングが合ってしまった。

平日は最初に起き出し、妻や娘たちが起きる前に家を出ることで、朝の息苦しさを回避していた。冬だとまだ真っ暗だし寒い。家族が寝ているから、なるべく音を立てないように気をつか

う。当然、時間がかかる。こんな苦労があっても、誰とも顔を合わさずに家を出ることの方が気楽なのだ。

一度出来上がってしまった生活様式を変えるのは難しい。挨拶を交わさない日常が定着してしまつと、それを覆すには多大なエネルギーが必要になる。

会社で課長を任されている柳治は、朝の重い空気や不機嫌を職場まで引きずっていくのを避けてきた。笑顔で元気よく「おはよう」の挨拶をする。これは、職場の安全文化を支える基盤だと考えている。以前に誰かから聞いたことがあった。日本を代表する大テーマパークの従業員たちは、誰もが主人公のようにハツラツとして、エネルギーが身体から溢れ出ている。その明るさと活力がパークの異空間を造形し、人気の基盤を支えているのだが、通用門を通る前は、ほかの会社と大して変わらないらしい。ほとんどはうつむき加減だ。ところが、門を抜けた瞬間、スポットライトを浴びたかのような笑顔に変わり、視線は自分の足下からパークの先へ向かう。魔法の王国とも呼ばれるそのテーマパークでは、通用門の数メートルの間で従業員に魔法がかけられるというのだ。

しかし、柳治の会社には魔法をかけられる仕掛けはない。あるとすれば、朝の元気な挨拶にこそ、その効果が秘められている。実際、大きな声を出すことで、塞いだ気持ちをリセットすることができる。

—もう半年か・・・以前のようにには戻れないか・・・—

柳治はそう思いながら、テーブルに置かれているテレビのリモコンを操作した。テレビの画面には航空機事故の現場らしい動画が映し出された。

「南シグマ島の飛行場へ着陸しようとしていた輸送機が墜落したという情報が入りました。映像は、現地を旅行している日本人が撮影して、インターネットに投稿したのですが、詳しいことはまだ分かっていません」

アナウンサーが解説している。

墜落現場の映像には、大勢の軍人や消防士たちが動いている様子が映し出されている。輸送機は軍用機のようなのだ。コクピット部分は原形を留めているが、主翼から後ろは大きく損壊している。幸い、大きな火は出ていないようだが、火はすでに消し止められた後かもしれない。ところどころから白い煙が立ち昇っている。画面の端には、タイベックスと全面マスクという装備で全身を

防護した数名の姿が小さく映っていたが、そのことに気が付く視聴者はほとんどいなかっただろう。

―南シグマ島か、最近人気のリゾート地だ。輸送機か。人の被害は少ないだろう。コクピットも無事みたいだ。旅客機だったら大変なことになっていた。あれ？輸送機の墜落現場なのに、全身防護服の連中がいるのはなぜだ？放射性物質でも積んでいたのか？―

柳治は疑問を感じながら、朝のコーヒーを淹れるためにキッチンへ向かった。休日の朝のレギュラーコーヒーの香りは、じめじめとした空気を少し浄化してくれる。柳治はそう思っていた。勿論、実際には浄化作用はないが、コーヒーの香りには脳を刺激し、銘柄によって、リラックスさせたり、集中力を高めたりするなど、さまざまな効果をもたらすらしい。だから、朝はインスタントではなく、レギュラーコーヒーにこだわっている。

学生時代に所属していた研究室では、ペーパーフィルターでコーヒーを淹れていたが、隣の研究室では、アルコールランプで沸かすコーヒーサイフォンを使っていた。最近では、一杯分ずつ密封されたドリップコーヒーが家庭などで多用されている。柳治も今ではそのタイプを使っているが、学生時代、隣の研究室から漂ってきたコーヒーの香りと比べると、少し物足りない。

その朝、柳治はコーヒーを淹れながら、二十八年前、隣の研究室から漂ってきた心地よい豊潤な香りを懐かしく思い出していた。

星山柳治は四十八歳。工業高等専門学校を卒業して大手化学メーカーのプラント制御エンジニアになった。今は自宅から電車通勤で一時間半かかる愛知工場の製造第一課長をしている。この会社の主力工場のひとつだ。柳治の学歴と年齢で、主力工場の製造第一課長を任されるのは異例だ。

柳治は以前からリスク管理の分野に関心があり、プライベートな立場でその分野の研究会に参加するなどして知識を蓄えていた。三年前、係長だった柳治は、その成果を生かして新型インフルエンザの感染拡大に備えた製造部門のBCP（事業継続計画）をまとめた。

BCPとは、企業、病院、行政機関などの組織が、大規模地震をはじめとする自然災害、新型インフルエンザ等の感染症、テロ攻撃等の非常事態発生時において、事業資産の損失を最小限に抑えつつ、中核となる事業の継続および早期復旧を可能とするために、平常時に行っておく備えや訓練等の活動、非常時における事業継続のための手段等を取り決めておく計画のことだ。一般的なBCPの場合、非常事態においては、継続すべき事業に絞り込み、周辺事業については最低限の業務に限定または中断する手段が取られることが多い。

柳治が個人的にまとめたBCPだったが、八カ月後の新型インフルエンザのパンデミックのときに活用された。同業他社の生産が相次いで停止するなか、柳治の工場が操業を継続することが

できたのは、このBCPに基づいて、新型インフルエンザ海外発生期の段階で速やかに十分な準備を整え、国内発生早期からの確な対応が取られたからだ。業界は柳治の工場をリスペクトした。取締役工場長は、柳治のこの功績に対し異例の昇格で報いた。

妻の美雪は四十三歳。看護学校を卒業後、地元の市立病院で看護師をしていた。共通の友人の紹介で柳治と知り合い、二十年前に結婚した。ふたりが付き合い始めたころ、柳治は今の工場に勤めていたが、結婚が決まると瀬戸内の小規模な工場へ転勤することになった。この会社では、結婚したり家を建てたりすると地方へ転勤させられることがよくあると噂されていた。美雪は仕事を辞め、柳治とともに社宅に住むことにした。ここでの新婚生活は、ふたりにとって初めての地であり、毎日が楽しかった。休日のたびに各地の観光地や名勝をまわり、地元で有名な店を探して名物料理やスイーツを楽しんだ。足を延ばして日本海側をまわることもあった。自宅の居間には当時の写真がいくつも飾られている。

二年ほどで愛知工場へ戻り、五年後に今の家を購入した。美雪の実家から数キロのところ建てられた分譲住宅だ。ふたりの娘をもうけたのは愛知へ戻ってからだった。

長女の宙美は四月に高校へ進学していた。二女の球美は中学一年だ。美雪は子供たちに手がからなくなっただけから、看護師に復帰することはなかった。看護師として十分な経験を積む前に仕事を辞めてしまったからだ。今は、近所のスーパーマーケットでパートとして働いている。

トイプードル ― 家族 ―

「九時には出ますよ」

居間に戻ってきた美雪が柳治に声をかけた。少し楽しそうだ。

「ああ、わかった」

柳治はカップの底に残っていたコーヒーを飲み干してから返事をした。

― そうだった。今日はブリーダーさんのところへ子犬を見に行くことになっていた。美雪が楽しそうなのはそのせいか―

美雪は二カ月ぐらい前から犬を飼いたがっている様子だった。スマホでペットショップやブリーダーのサイトを繰り返し調べていたようだ。ある日、郊外の大型ショッピングセンターへ買い物に出かけたとき、テナントとして入っているペットショップの前を通りかかった。

「ちょっと中に入っている？」

美雪はそういうと店内に入り、ガラス越しに並んだケージの中の子犬を順に見ていった。ひときわ時間をかけて覗き込んでいたのが、トイプードルのケージだった。

「かわいい」

右隣のケージを見ていた柳治に、美雪がそうつぶやいたのが聞こえた。それから数日後、犬を飼いたいがどう思う？と美雪が相談してきた。

「どんな犬？」

「トイプードルがいいかな」

柳治は先日のペットショップで、犬種ごとに値段が大きく違うのを見ていた。トイプードルは人気が高くて、二十万円ぐらいしたはずだ。

「トイプードルか。いいじゃないか」

ひと呼吸おいて賛同した。実は、柳治は猫を飼いたいと思っていた。猫派の知人が、頻繁に自分の猫をフェイスブックにアップしていて、かわいいと思っていたこともあるが、子供のころにしばらく猫を飼っていた柳治は、飼うなら猫だと考えていた。その時の猫は迷い猫だったが、いつの間にかいなくなってしまう寂しい思いをした記憶が残っている。

犬派と猫派の意見の対立は古くからある。元来、ペットとして飼われるのは犬が多く、猫は少数派だったはずだ。しかし、ペットフード協会が二〇一七年に発表した推計値によると、犬の飼育数が八百九十二万匹（前年比四・七%減）に対し、猫は九百五十三万匹（同三・三%増）であ

り、一九九四年の調査開始以来、初めて猫が犬を上回った。飼育数が拮抗してきたことにより、犬派と猫派に二分される構図が定着した。

「どこのお店で買うの？先日のショップピングセンターのペットショップ？」

柳治が聞いた。

「ペットショップもいいんだけど、ひとつのお店に同じ種類の子犬が何匹も置かれることは少ない、かわいい子を選べないし、ペットショップによっては、たくさんの動物を物として置いていて、ひどい扱いをしているお店もあるらしいの。その点、ブリーダーさんは、何匹も生まれた中からかわいい子を選ぶことができるし、犬好きの方がブリーダーをやっているところでは、ワンちゃんたちは大切に扱われているから安心できるの。親の素性も確かだしね」

柳治は美雪の話しを聞きながら考える。

「先日のペットショップの子犬たちは、小さなケージの中で飼い主が見つかるまで、しばらく閉じ込められているのだろうか？買い手がつかずに値引きされていた犬もいた。どのくらいの期間が過ぎると値引きされるのだろうか？それでも買い手がつかないとき、その先はどうなる？その点、ブリーダーさんのところは、親や兄弟とも過ごせるし、ケージから出してもらえらることもあるかもしれない。でも、買い手がつかないときの扱いはどうだろうか？」

「これを見て」

美雪が渡してきたスマホの画面は、あるブリーダーがアップしているものだった。太府町にあるらしい。柳治たちが住む豊河市からは一時間もかからずに訪ねることができそうだ。

「八月中旬に、ここで三匹のトイプードルが生まれたそうなの。もう少ししたら、生まれた赤ちゃんの写真がアップされると思う。かわいい子だったら、ぜひ見に行ってみたいの」

生まれたばかりの子犬を買い受けることはできない。

犬や猫を母犬・母猫から離してもいい時期は法律で定められている。「動物の愛護及び管理に関する法律」は昭和四十八年に制定されたが、平成二十五年の改正において、生後五十六日を経過しない犬および猫の販売、販売のための引渡し・展示が禁止された。ただし、制度を円滑に運用し、すべての犬猫等販売業者に遵守させるため、同改正の施行時（平成二十五年九月一日）から三年間は、生後四十五日、それ以降は生後四十九日を経過しない犬および猫の販売等が禁止された。なお、その後の改正法の施行により、令和三年六月十九日までに生後五十六日の規定が施行されることとなった。また、売れ残りの問題については、同法の平成二十五年の改正において、動物の所有者の責務として、動物がその命を終えるまで適切に飼養すること（終生飼養）、動物取扱業者の責務として、販売が困難になった動物の終生飼養を確保すること、都道府県等は、終生

飼養に反する理由による引取り（動物取扱業者からの引取り、繰り返しての引取り、老齢や病気を理由とした引取り等）を拒否できることが明記されている。

その日は、美雪が目星をつけていたブリーダーのところまで三匹のトイプードルが生まれてから八週間が過ぎていた。

「もう九時だね。そろそろ行こうか？ 宙美と球美は？」

柳治から切り出した。

「宙美は興味なさそうだし、球美は動物が苦手だから」

柳治が運転する車でふたりは出かけた。

ブリーダー宅までは車で四十五分の距離だった。あらかじめ電話をして十時に訪問することで約束を取り付けてあったが、まだ少し早い。ふたりは周辺をひと回りしてみることにした。

ポツンと一軒家ではないが、近隣の民家からは適度な距離があり、周りはこの地域特産のブドウとイチジクの果樹園に囲まれている。

「ここだったら、たくさんの犬を飼っていても、犬の鳴き声でご近所に迷惑をかけることはなさそうね」

美雪の感想に柳治が応える。

「伸び伸びと育てるのにいい環境だよ」

約束の時間になった。門の前に車を止めて、美雪があらためて電話をかけると、そのまま奥へ進んでほしいという。ブレーキペダルの上に軽く右足を添えたまま、ゆっくりと車を進めた。玄関前には七十歳前後と思しき女性がひとり出てきていた。

「こんにちは、お電話した星山です」

助手席から降りた美雪が話しかけた。柳治も降りて会釈する。

「お待ちしていましたよ。今日は遠くから？」

「ホームページの色使いやデザイン、犬の紹介文などから、もっと若い方がブリーダーをしていると思っていたけど、ちょっと予想外」

そう思いながら美雪が答える。

「いえ、車で四十五分ぐらいです。豊河市から来ました」

「豊河市だったらお隣みたいなものね。今日はトイプードルでしたね。実はね、生まれた三匹のうち二匹はすでに飼い主さんが決まっちゃったの。せっかく来ていただいたのに申し訳ないわね。残りは一匹だけど、それでもよろしければ見ていきます？」

「なんだ、選べないのかー」

美雪は少し落胆したが、見せてもらうことにした。あらかじめ心に決めていた子が残っているかもしれない。

一匹は前の日に引き渡されていた。対面場所となっている部屋でしばらく待っていると、トイプードルの子犬が二匹、ブリーダーのお母さんの両手に包まれて連れてこられた。首には、それぞれ赤と青の紐が付けられている。

生まれてしばらくすると、子犬たちには別々の色の紐が首輪のように付けられる。ホームページで公開される時には、紐の色が名前の代わりとなり、性別や体重、性格などが紹介される。すでに引き取られていたのは「黄色」で男の子だった。ほかの二匹は女の子だ。どうやら、その飼い主は男の子がほしくて「黄色」に決めたらしい。目の前にいるのは「赤」と「青」。ホームページでは、「赤」はちゃんちゃで、「青」はおとなしいと紹介されていた。

「飼い主さんが決まっているのは、赤と青のどちらですか？」

「赤の方よ。活発な子を飼いたいそうなの」

美雪の質問にお母さんが少し申し訳なさそうに答えた。

ホームページの写真では、「赤」、「青」、「黄色」のそれぞれで少しずつ表情が違って見えたが、目の前にいる「赤」と「青」は、見た目では区別がつかない。

「赤がやんちゃだって？ さっきから動き回って、もう一匹にちよっかいを出しているのは青じゃないか」

柳治はそう思ったが、黙っていた。しばらくすると、「青」が柳治の方へ寄ってきてじゃれついてきた。

「こいつ、かわいいなあ」

「どうしますか？ 何週間か待っていただけると、別の赤ちゃんが生まれると思いますが」

二十分ほど子犬たちと触れ合っていると、お母さんが問いかけてきた。美雪と柳治は向き合って相談を始める。美雪の膝の上には、おとなしくなった「青」が抱かれている。

「売れ残りというわけではないのだけど、今回は選んでいただけないので、その子でよければ五万円値引きしますよ」

ふたりの気持ちはすでに固まっていた。もともとメスを飼いたいと思っていたし、ホームページの写真と違って、「青」は健康そうな体格で元気いっぱいだ。ホームページの写真と紹介文を読んで、飼うなら「赤」だと考えていたが「青」の方が良さそうだ。

「この子を買わせていただきます」

美雪はハッキリといった。

「いつ引き取りに来られますか？」

「今日連れて帰ってもいいですか？ お支払いする代金は持ってきました」

一日を改めて引き取りに来ると、その間に「青」と「赤」が入れ替わって、「青」が譲り渡されてしまうかもしれない。今日連れて帰ろう―美雪はそう考えたのだ。

「わかりました。それではしばらくお待ちください」

お母さんはそういうと、「赤」を飼育小屋へ戻しに行き、夫を呼んで「青」を預けた。

「夫にシャンプーをしてもらいます。送り出す前に、きれいにしてあげたいの。夫はシャンプーの名人なのよ」

それからしばらくの間、お母さんといろんな話しをした。なぜブリーダーを始めたのか。今どのくらいの犬を飼っているのか。「青」の母親と父親について。トイプードルの育て方について。

柳治は思い切って先日の疑問をぶつけてみることにした。

「売れ残った場合はどうするのですか？」

「ブリーダーによっては、殺処分に戻す人たちもいるみたいだけど、私たちは犬好きが高じてブリーダーを始めましたから、売れ残った子も、子を産めなくなった親も、天寿を全うするまでここで飼い続けます。それにね、そういう犬たちと一緒に過ごすことで、犬たちの寿命も延びるし、子を産む親たちも安心できて、健康でかわいい赤ちゃんを産んでくれると思うの」柳治と美雪は感心しながらお母さんの話を聞いた。

「あら、シャンプーが終わったみたいよ」

お母さんの夫が「青」を連れてきた。

「お！一段とかわいくなっただけ」

購入の手続きを終えると、「青」は段ボール箱に入れられて美雪の手に渡された。「青」が食べているドックフード一週間分と、その商品名、一回あたりの分量などが書かれたメモが柳治へ渡された。

「それとね、これはつい最近見つけたものでね、南の島で採れる植物を加工したものだけど、犬の健康にはとても良いの。そんなに高価なものじゃないから、これも少しづつ食べさせてあげて。これは市販されていないから、電話をいただければ原価でお送りしますよ。もちろん、これを食べさせなくても大丈夫ですけどね」

お母さんはタッパーに入れた黒っぽい塊を柳治に差し出した。受け取った柳治がタッパーの蓋を少し開けて中身を確認すると、学生時代に隣の研究室から漂ってきたコーヒーの香りが微かに漂った。

ブリーダー宅からの帰り道、段ボール箱の中の「青」は後部座席に置かれてとても静かだった。眠っているのかもしれない。助手席の美雪は少し饒舌にトイプードルについて語った。

「トイプードルの原種は大型犬のスタンダード・プードルだけど、その原産国はよくわからないみたい。ロシアの方からヨーロッパを横断して、ドイツからフランスへ入ってきたらしいの。フランスで次第に小型化されて、フランスの上流階級の間で人気になったそうよ。とても知能が高い犬なのよ。犬の中では二番目に賢いらしいわ。だから、もともとは愛玩犬ではなくて、猟犬として活躍していたそうなの。それに、嗅覚も凄くて、トリユフ探知犬としても働いていたそうよ」

柳治は、美雪の話しを聞いていて、先日のテレビ放送でやっていたクイズ番組を思い出した。刑事ドラマのなかで良く出てくるシーンのうち、実際にはありえないシーンはどれか？という問題だった。取調室で刑事が容疑者にカツ丼を食べさせるシーンなど数パターンの中に、トイプードルが警察犬として事件現場に登場するシーンがあった。カツ丼を容疑者に食べさせることは実際にはありえない。芸能人の解答者たちは、トイプードルの警察犬もありえないと答えていた。しかし、トイプードルの警察犬は実際にいるのだそうだ。警察犬の訓練所で、その様子を興味深そうに見ていたトイプードルに試しに訓練を受けさせてみたら、シェパードなどと遜色のない能力を発揮したと解説されていた。司会者は、軍用犬や病院などを訪問するアニマルアシステッドセラピー犬、介助犬や聴導犬としても活躍しているといっていた。

―さて、どうやって「青」を躑てやるかなー

柳治は「青」を警察犬のように育てるつもりになっていた。

柳治が運転する車は、ペットショップの駐車場に止まった。「青」は後部座席の段ボールの中でスヤスヤと眠っている。

柳治は車の窓を少し開けた。ふたりはここで、ケージ、トイレ、水飲み、餌皿など当面必要なものを急いで買い揃えた。

自宅に戻ると、宙美と球美が自分たちの部屋から出てきた。段ボールから出された「青」は、すぐに家の中の探索を始める。球美は少し距離を置いて見ていたが、「青」に近寄った宙美の目にはほんの少し輝きが差しているように美雪には感じられた。

宙美は市内の私立高校に通っている。通っているというのは適切な表現ではないかもしれない。自分の部屋に引きこもりがちで、高校へはあまり行っていないのだ。

以前の宙美は明るくて活発な女の子だった。中学一年からソフトテニスに打ち込み、三年生のときにはキャプテンを務めてチームを市大会で優勝に導いた。学業成績も常にクラスの上位に入り、本人も家族も、中学の担任教諭も、宙美の高校受験に危うさを抱く者は誰ひとりいなかった。ところが、高校受験のタイミングでインフルエンザが流行した。公立高校の入学試験が目前に迫ったある朝、宙美はほんの少し熱っぽさを感じた。以前だったら、気にすることもなく学校へ行っていただろう。しかし、その前年にパンデミックを起こした新型インフルエンザの名残で、登校前に体調に不安があるときは、病院で診察を受けるルールが継続されていた。宙美はそのルールに従った。部活のキャプテンだったという自負もあったが、父親の柳治が会社のコンプライアンス委員で、ルール遵守にこだわっていたという理由もあった。宙美の症状は軽く、本人は翌々日の入学試験を受ける気満々だったが、医師の指導により受験することはできなかった。

前年の新型インフルエンザは幸いにして強毒性ではなく、例年の季節性インフルエンザと同程度の感染力、重症化率だったが、国が「新型インフルエンザ等感染症」として指定したこともあり、新型インフルエンザに雇った受験生の救済措置が取られることとなった。その年、宙美が雇ったインフルエンザは、前年の新型インフルエンザと同じ型だったが、そのころは指定感染症からは除外されていた。例年の季節性インフルエンザの仲間入りをしていたのだ。幸い、インフルエンザで受験できなくなったときの救済措置は存続されていて、宙美は後日受験することができたのだが、モチベーションが著しく下がってしまった宙美は、その実力を発揮することができず、不満足な結果に終わった。後からわかったことだが、宙美の部活動の仲間たちの中にも、同じころにインフルエンザに雇っていた疑いがある生徒が何人もいた。しかし、彼女たちは症状が軽いことを理由に、病院の診察を受けることなく、公立高校の入学試験を受けていた。

救済措置で再試験が認められたにも関わらず、実力を発揮できなかったのは自分に責任があることは、宙美にもわかっていた。しかし、宙美は父親に責任を転嫁してしまった。もちろん、柳治も自らを責めた。

宙美は内申書の成績により、地元の私立高校へ推薦枠で入学することができたが、そこには中学の三年間をソフトテニス部で一緒に過ごした仲間が、誰もいなかった。入学式から間もなくし

て、宙美は塞ぎこむようになり、やがて高校も休みがちになってしまった。そのころから、父親の柳治とはもちろんのこと、母親の美雪ともほとんど話しをしなくなった。

目から光を失っていた宙美から、久しぶりに輝きの片鱗を見たような気がしたのは、柳治も同じだった。

「青じゃかわいそうだから名前を付けようよ」

「青」が星山家に来たその日、素晴らしい出したのは宙美だった。いろいろな名前が発案されたが、結局、トイプードルにちなんで「プー」に決まった。

「クマのプーさんみたい」

「でも青のお尻はガツシリしているから、小さいけれどプーさんみたいになるかもよ」その日、星山家には久しぶりに笑い声が飛び交った。

「ほらね、犬を飼ってよかったでしょ」

美雪の目が少し誇らし気に柳治を見つめている。

「そこまで考えて犬を飼うことを考えていたのか。さすが、お母さんだ」
その後の宙美は日に日に変わっていった。

プーの散歩は、朝早く家を出て夜遅く帰ってくる柳治には無理で、もっぱら美雪の役割だったが、しばらくすると宙美が連れていくようになった。プーは小さいながらも足が速く、美雪には持て余し気味だったが、ソフトテニスで鍛えた宙美にはちょうど良い運動で、気分転換にもなった。

プーの散歩は基本的に走る。少し歩いてまた走る。この繰り返しだが、進む先に人がいるとスピードを落とし、尻尾を勢いよく振りながら近寄っていく。他人に対する警戒心はまったくない、ムダなほどに愛嬌を振りまく。

「まあ、かわいい子ね」

「ぬいぐるみみたい」

すれ違う人たちから声がかかる。

プーは、犬は勿論のこと猫にも興味津々だ。猫の方はプーが近づくと逃げるか、威嚇するかのどちらかだが、プーは尻尾を振ってついていこうとする。

プーを散歩に連れて行くようになって数日もすると、宙美は、散歩中の出来事を美雪に報告するようになった。

こうして一カ月が過ぎた。宙美は散歩の途中に出会う人たちと短いながらも会話をするようになり、毎朝出会う散歩仲間もできた。プーは「レッド」だが、その人のトイプードルは「シルバ―」だ。宙美の変化は、美雪は勿論のこと、柳治にもはっきりとわかった。宙美は、着実に明るさを取り戻しつつある。

ある日、居間でプーと戯れている宙美を見ていた柳治は、以前に見た報道番組のことを思い出していた。関東地方で発生した大きな水害を特集したものだ。梅雨前線に伴う線状降水帯が長時間にわたって停滞し、増水した川が決壊して一帯が茶色い濁流に飲み込まれた。逃げ遅れた住民十人が死亡する悲惨な災害だった。この災害では「ペットがいるから避難できない」という理由で家に留まり亡くなった老夫婦がいた。避難を呼びかける消防団員に対し、その老夫婦は「ポチは私たちのかけがえのない家族なの。ポチを置いて避難所へ行くことはできない」といつて断固として自宅を出ようとしなかったそうだ。この報道を見た柳治は、「なんて馬鹿な。避難しないことで、どれだけ周囲に迷惑がかかるのかわかっていない」とひとりで憤慨していた。しかし、今となってはその気持ちがよくわかる。

―プーを置いて避難所へ行くことなんてできないよな―

半年間も閉ざし続けた宙美の心を、自分たち夫婦では開けることができなかつた。ところがプーはどうかだ、あつという間に宙美の心に風穴を開けたではないか。柳治も美雪も、プーを三女としてしか考えられなくなっていた。

最初は少し距離を置いていた二女の球美も、いつの間にか、プーを抱いて頬ずりするようになった。

宙美が柳治と会話するようになるまでには、それからさらに一カ月ほどかかったが、家族の話も元に戻りつつあった。

—この調子なら、高校へも毎日通うようになるだろう。交流が途絶えていた中学のときの友だちとも元通りになれる—

柳治と美雪は、そう期待した。そして、プーに感謝した。プーは、そんなことはお構いなしに家の中でイタズラを繰り返している。

そんなプーにはひとつだけ、何としても止めさせたい癖があった。ネットで調べると、一般的によくあることらしいのだが。

それは、「食糞」だ。自分が排せつした糞を食べてしまう。人がいるところではやらないが、目を離れた隙に排せつし、食べてしまう。柳治が居間のソファの上で寝転がっていると、プーは飛び乗ってきて顔を舐めてくる。食糞した後に顔を舐められるのには、柳治も辟易していた。

星山家の生活は、プーを中心に回り始めた。ジメジメとしていた空気が乾いて爽やかになり、平凡だが充実した毎日が過ぎていく。一キログラムだったプーの体重は二キログラムを超えた。散歩の範囲は二倍ぐらいの距離に広がった。食糞の癖はまだ治らない。

新しい年を迎えた星山家は、久しぶりに賑やかだった。冬休みが終わると、宙美は高校へ毎日通うようになった。しかし、中学のときの親友とはまだ会えていないようだ。親友たちが通う公立高校と宙美の私立高校では、有名大学への進学率が大きく異なり、宙美の劣等感は解消されていなかったのだ。

南シグマ島 ―震源地―

四月、宙美は高校二年生、珠美は中学二年生になった。

四月二十五日から日本は大型連休に入った。大勢の観光客がつきつきと海外へ出ていく。

五月二日の朝、四十九歳の誕生日を迎えた柳治は、ソファに寝転がってぼんやりとテレビを見ていた。プーは柳治のお腹の上で寝ている。グルメ紹介のコーナーが終わり、ニュースに切り替わった。

「南シグマ島で原因不明の感染症と思われる病気で何人もの死者が出ているとのこと。この島はリゾート地として最近人気が高く、この大型連休でも日本から大勢の旅行者が訪れています・・・」

画面には南シグマ島の透き通ったコバルトブルーの海と、長く続く白い砂浜が映し出されている。カラフルな水着を着た大勢の男女が思い思いのマリンレジャーを楽しんでいる。

柳治が身体を起こした。プーが落ちそうになる。

―南シグマ島といえば、半年ぐらい前に輸送機が墜落した島だ。あ那时候、防護服姿で活動している人たちが映っていたが、それと何か関係があるのだろうか？―

柳治は墜落事故との関連を気にしたが、アナウンサーは、防護服姿の人物との関係は勿論のこと、輸送機墜落との関係にも一切触れることなく次の話題に進めた。

南シグマ島は、大小三十以上の島々からなる南シグマ共和国の首都が置かれている最大の島である。同国の人口は約十二万人。南シグマ島にはその七割の約八万人が住んでいる。国民のほとんどは漁業と農業で生計を立てているが、近年では観光業に従事する人が増え、生活が豊かになってきた。さらに、一年ほど前から外国資本を積極的に受け入れ、液化天然ガス（LNG）と木質系バイオマス燃料の輸出にも力を入れ始めたことで、国全体が近代化しつつある。

今、その南シグマ島で、原因不明の感染症と思しき病気が広がりつつある。ここが震源地となり、やがて世界を席卷することになる。

最初の犠牲者は、半年前に輸送機が墜落した現場の近くに住む男だった。この村に病院はなく、村人たちも普段から病院へ行く習慣はない。最近、その男と家族の顔を見ないことを訝った近隣の村人が、村長とともに男の家を訪ねた。粗末な作りの家の中で、その男が異様な状態で死んでいるのを発見したとき、その妻とふたりの子供たちも虫の息だった。

この報告を受けた軍政府はただちにその家の周辺を封鎖した。

「大佐、これを見てください。全身がどす黒い黄色に変色しています」

「これは酷いな。肝臓がやられているようだ」

「こっちの女とふたりの子供はまだ生きています。どうしますか？」

「とにかく全員を運び出せ。収納袋は二重にしろ。生きている者には酸素発生器を入れるのを忘れるな。収納袋の換気口にフィルターがついているか確認しろよ！」

全身防護服の隊員たち十数人が慌ただしく活動している。

「Bチームは例のものを探すんだ。どこかにあるはずだ、必ず見つけろ！」

隊員たちがつぎつぎと家の中を物色していく。かなり手荒い。

「隊長、ありました！」

それは、この家には似つかわしくない重厚な金属製の容器。円筒形をしたその容器の蓋の部分は、強引にこじ開けたような傷が付いている。

軍人らはこの家の住人を運び出し、金属容器を回収すると、家に火を放った。さらに、その村全体を封鎖するとともに、大規模な消毒を行った。

二年半前の新型インフルエンザはこの島でも感染者を出していたが、その人数は少なく、死者も五人ほどだったことを考えると、今回の措置はあらかじめ予想されていたかのように手際が良かった。良すぎたのだ。このことが、後々同国への疑念を招くことになる。

南シグマ共和国の群島の中のひとつに、その存在を公表していない施設が置かれている。その周囲は熱帯雨林で囲まれ、施設の輪郭を上空から確認することは難しい。もしも熱帯雨林をすべて伐採してしまったら、それは明らかに異質に見えるだろう。同国のものとは到底考えられないほどに近未来的な造りなのだ。この島にはもともと少数の農民がいたが、この施設の設置に伴い、全員が別の島へ移された。勿論この農民たちには立ち退きの本当の理由は伝えられなかったが、一年間遊んで暮らせるほどの補償金——といってもわずかだが——を受け取り、文句もいわずに出ていった。むしろ、不満を口にしたのは周囲の島に住む漁民たちだ。この島の周辺は豊かな天然の漁礁になっていて、大型のイセエビをはじめ、さまざまな魚介類が獲れていた。それらは観光地の外国人向けのホテルやレストランが高値で引き取っていた。しかし、軍は島民たちを退去させると同時に、島周辺への立ち入りも禁止した。軍事政権下の同国で、軍に逆らうことはできない。漁民たちはこの島の周辺での漁を諦め、近づくことも止めてしまった。まもなく、あの島では秘密の軍事兵器が研究されているという噂が立ち始めた。

この施設の正体を知っているのは、同国でも国王と、大臣を務める軍のトップなどに限られていた。実は、この施設は同国のものではなく、同盟国である北方連邦共和国のものだ。北方連邦共和国は、人工衛星を打ち上げる技術力と強大な軍事力を持っている。では、ここで兵器が研究されているのかというと、そうではない。インフルエンザ、コロナ、エボラなどのウイルスの研究が行われていた。勿論、ここの充実した設備であれば、細菌やウイルスを使った生物兵器の開発も不可能ではない。しかし、それらの開発とその使用には大きなリスクが伴うばかりか、保有すること自体が国際条約で禁止されている。保有して示すことができないならば、戦争抑止力としても十分には機能しない。事実、北方連邦共和国は、かつては生物兵器開発にも力を入れていたが、国際情勢の変化に伴い、ウイルス研究へ路線を変更した。生物兵器の研究で培った技術力とノウハウを生かして、ワクチンやウイルス感染症治療薬の開発に取り組んだ方が国は潤うと考えたのだ。

ウイルスの研究は二重三重の対策を施した施設でのみ行うことができる。この研究施設は「バイオセーフティレベル4」という最も厳しい基準をクリアしていた。しかし、ヒューマンエラーや自然災害による事故のリスクをゼロにすることはできない。十年前に世界でパンデミックを起こした新型コロナウイルスは、当時、最初の感染者を出した中国のある地方都市に置かれた研究所で人為的に創られた可能性が高いとして、世界中から非難された。このときの教訓として、北

方連邦共和国は自国内にあった研究施設の移転を決めた。それが、同盟国いや実質的には従属国と呼べそうな南シグマ共和国の離島だった。

南シグマ島で輸送機が墜落する三カ月前、北方連邦共和国の山中で新種と思しきウイルスが発見された。同国の著名なウイルス研究者が、誰も近づかない山奥へと調査に赴き、ひっそりと隠されたような洞窟の奥深いところで、コウモリの死骸から採取したのだが、この研究者は、このウイルスを南シグマ共和国へ運び、その正体を詳しく分析することにした。しかし、同国の輸送機は、南シグマ島の滑走路の手前で墜落してしまった。前年十月十日のことだった。

墜落原因は明らかにできなかったが、局地的に発生するマイクロバーストと呼ばれる強い下降気流に巻き込まれた可能性が考えられた。かつて、マイクロバーストによる滑走路付近での墜落事故は各地で繰り返り起きていたが、日本人の研究者がその発生メカニズムを解明し、ドップラレーダーによって可視化されるようになること、これによる事故は急速に減っていった。本来ならば、南シグマ島の滑走路にもそのレーダーは設置されていてもおかしくないのだが、滑走路の整備計画が持ち上がった当時は、離発着する航空機の便数は少ないと見積もられていたため、設置が後送りされていた。今は、急速なりゾート化により、航空機の便数は当初想定されていた倍の数に達している。

一方、ウイルスの輸送には、金属製の頑強な特殊専用容器が用いられた。ウイルスはスクリーナーキャップ付きのプラスチックチューブに入れられた輸送用液体培地に植え付けられ、この特殊容器の中に収納される。この容器は航空機の墜落にも十分耐えられ、専用工具がなければ開封することができない設計になっていた。ところが、そこには設計のエラーがあった。墜落の衝撃には耐え、内部のチューブは守られたが、衝撃を受けた容器は一部が変形し、専用の工具がなくても開けられてしまったのだ。

輸送機に積まれた容器は五本あった。墜落后、全身防護服の軍関係者が四本回収したが、一本は見つけることができなかった。軍が回収した四本の容器は、輸送機の燃料で焼かれて表面が赤黒く変色していた。

輸送機の墜落から六カ月後、その一本は滑走路近くの村に住む男が発見した。自分の畑の中に埋まっていたのだ。墜落の衝撃で一本だけが少し離れたその畑まで飛ばされた結果、その容器は火災の影響を受けなかった。その男は、土で汚れたその容器が、六カ月前の輸送機の事故と関係する物とは思わなかっただろう。自分の畑の中から出てきたのだから、自分に所有する権利があると考えたに違いない。街へ持っていけば、高い値で買い取ってもらえると期待したはずだ。四月末からの大型連休で、大勢の日本人が南シグマ島を訪れていた。南国のリゾート地として、日

本では一番人気の島になっていた。マリンスポーツ、美味しい魚介類、新しいホテルなどが人気だが、多くの人々を魅了したのは、その美しい星空だった。大気汚染とは無縁の島である。周囲には大量の電力を消費する都会はない。観光客向けのホテルやレストランは、この国の観光資源のひとつが星空であることを早くから理解していて、ホテルやレストランの照明は夜空を照らすことがないように工夫されていた。光害のないこの島では、夜になると宇宙空間に飛び出たと錯覚するほどの見事な星空が広がる。

この島へ観光に来るのは、勿論日本人だけではない。近隣の国々をはじめ、世界各国からも観光客が押し寄せていた。

南シグマ共和国は、感染症によるものと思われる最初の死者は、北方連邦共和国から輸送されてきたウイルスが原因だと考え、すぐにその情報を公表しようとしたが、同国との協議に時間がかかった。北方連邦共和国は極秘裏にこの事態を収拾したいと考えていたからだ。そもそも、ウイルス研究において何らかの問題が発生したとき、社会に知られることなく事態を封印するために、この国の小さな島へ研究施設を移したのだから当然だ。

しかし、島民に謎の病気による複数の死者が出ているという噂は、すぐに観光客へ伝わり、SNSなどで世界へ向けて発信され始めている。五月五日、南シグマ共和国は、突然、南シグマ島

に非常事態宣言を発令し、島全体を封鎖状態とした。島から出ることも、島へ入ることもできない。空港と外国航路を航海できる大型船が着岸できる港はこの島にしかないため、外国との往来も封じられた。同国は、ほかの島への感染拡大と、ウイルスの国外への拡散を防止しようとした。

南シグマ島における初期の感染者のほとんどは、空港周辺で農業を営む村人たちだった。同国の指導者たちは、当初、観光客がこの地域へ足を踏み入れることがなければ感染リスクは低いと考えていた。ところが、一部の村人は、観光地のホテルやレストランへ直接農作物を納めていた。新鮮で形の良い作物は、通常のルートで出荷するよりも高値で買い取ってもらえたからだ。大勢の観光客が来るようになるまで、この島の農作物はほとんどが自給自足だった。出荷から販売までのルートも確立されておらず、農作物の種類も限られていた。しかし、観光客を相手にしたホテルやレストランが増えてくると、育てられる作物の種類が増え、それらを集荷、販売しようとする商売人が現れた。これにより、流通ルートができ上がってくると、農作物の出荷は楽になったが、村人の手元に入る現金はあまり増えなかった。そこで、村人たちは特によくできた農作物を、直接ホテルやレストランへ納めるようになっていた。

同国は、村人からホテルやレストランの従業員へ、そして観光客へと感染が拡大していく可能性を懸念し、島の封鎖を決意したのだったが、そのときにはすでに、同島における死者は百人を

超え、最初の死者が出てから八日間が過ぎていた。南シグマ島の封鎖により、大勢の観光客が帰国できなくなった。同国は村人から観光客への感染ルートを徹底して遮断する措置を取るとともに、世界保健機関（WHO）へアドバイスを求めた。しかし、その時にはすでに多くの外国人観光客が帰国済みか帰国の途についていた。たとえば、日本の場合、観光地の人混みを避けて連休前に帰国するという格安料金で組まれたツアーに参加していた観光客がすでに帰国していた。連休に関係ない他国の場合はさらに大勢の観光客が帰国を終えていた。

各国は南シグマ共和国からの帰国者および濃厚接触者の特定、隔離などの対策を急いだが、感染はすでに世界各地で面的に広がりつつある。

南シグマ島で原因不明の感染症が発生しているとの情報を得た日本政府は、大勢の観光客が同島を訪れている大型連休中であることに強い危機感を示した。ただちに内閣総理大臣をトップとする対策本部を設置した。

内閣総理大臣の大賀忠雄がその部屋へ入ると、そこに詰めていた全員が一斉に起立した。その部屋を埋め尽くしていた喧騒が一気に静まる。ここは首相官邸の地下に常設されている危機管理センターの対策本部専用の会議室だ。中央には備え付けのデスクが楕円形に生まれ、それを取り囲むように会議テーブルがいくつもの「島」を作って配置されている。それぞれのデスク

の上には、モニターとマイクが置かれ、四方の壁面のやや高いところには大型のモニターがいくつも設置されている。大賀は会議室を見渡しながら、ゆっくりと中央の席へ向かった。自席から離れていたところで議論をしていた数名が慌てて走る。大賀が着席するのを待って、全員が各々の指定席に着いた。楕円形に配置された本部席に座っているのは、国務大臣たちだ。大型連休の最終日前日だが、すべての大臣が揃っている。その周囲を各省庁の官僚たちが取り巻き、警察庁、消防庁、海上保安庁、自衛隊などのトップらも制服姿で座っている。

大賀は医療用のマスクをつけているが、大臣のほとんどが無防備にもマスクをつけていない。係官が慌ててマスクを配りだした。

「ここは地下の階だが、換気はどうなっている？」

大賀が相手を特定せずに聞いた。

大賀は七十歳の誕生日を目前にしているが、百八十センチの身長にふさわしい頑強な体躯をしている。眼光は温和だが奥底に秘めた厳しきがある。本部席を見渡したが、答える者は誰もいない。

「危機管理は地震や台風といった自然災害だけじゃないだろう」

大賀は独り言のように不満を口にした。

「外国からの武力攻撃には十分な備えを・・・」

そこまで言いかけて口をつぐんだのは右側に座っている防衛大臣の栗田謙司だ。大賀が睨みつける。今、わが国に脅威を及ぼそうとしているのは、ミサイルではない。目に見えない、レーダーでも捉えることができないウイルスだ。

「この会議室は、核攻撃を想定して放射能を除去できる換気装置が設置されています。ウイルス対策にも有効ですから、すでに使用を開始しました。しかし、室内における人と人の接近は大きなリスクを伴います。次回以降は十分に配慮すべきだと思います」

「あなたは？」

大賀が左側の壁際で起立している男に向かって聞いた。その男は薄い空色の作業服を着て医療用のマスクとフェイスシールドをつけている。五十代半ばぐらいか。

「元橋大臣からの指示を受けて参りました、日本感染症総合研究所の小野寺です」

本部席の左側に座り、後ろを振り向いていた厚生労働大臣の元橋七助が慌てて大賀の方へ向き直って説明する。

「このたびの感染症に対して専門家の立場からアドバイスをしてもらうために呼びました。日本感染症総合研究所の小野寺所長です」

「小野寺さんはこの官邸の換気についても詳しいのですか？」

大賀は感染症の研究者が官邸の換気についてなぜ知っているのか疑問に思っただけだ。

「いえ、詳しいわけではありません。ここへ到着したときに、技官の方から放射能除去換気システムを使った方が良いかと質問を受けましたので、使うようにアドバイスをさせていただきました」

大賀は小野寺に向けて、小さくうなずいた。

「全員、マスクをつけたようだ。では始めようか」

第一回対策本部会議が始まった。

まず、元橋が今回の感染症に関するWHOの発表内容を報告した。要約すると次のとおりだ。

南シグマ島における最初の感染者の息子のひとりが命を取り留め、父親がウイルス輸送容器を開けた日にちと発症した日にちが確認できた。これにより、ウイルスを体内に取り込んでから発症するまでの日数は十一日間ということが判明した。父親と息子の発症日の差から、ウイルスを取り込んでから他人にうつす、すなわちウイルスの放出を始める日数が推定できるはずだが、息子も輸送容器に触れていたことがわかり、父親からうつされたのか、輸送容器から感染したのか

ハッキリしない。WHOは、この十一という日数については、極めて稀であるとともに厄介であるとし、最大限の警戒を各国へ促した。

元橋はこの発表内容に少し補足した。一般的なインフルエンザの場合、ウイルスを取り込んでから発症するまでの日数は三〜四日間程度であるのに対し、十一日間というのはあまりにも長く、この間に他人にうつすリスクが大きいことをあらためて主張したのだ。

次に、海外ツアーを所管している国土交通大臣の田中建造がすでに帰国しているツアー客について報告した。その後を引き取り、元橋厚生労働大臣がそれらツアー客の所在と濃厚接触者の調査状況を報告、外務大臣の太田六郎は南シグマ共和国に残されている日本国籍者の数を報告した。これらも要約すると次のとおりだ。すでに帰国しているのは、名古屋の旅行会社が募集したツアーの参加者に限られ、その数は三十五人であり全員の所在が確認できている。帰りの航空経路で彼らと濃厚接触した可能性がある人の特定作業を開始しているが、南シグマ島から日本への直行便はなく、途中で大型機に乗り換えていることから、濃厚接触の可能性のある人数は千人を超える見込である。一方、空港から自宅までの間に接触した可能性がある人たちは特定できていない。帰国者たちが利用した電車の中部国際空港駅の発車時刻を公表し、その電車を利用し、車内で南国帰りと思しき観光客と接触した可能性がある人は保健所に申し出るよう促すことにし

た。空港からタクシーで帰宅した帰国者はいなかった。同国に取り残されている人数は約千人でほぼ全員が観光客である。

帰国済みの観光客およびその濃厚接触者の特定と隔離、外国との往来の規制などの措置については迅速に決定したが、対策本部で議論が紛糾したのは、南シグマ共和国に残された日本人をどのように帰国させるかということだ。

「南シグマ共和国には、南シグマ島に滑走路がありますが、大型機が離着陸するためには滑走路長がたりません。中型機でインドネシアかマレーシアの空港へ運び、そこで大型機に乗り換えるのが現実的です。速やかに実行するためには、中型機数機、大型機三機が必要になる」

「航空機の場合、機内での感染リスクが大きく高まります。ひとりでも感染者がいたら、その機内の全員にうつしてしまう可能性があります」

「全員に防護服を着させれば大丈夫じゃないか？」

「防護服の場合、それを着たり脱いだりするとき感染リスクが高まるそうだ。素人では無理だろう」

「現地で隔離し、こちらから支援班を送ることはできないのか？各自は安全なホテルに滞在しているんじゃないのか？」

「現地の正確な状況が分からない以上、あまりにも危険すぎるでしょう。それに大勢のスタッフを送り出すことになりましたが、それによる感染拡大リスクを高めることにならないか？」

「航空機で帰国させるとして、こちらの空港からその先はどうするんだ？」

打開策がなかなか見えてこない。

その時だ、壁際に座っている小野寺が立ち上がって発言した。

「大型クルーズ船を使つてはどうか？ 幸い、南シグマ島には大型船が着棧できる港と棧橋があるようです。Googleの人工衛星写真で見ることが出来ます。クルーズ船であれば一度に千人を運ぶことができます。こちらを出発して、現地へ到着するまでの間に、船内での感染対策を整え、スタッフの訓練も出来ます」

「肝心のクルーズ船はどうする？ 都合よくどこかに遊んでいる船があるのか？ それに、感染者が出たらどう対応するんだ。船の中で死者が出るかもしれないのに、チャーターできるのか？」

難点を指摘したつもりで発言したのは環境大臣の大泉信次だ。今回のことでは自分の出番がない。自分の存在をアピールしたいのだろう。

「早速、クルーズ船の手配を進めてください」

大賀が議論を断ち切るかたちで明言した。会議室内のざわめきがスーッと引いていく。

「小野寺さん、まだ続きがあるのでしよう。説明を続けてください」

「クルーズ船には、必要な人数の医療スタッフを乗せます。帰りは、発症までの十一日間に余裕を持って、十四日間かけて航行してもらいます。日本に近いところで日数を稼ぐことでもよいでしょう。十四日間で発症しなければ、日本到着時にはそのまま帰宅させることができます」

「途中で重症者が出たらどうしますか？」

大賀の質問に小野寺が応えようとする、右側の「島」のひとつで黒い制服の女が立ち上がった。金色の袖章が付いている。

「海上保安庁のPLH型巡視船を護衛に付けます。問題が発生した際は搭載しているヘリを飛ばします」

本部席右側で田中国土交通大臣がうなずいて了解の意思を示している。

大賀は、この作戦にゴーサインを出した。異を唱える大臣はいない。早速、関係省庁が連携して具体的な作戦を練り上げることとなった。予定されていたすべての審議を終えて、官房長官の江木志功が閉会を宣言した。

大賀が席を立つと全員が起立する。皆が見守るなか、大賀は小野寺の方へ歩き出した。小野寺が身構える。

「今日はありがとう。これからが本番です。引き続きよろしくお願いしますよ」
そういうと、小野寺だけに聞こえるように声を落とした。

「何かあったら私のところへ直接連絡してください。連絡がつかないときや急ぎのときは事後報告でも構いません。大賀の了解はとってあると言いついてください」
「こんな会議を毎回やっていたら、助かる命も助からない」

大賀はこの言葉は飲み込んだ。代わりに

「この部屋の密集改善のアドバイスをしてあげてください」
皆に聞こえるようにいった。

大賀は小野寺の右肩に手をそえると、その場を後にした。

対策本部の決定により、日本政府は南シグマ共和国に取り残されている約千人の日本人を帰国させるため大型クルーズ船を一隻チャーターし、南シグマ島へ派遣する作戦を実行に移した。
以下は、日にちが前後するが、その後の状況である。

感染症対策の専門家をリーダーとして、医師十人と看護師三十人、厚生労働省の職員六人が二班を編成し、船内の治安維持のため、警察官六人が乗船した。操船は船舶会社に任せしたが、そのほかの船内生活に必要なことはすべて自衛隊が担当した。医療器具、薬、防護服キット、消毒

薬、検査装置なども大量に積み込み、船内での検査や治療ができるようにした。準備が整ったクルーズ船は五月八日に日本を出発。五月十六日に南シグマ島へ到着し、日本人観光客ら約千人を収容した。船内では、夫婦やカップルなどに関係なく、一人ひとり別々の個室に収容された。日本までの帰路は十四日間かけて航海し、その間は部屋から一步も出ることが許されなかった。船内での隔離が徹底されたのだ。基本的には、バルコニー付の部屋が全員に割り当てられ、三度の食事も日本にいる管理栄養士が監修した免疫力を高めるメニューにより、十分満足できる質と量で提供されたが、それでも、さまざまな不満が噴出した。しかし、南シグマ島の感染状況が船内テレビで繰り返し放送されると、苦情は徐々に減っていった。日本までの航海の間で発症しなければ、感染していなかったと判断できるが、初日から定期的に感染の有無を確認するためのPCR検査と健康チェックが行われた。幸い、感染が確認されたのは男女ひとりずつで、新婚の夫婦だった。

十四日後、クルーズ船は名古屋港のガーデンふ頭に着岸し、感染が確認された夫婦は厳格な防護措置を施した後、名古屋市内の病院へ救急搬送された。五月三十日のことだった。名古屋港では四百八十人が下船し、翌日、横浜港で残りの五百人が下りて家路についた。帰りの航海中は海上保安庁の大型巡視船がエスコートしたが、幸いヘリコプターを出動させなければならぬ事態は発生しなかった。

先に航空機で日本へ帰国していた三十五人とその濃厚接触者たちは、病院やホテルなどに収容し、一切の外出および家族などとの接触が禁止され、厳しい監視下で十四日間を過ごした後、最終のPCR検査と健康チェックを行い、五月十日には全員が帰宅していた。南シグマ共和国からの帰国者の感染がふたりにとどまったのは、外国人とのコミュニケーションに消極的な日本人の特性が功を奏したのかもしれない。日本政府は、ウイルスの正体が不明であること、すでに南シグマ島で百人以上が死亡していることから、その感染力と毒性は共に強いものと仮定して対策を進めた。

五月中旬に差し掛かると、南シグマ島での感染者、死亡者はさらに増え、同様の症状が周辺の島々でも出始めた。強毒性の新型インフルエンザと考えられる感染症が何の前兆もなく太平洋上の島で突如発生するとは考えにくい。ヒトが感染する前の段階である、鳥、あるいは豚などのインフルエンザも発生していなかった。一方で、最初の死者が出てからの村の閉鎖や消毒などの処置はあまりにも手際が良かった。南シグマ共和国は何かを隠している。疑いの目が向けられるようになった。

南シグマ共和国には、同国が感染の端緒だと世界から非難されることに耐える力はない。また、残っている外国人を速やかに帰国させるとともに、自国民の命を救うためには、事実を公表するしかない。そうすれば、先進国からの医療支援を受けることもできる。北方連邦共和国との

協議はまだ続いていたが、同国は五月十五日になって事実を公表した。今回のウイルスは北方連邦共和国で発見され、自国内にある研究施設で調査、研究するために輸送されてきたものの、輸送機の墜落事故により外部へ拡がった可能性が高いことが公表されたのだ。

輸送機が墜落したのは七カ月前だ。各国はこれまでの間に謎のウイルスの研究が進み、その正体と対処方法がすでに判明していることを期待したが、それは不可能なことだった。北方連合共和国は、輸送機の墜落現場から回収した四本の容器からウイルスを取り出し、その正体を解明しようとしたが、墜落で起きた火災により容器が過熱され、内部のウイルスは死滅していた。このため、最初にウイルスが発見された洞窟へもう一度採取しに行くことが検討されたが、季節は冬に差し掛かっていて、そこはすでに深い雪に閉ざされていた。結局、半年間は何もすることができなかった。

最初の死者から検体が採取できたことで、研究が再開されたものの、強毒性インフルエンザとして知られるH5N1型のウイルスが変異したものである可能性が考えられたが、正確な正体を突き止めるまでには至らなかった。

日本政府は、すでに南シグマ島から帰国していた三十五人とその濃厚接触者約千人の隔離が成功し、これから実行するクルーズ船の派遣作戦と、空港における水際対策がうまくいけば、未知のウイルスの国内への侵入を防ぐことができると考えた。すでに各国は、国をまたぐ移動を厳しく制限していた。

ところが、その恐ろしい情報は思わぬところから伝わってきた。

五月八日、その日は四回目の新型感染症対策本部が開催されていた。初日以降、事案に進展があらうがなからうが、毎日定期的開催されている。小野寺のアドバイスに基づき、本部席はひとりずつアクリル板のシールドで区切られ、周囲の「島」も病室で用いられるようなカーテンレールが天井から吊るされて、透明のビニールシートで区切られている。

対策本部会議が始まると、まず厚生労働大臣の元橋が報告する。

「南シグマ島へ向けて大型クルーズ船クリスタルグリーン号がさきほど横浜港を出しました。五月十六日に現地到着予定です。詳細を担当から報告させていただきます」

壁面の大型モニターには、エスコート船に先導されてゆっくり進むクルーズ船が映されている。リアルタイム映像だ。別のモニターにはテレビ局が取材した出航前の様子が映し出されている。まだ若い母親が赤ちゃんを抱いて、自衛隊の制服を着た夫を涙ながらに送り出すシーンが大写しになった。

厚生労働省の担当官がクリスタルグリーン号の人員、資機材などについて報告を始めると、会議室の奥の扉が静かに開いて、ひとりの男が入ってきた。経済産業大臣のもとへ向かう。大賀の目がその動きを追っていた。

「報告を中断してください。何が起きましたか？」

大賀は経済産業大臣の荒井慎吾に報告を求めた。

「た、ただいま、中央電力からの情報が入りました。同社では最近になって、南シグマ共和国から液化天然ガス、LNGです、これと木質系バイオマス燃料の輸入を始めました。そのうち、LNGの運搬船がすでに愛知県、知多のLNG基地に到着しており、LNGをタンクに受け入れる作業を行っているのですが、体調不良を訴えている船員が複数名いるとのことです」

対策本部がざわつく。

「LNG船は五月五日に到着しています。体調不良が出たのが本日。現在、船員と電力会社関係者との接触の有無など、詳細を確認しているところですよ」

荒井経済産業大臣が報告を終えると、本部席はしばらく沈黙した。

「観光客ばかりに意識を向けすぎていたか・・・」

大賀の声が漏れる。

「仕方がない、続報を待つことにしよう」

愁いを振り切るように大賀が発言して、会議が再開された。

同国からの発電用燃料の輸入はまだ始まったばかりで、その量も少なかったこと、また同国と日本を結ぶ客船や一般貨物船の航路はまだなかったことから、海からのウイルス侵入についてはマークが甘かった。

実は、初回の対策本部で小野寺が人工衛星写真で指摘した南シグマ島の大型栈橋はLNG船のものだったのだが、そのことに気が付いていても、結果を変えることはできなかったと思われる。しかし、そのチャンスは確かにあった。だが、そのことはこの時点ではだれにもわからない。

この運搬船が南シグマ共和国を出航したのは、最初の感染者の死亡が確認された当日であり、複数の感染者が確認される前日のことだった。南シグマ共和国は、運搬船がすでに出港していること、最初の感染者が出た村とその周辺は早い段階で封鎖しており、感染した村民がLNGなどの輸出関係者と接触する機会はないと考えていたことから、この運搬船については問題視することとはなかった。

しかし、村人たちは、自分たちの農作物を観光地のホテルやレストランだけではなく、運搬船へも供給していたのだ。

この運搬船は、南シグマ島が封鎖された五月五日に知多半島のLNG専用棧橋に到着し、その日からLNGを陸地のタンクへ荷下ろしする作業が始まっていた。この作業には通常三日間を要するが、今回は荷役途中の設備不具合により、一日延長していた。その四日目、五月八日に運搬船の船員が体調不良を訴えた。

二年半前の新型インフルエンザのパンデミック以降、荷主である電力会社側の関係者と、運搬船の船員が直接接触する機会は大幅に削減され、大半がオンライン化されていたため、電力会社の関係者の中に濃厚接触者はいなかった。

この続報が対策本部へ届いたのは、その日の報告事項がすべて終わるころだった。対策本部の面々は安堵し、その日の対策本部会議はお開きとなったが、それもつかの間、ウイルスの抜け穴が別のところにあったことが判明した。水先人（パイロット）だ。

日本では「水先案内人」と呼ばれることが多いが、法律用語では「水先人」である。日本では、全国三十五箇所の港や船舶交通が輻輳する水域が「水先区」として設定されており、それぞれの区ごとに国家資格である水先人免許が必要となる。水先人の役割は船長へのアドバイザーとしての位置づけだが、外国船の船長などその水域や港に精通していない場合は、水先人のアドバイザーに頼らざるを得ない。今、LNG運搬船が着積している知多半島は、伊勢三河港区にあり、ここは強制水先区に指定されている。強制水先区は日本の場合十箇所あり、そこでは一定の大きさ以上の船舶には水先人の乗船が義務付けられている。伊勢三河港区の場合、一万トン以上の大型船には水先人が乗る必要があり、LNG運搬船はそれに該当する。この船の場合、三重県の鳥羽沖で水先人が乗り込み、伊良湖水道を通過するところから操舵室に立った。

体調不良を訴える複数の船員のなかに、船長も含まれていた。船長が感染していたら、水先人は濃厚接触していたことになる。

電力会社の関係者のなかに濃厚接触者はいないという報告からわずか一時間後、水先人が濃厚接触していた可能性があるという情報により、対策本部が再招集された。

「濃厚接触者はいないという電力会社からの報告はなんだったんだ！電力会社の確認不足か！」

荒井経済産業大臣が顔を真っ赤にして、報告を上げてきた官僚に向かって激怒した。南シグマ共和国からLNG運搬船が到着しているという情報は緊張して報告した。その後、濃厚接触者はいないということで安堵したにもかかわらず、今度は水先人が感染しているかもしれないという。人間は、緊張が弛緩した状態からあらためて緊張を強いられることに弱い。今度は、一気に怒りにまで突き抜けた。

「水先人と電力会社の間には契約関係はあるのかな？電力会社には報告義務はないかもしれない。むしろ、船員の誰が体調不良かを確認して、水先人の感染リスクに思い至ったのはファインプレイですよ。しかし・・・」

大泉環境大臣がフォローしかけたが、発言が終わる前に元橋厚生労働大臣が指示を出す。

「その水先人をすぐに隔離してください。まだ船にいるのですか？」

「水先人が乗るのは船が到着するときと出発するときだけです。船が着いたのが三日前だと、その日に下船しています。出航時の水先人が同じとは限りません」

国土交通省の「島」の官僚が発言した。

田中国土交通大臣の心臓がバクバク鼓動し始める。水先人を所管しているのは国土交通省だ。田中は大臣になって日が浅い。そのことに気が付いてどっと汗が出てきた。

「い、いそいで水先人を捕まえてくれ！」

田中が慌てて指示を出した。

しばらくして、先ほどの官僚から報告が上がる。

「水先人の携帯へ電話をかけてもつながらないそうです。単身赴任先へかけてもつながらず、東京の自宅へ確認したところ、今日帰ってくる予定とのこと。現在、東京へ向けて移動中と考えられます」

「携帯へかけ続ける。東京へは新幹線か？名前はわかっているな。JRに電話して何とか捕まえてもらえ」

田中の檄が飛ぶ。

「何とかと申されましても・・・」

「車内アナウンスで呼ぶとか、テロップで流すとか、何か方法があるはずだ。考えろ！そうだ、エクスプレスカードを使っているかもしれない。その情報でわかるんじゃないか」

水先人は大型船の船長経験者など一定の要件を満足しないと国家資格を取得できないことから、大型船が入港する各地の港の近くに住居を構えている人は少ない。多くは単身赴任だ。この水先人の自宅は東京にあった。問題の運搬船の仕事を終えた水先人は単身赴任先で二日間を過ごした後、自宅へ戻る途中だった。

結局、水先人と連絡が取れたのは、自宅へ戻ったときだった。水先人の携帯電話はバッテリーが切れていたのだ。新幹線の中で充電すればよいと考えていたようだが、あいにく新幹線はC席しか取ることができず、充電ができなかった。水先人に申し出るように促す車内アナウンスとテロップには寝っていて気が付かなかった。エクスプレスカードを使っていたら、座席が特定できたはずだが、水先人は駅の窓口でチケットを購入していた。

自宅が見える通りまで来ると、救急車が赤色灯を回して停まっているのが見えた。自宅の前だ。水先人は慌てて走り寄った。その時、救急車から出てきた全身防護服の救急隊員三人が水先人を取り囲む。

「近づかないで」

玄関から妻が出てきて叫んだ。

「どうしたんだ。何の騒ぎだ、これは」

「あなたは新型感染症に罹っている可能性があるの。あなたが乗ったLNG船の船長さんが新型感染症で体調を崩されたらしいの」

「え？ 私が乗った時には元気そうだったが・・・」

「今回ののは、発症する前に他人にうつすかもしれないそうよ」

妻が、電話で聞いた内容を説明した。

水先人は自宅へ入ることなく、そのまま救急車へ乗せられた。

品川駅で新幹線を降りた水先人は、JR山手線を使っていた。その電車の中で左手を負傷しており、救急車の中で簡単な手当てが行われた。

水先人が利用した新幹線の座席はC席だったが、B席は空席で、同じ列では、A席とE席が使われていた。前後の列は、JR東海の発券情報では、前の列がA、B、E席、後ろの列がA、E席が使われていた。これら七席の利用者については、三人はエクスプレスカード利用者であり個人を特定できたが、四人は特定できなかった。JR東海は、この新幹線の情報を公表し、特定できなかった四人に名乗り出るよう告知したが、連絡をしてくる者は誰もいなかった。また、品川

駅で新幹線を降りてから自宅までのルートについては、東京都が公表したが、濃厚接触した可能性のある者を特定することは困難だった。

通常、ウイルスが人間の体内に取り込まれても、自然免疫が作用して感染、発症するまでには三日〜四日間程度がかかる。このため、発症するまでの三日間程度は、ウイルスが放出されることは少ないと考えられている。この水先人が隔離されたのは、ウイルスを取り込んでから三日目であり、東京の自宅までの移動の経路でウイルスをばらまいた可能性は少ないと期待された。しかし、残念なことに今回のウイルスは、人体内に入ると爆発的に増殖し、三日目には体外への放出が始まるという特性を持っていることが後日判明する。しかも、症状が出るのは十一日後だ。ウイルスの放出時期が三日目か四日目か、その一日の違いがこの先の状況を大きく変えることになる。

五月二十日、東京の各地で感染者が確認され、その翌日からは日本の各地でも感染が確認され始めた。政府の対策本部は、ただちに国内全域を対象として緊急事態宣言を発令し、人の移動を制限した。

大型連休を自宅でのんびり過ごした柳治は、五月八日に日帰りで東京へ出向いていた。私事旅行扱いだが、東京で開催されていたプラント事故防止のシンポジウムに参加するためだ。本来なら業務上の出張で参加したいところだったが、上司で製造部長をしている細井はそれを認めなかった。柳治の仕事は、製造第一課長としてプラントの生産性を高めることであって、事故防止は安全品質部門へ任せておけばよいというのが理由だ。しかし、その真意はわからない。柳治と細井は以前から馬が合わず、柳治が発案してやろうとすることに細井はいちいち難癖をつけていた。

製造部長の細井弘毅は四十九歳。柳治と同じ年だが、大学院卒の細井は、高専卒の柳治より入社は四年遅い。新入社員の細井が最初に配属された職場は、愛知工場の製造課第一課だった。最初の一年間は交替勤務を行うグループに入り、そこで製造プラントを一から学ぶ。そのグループで職場指導員を務めたのが柳治だった。新入社員の細井は、身長百六十センチの小柄で頼りないくらいに痩せていた。いつもおどおどしていて、先輩からの質問にうまく答えられずよく叱られていた。同い年の柳治は優しく接したが、プライドが高い細井は、同い年で高専卒の柳治から指導を受けることも、柳治の前で先輩から叱られることも許せなかった。

あるとき、細井はエラーを犯した。柳治が教えたとおりにプラントの運転操作をしなかったのだ。一歩間違えば大きな事故になる可能性があった。このエラーについて、上司から叱責を受け

たのは柳治の方だ。新入社員のエラーは、職場指導員の責任だ。柳治はこのことについて細井を責めることはなかったし、そればかりか、自分の指導が不十分だったと細井に詫びた。しかし、細井はこのエラーで自分の評価が下がることを恐れた。同期入社と差がついてしまふ、そう考えたのだ。細井は柳治を憎むようになった。

細井はその後、机上勤務、本社勤務を経て、製造第一課の係長として愛知工場へ戻ってきた。主任になっていた柳治の直属長になったのだ。新入社員のころはおどおどしていた細井だが、係長になった彼は、部下には厳しく上司には従順な典型的な「ヒラメ」になっていた。

その後も直属長―部下の関係はたびたび生まれ、現在の製造部長―製造第一課長の関係になった。細井は現在、製造部長だが、半年前までは本社管理部門のスタッフ課長だった。主力工場の製造部長に就くことができ、大層喜んだのだが、その一年後に四歳年下の柳治が製造第一課長に抜擢されたことが大いに不満だった。だからだろう、柳治が発案する生産性倍増、品質向上、安全文化醸成などさまざまな新しい取り組みのアイデアに難癖をつけ、ブレーキをかけていた。柳治がJR山手線でシンポジウム会場がある新宿へ向かう途中のことだ。

《キーーーー》

「ただいま非常ブレーキが作動しました。つり革などにつかまってください」
自動アナウンスが流れる。立っている乗客は全員が進行方向へ傾いた。

《ガン》

急停止した衝撃で、乗客たちは一斉に突き飛ばされるような状態になった。柳治の隣に立っていた男が、その隣の男に押されて、勢いよく柳治の方へ倒れてきた。柳治は必死で支えようとしたが、六十代後半と思いきその男は、柳治の脇をすり抜けて激しく転倒した。柳治はその男を助け上げ、座席を譲ってもらって座らせた。

「すみません。ありがとうございます」

男は柳治にお礼をいった。左手を負傷したようだ。

「前方の線路内に人が立ち入りましたので緊急停止しました。お急ぎのところご迷惑をおかけいたしました。安全が確認されましたので運転を再開します」

車掌のアナウンスが聞こえてきた。

その日、二十一時前に自宅へ戻った柳治は、入浴の後、居間で冷酒を飲みながら、一日の出来事を妻の美雪に報告していた。愛犬のプーがピタリと寄り添っている。柳治は大の日本酒好きだ。今日の銘柄は『七田』。最近、マイブームになっている佐賀の酒である。『七田』のラインナップの中でも、赤茶色ラベルの『純米七割五分磨き』が一番のお気に入りだ。近年、三〇%精米（三

割磨き）など高精白を売りにしている日本酒が注目される中で、あえて精米を低く抑えて醸すこの酒は、柳治の心に響くものがあった。

翌朝、出社前にコーヒを飲みながらテレビを見ていた柳治は、そのニュースに釘付けとなった。新型感染症に感染した可能性のある男性ひとり、前日に名古屋から東京へ移動していたという。その男が利用していた新幹線の列車番号、号車番号、座席番号、利用区間とその発着時刻、新幹線下車後のルートがテロップで流れていた。

前日に柳治が乗車した新幹線とは違ったが、品川駅到着時刻からすると、一本後の新幹線のように。しかし、品川駅からのJR山手線のルートは、柳治が使ったルートと重なっている。

―自分も感染したのではないか？―

柳治はなぜかそう思った。化学プラントの管理に長らく携わり、数々のトラブルを経験してきた柳治独特のリスク感性が働いたのかもしれない。その日以降、柳治は医療用マスクを着用するとともに、人との接触を極力避けた。電車通勤から車通勤に切り替え、手指消毒を頻繁に行うなど、最大限の配慮を行った。休日の間も家族との接触は避け、食事は別々にとり、寝室ではなく、普段使われていない玄関横の客間を使ってひとりで寝ることにした。この時点では、ウイルス

スを取り込んでから発症するまでの日数は概ね十一日間であると公表されていたが、何日目からウイルスを放出するようになるのかはまだわかっていなかった。

柳治はその週は出勤したが、休日を挟んだ翌週は在宅勤務に切り替えた。在宅勤務へ切り替えるにあたり、柳治は、自分が新型感染症に感染した可能性があることを上司の細井に報告した。細井は激怒した。

「そらみる！東京へなんか行くなといっただろう。会社で同僚にうつしていたらどう責任を取るんだ！ずーっと在宅勤務してろ！二度と出てくるな！」

柳治のことを心配する言葉は一言もなかった。

五月二十日、緊急事態宣言が発令されたその日の朝、柳治に微熱が出た。感染は確かだと考えた柳治は、インフルエンザにも効くといわれる「麻黄湯」を飲み、自宅の客間にこもって、ふたつの資料づくりに専心した。ひとつは、勤務先の製造部門のBCPの見直しである。柳治が担当する化学プラントで生産される化学製品は、さまざまな感染症対策用品の原料素材として必要なものだ。その生産は何としても継続しなければならぬ。三年前に柳治がまとめた感染症対策のBCPは、二年半前に新型インフルエンザが世界的なパンデミックを起こした際に見事に機能し

た。しかし、今回の正体不明の感染症に対しても有効だろうか？ 柳治は南シグマ島で謎の感染症が広がっているというニュースを見たときから懸念を抱いていた。

―あの時は成功に酔いしれたのが良くなかった。確かに有効に機能した面もあるが、反省点もあったはずだ。前提条件と実際のギャップを明らかにして、前提条件どおりでも確実に機能したのか、しつかり評価すべきだった―

柳治が作成したBCPは、強毒性のウイルス感染症を前提条件としていたが、二年半前のインフルエンザは、当初こそ新型ということで世界を震撼させたものの、結局は感染力、毒性ともに季節性インフルエンザと同レベルだった。一見うまく機能していたかのように見えても、強毒性だった場合は破綻していたかもしれない。そして今、世界中に広がっている新型感染症は、強毒性である可能性が高い。現状のBCPでは機能不全に陥る可能性があると考えたのだ。

もう一つは、家庭のBCPだった。家庭だから「事業継続」と称するのは正しくないかもしれないが、柳治は、企業のBCPが必須とされるように、家庭のBCPも重要だと考えていた。

家庭のBCPは、本来ならば、日常の家族の会話のなかで伝えるべきもの、家族で考えるべきものだろう。しかし、半年間も家族の会話を途切れさせてしまった挙句、その後は仕事に忙殺されて、家庭の防災対策を後回しにしてきたという自責の念が柳治を突き動かした。

—どちらから先に手を付けるか—

家族のためのBCPを優先したいのはやまやまだが、基盤があるものを修正し、これを家庭版に応用する方が早いはずだと自分に言い聞かせた。BCPの基本は、まずは、どのような事態が起きるのかを想定することだ。できるだけ悲観的な方が良い。そのような事態に陥ると平常時の活動はできなくなる。取捨選択、集中が必要だ。最少人員で最低限の活動を継続しながら回復に向かうタイミングを辛抱強く待つ。この間は、通常ルートから物資の補給はすべて途絶える。必要な食料や物資の品目と数量を見極め、それをどこに備蓄するか、新しい物への入れ替えをどのように行うかという管理方法も明確化しておかなければならない。肝心なことは、誰がいつ何を行うのかという役割分担を明確にし、さらにはその代行者も決めておくことだ。勿論、BCPが絵に描いた餅にならないよう、定期的に訓練を行い、不備があれば見直しをして、その効果を確認することが求められる。家庭用のBCPも基本は同じだ。

—今回の感染症は、発症したら助かることはないだろう。家族の命を守るために何としても完成させる—

本来ならば、感染が疑われた時から保健所の指導に従うべきかもしれない。しかし、緊急事態宣言が発令されたその日に微熱が出た柳治の場合、どのみち数日間自宅待機することになるだ

ろう。そうであれば、自宅にこもり、これから生きる人たちのためにBCPを作成した方が良い。柳治は、二つのBCPを完成させる道を選んだ。

重症化するまでの秒読みが始まった。残された時間は少しだ。

元看護師の美雪は、自分と娘たちの感染防止に細心の注意を払いながら、柳治の重症化を食い止めようと献身的にサポートした。

客間にこもって五日目の朝が来た。「麻黄湯」をはじめ数種類の市販薬で何とか持ちこたえてきたが、体調は確実に悪化している。

柳治は、一通の電子メールと、スマホのトークアプリにメッセージを送った。電子メールは会社の信頼できる部下宛てに、トークアプリは柳治一家のグループ宛てだ。どちらにも柳治がまとめたBCPが添付されている。

そしてもうひとつ、宙美だけに宛てたメッセージも送った。

―一年半前、宙美を高校受験に行かせなかったことを反省している。宙美の人生を狂わせてしまったのは、お父さんだ。ごめん。でもこれからは宙美の人生を楽しんでほしい―

―宙美の花嫁姿が見たかった。きつと、とてもきれいだ―

柳治はこのメッセージを入力した後、思い直して削除した。

送信が終わると、柳治は玄関脇の納戸から防護服のセットを引っ張り出した。このセットは二年半前の新型インフルエンザのときに買い備えていたものだ。柳治はそのまま自宅で死ぬことも考えたが、医師の診察を受けずに自宅で死ぬと、事件性を疑われて警察の調査が入り、家族に迷惑をかけることになる。そう考えてギリギリのところまで病院へ行くことにしたのだ。病院まで送っていくという美雪を説き伏せて、柳治は自分で車を運転して行くことにした。

車に乗り込む直前、少し離れたところで不安そうに見守っている美雪に柳治が声をかける。

「行ってくる。子供たちを頼む。プーも。さっき送ったメールをしっかりと実践してほしい。ありがとう……」

最後のありがとうは、言葉になっていなかった。美雪の腕の中には、不安そうな眼差しで柳治を見つめるプーがいる。

「大丈夫！」

柳治は精一杯の声を振り絞って、アクセルをゆっくりと踏んだ。

病院までは数分だったが、ずいぶんと長く感じられた。時間の感覚が薄れつつあるようだ。病状が悪化している。駐車場に車を止めると、運転免許証、社員証、保険証などが入ったデイバツ

グを肩から掛け、少しふらつきながら病院の正面玄関から入り、受付へ向かった。白い防護服姿でヨロヨロ歩く柳治を見て、周囲は一瞬時間が停まったようにフリーズする。ほんの一秒くらいの空白の後、周囲がざわつきだす。ひとりの看護師が駆け寄ってくる。柳治の意識はそこでプツンと切れた。

看護師が倒れた柳治の腕で脈を確認する。少し速いが問題ない。

「担架！ 担架を持ってきて！」

そう叫ぶと、その看護師は柳治のデイバッグを肩から外し、中身を確認した。運転免許証がある。「星山柳治」。

看護師はドキリとした。鼓動が早くなる。

―柳治なの・・・―

担架に乗せられて運ばれる柳治の顔を正面から見た。マスクをしているがハッキリわかった―
―柳治だ―

秋田智恵は、柳治と二十数年ぶりに再会した。ふたりは、柳治の会社の青年部が企画したクリスマスパーティーで知り合った。壁際でひとり詰まらなそうにビールを飲んでいた柳治に秋田から

声をかけた。秋田もまた、うるさいほどに盛り上がっている立食テーブルの島々から離れ、壁際へ漂着していた。

柳治は新入社員で、秋田も正看護師になったばかりだった。しばらくして交際が始まったが、お互いの交替勤務サイクルが合わず、会えるのは月に一回ぐらいだった。三年後、柳治が遠隔地へ転勤になると、ふたりの距離は実際の距離よりも離れていった。今のように携帯電話は普及していない。柳治の声を聞きたいときは、独身寮へ電話をかけて管理人から呼び出してもらう必要があった。しばらく文通も続いたが、やがてそれも途切れた。柳治は二十四歳、秋田は二つ年上の二十六歳だった。秋田は結婚を意識していたが、二十四歳の柳治は、その気がまったくなかった。柳治は、秋田のことを彼女ではなく姉のように思っていたのかもしれない。

柳治が新型感染症に罹患したらしいという噂はすぐに近所に広まった。柳治が防護服姿で家を出ていく様子を隣人が見ていたのだ。実際に感染しているかどうかは、柳治の鼻や喉から粘膜を採取して検査する必要がある。しかし、この時点では地元の病院では検査ができず、専門機関へ送る必要があった。このため結果が判明するまでに数日がかかる見込みだったが、豊河市は新型感染症に感染した可能性が高いとして、その日のうちに発表した。

翌朝、星山家の玄関前や庭には石や空き缶などが投げ捨てられていた。美雪たちは家から出ることができなくなった。柳治が残したBCPにも、家で籠城する方法が書かれていた。

―一家そろってこの町から出ていけ！―

こう書かれた張り紙もされた。

「お父さんは電車の中でケガをした人を助けたただけだ！何も悪いことはしていない！」

宙美は叫んだ。心の中ではなく、二階のベランダから近隣の人たちに向けて叫んだ。

病院の入口で意識を失った柳治は、感染症病棟へ移され、応急処置を受けると、しばらくして意識を回復したが、三日後、症状はみるみる悪化しはじめた。新型感染症の正体はまだ判っていない。インフルエンザ治療薬のタミフルやリレンザが日替わりで通常よりも多く投与され、あと対症療法で処置されるのみだ。集中治療室ではリアルタイムにさまざまなデータが取られているが、そのデータは、腎臓、肝臓などの内臓に致命的なダメージが起きていることを示していた。

入院して四日目、柳治は危篤状態に陥った。高熱にうなされながら、「プー。プー。プーは……」と繰り返していた。

「プーというのはお宅のペットですか？ご主人がプーちゃんに会いたがっているみたいですよ。連れてくることはできますか？」

柳治の危篤を知らせる電話で、秋田と名乗る看護師がそう聞いてきた。正体不明の感染症で危篤状態に陥った患者に、飼い犬を会わせることは本来ならあり得ないことだ。しかし、秋田は柳治の最期の願いを叶えたくて病院長に掛け合った。この病院がアニマルセラピーを積極的に活用していることも幸いした。

美雪と宙美、球美の三人は、急いで家を出た。病院までは車で五分もかからない。助手席の宙美の膝の上では、キャリーケージに入れられたプーがおとなしくしている。病院に着くと、三人は一階のロビーで担当の女性看護師に会った。美雪はその看護師の顔を見て驚いた。マスクをしていて顔の半分しか見えないが、それは自分が新人看護師のころにお世話になった秋田先輩だった。

「秋田先輩ですか？」

美雪が恐る恐る聞いた。

「美雪ちゃんよね。お久しぶり。ご主人が大変なことになってしまったわね。何とか持ちこたえてほしいわ。きつと大丈夫よ」

美雪は、柳治と秋田が以前に交際していたことは知らないが、秋田は、柳治と美雪が結婚したことを風の噂で知っていた。

「感染症専用フロアへ部外者は入れないの。ご家族にお会いいただくことができず、ごめんなさいね。ワンちゃんは感染することも、感染を広げることもないと思います。帰りはケージごとビニールで覆いますから、自宅へ戻ったら、感染対策をしっかりとって、ワンちゃんを洗ってあげてくださいね」

秋田は美雪からプーをケージごと受け取ると、柳治のところへ連れて行った。普段なら、久しぶりに会う柳治にプーは大はしゃぎするはずだが、柳治が横たわる様子を前にしてプーはおとなしくしていた。柳治の胸元に乗せられたプーは、「ひゅーん、ひゅーん」と悲しそうな声を上げながら、柳治の顔を舐めた。柳治の口の中へも舌を入れ、閉じられた目も、耳も舐めた。

柳治の意識はかすかに残っていた。

「プー、来てくれたんだね。ありがとう。でも、そんなに舐めるなよ。犬にはうつらないという保証はないんだぜ。それに、ウンチを食べた後じゃないだろうな……」

まもなくして、柳治の全身から力が抜け落ちた。その目からは、涙が一筋流れていた。秋田もその傍らでひっそりと泣いた。

―柳治は美雪ちゃんに持っていていかれちゃったけど、柳治の最期は私だけが看取ることができた―
秋田は独身のままだった。

柳治が自宅にこもってまとめたBCP改訂版は、柳治が最も信頼する部下へメールで送信され、柳治の直上の上司である細井をバイパスして、工場の危機管理部門へ、さらに工場長へ上げられた。工場では緊急事態宣言の発令を受けてすでに二年半前に使用したBCPを実行に移していたが、柳治から改訂版が届くと、工場長はただちにそちらへ切り替えて忠実に実行するよう指示した。

このBCPにより、柳治の工場は新型感染症が終息するまで、一部の生産は縮小したものの主力製品のプラントは操業を続けることができた。多くの工場が操業を全面的に縮小または停止するなかで、それは奇跡的なことだった。これにより、感染拡大防止に不可欠な医療用品の原料素材を社会へ供給し続けることができた。

「お父さん、死なないで。お父さんが死んだら、私はどうすればいいの。お願い、頑張って」
セーラー服姿の自分は、ベッドに横たわる父親に縋り付いて泣いている。

天馬は夢を見ていた。これまでも幾度となく見てきた同じ夢だ。そして、毎回「頑張って」を何度か繰り返したところで目が覚める。

当時、天馬玲奈は高校三年生だった。ひとり娘だ。父親が経営するクリニックを継ぐために、医学部への進学を目指して日夜勉強していた。しかし、父親はその年に流行したインフルエンザに罹り、あっけなく死んでしまった。患者を診ているなかで感染したのだろう。医者の不養生とあってしまえばそれまでだが、天馬の父親世代は、当時、インフルエンザを特別に注意しなければならぬ感染症だと明確に認識していなかった。風邪のひとつぐらいにしか考えていなかったのだ。

天馬の母親はその三年前に不慮の事故で他界していた。

父親が遺したクリニックは、小さいながら地域に根差していた。ここを頼りにしている住民は多く、クリニックの閉鎖はこの地域にとって死活問題になる。クリニックは父親の医学部時代の後輩が継ぐことになった。天馬は、クリニックに併設された自宅に住み続けることもできたが、そこを出ることにした。地域に密着したクリニックは朝も夜もなく患者に対応しなければならぬことを理解していたのだ。自宅はクリニックの後継者に買い取ってもらおうことにした。大学への入学と卒業までに要すると考えられる費用は、これで賄うことができそうだったが、実際には日々の食事にも困るほど、余裕はなかった。

当初は父親のクリニックを継ぐことが天馬の目的だったが、そこは他人のものになった。それに、ひとりの医師が救える命には限りがあることも実感した。天馬の目標は、医師になることではなく、父親の命を奪ったインフルエンザなどの感染症を抑え込むことへと変わっていった。

医学部に合格した天馬は、生活費を補うためのアルバイトと勉強に明け暮れる毎日を送った。友達と遊ぶ余裕はなかった。天馬は美形だ。身長百七十センチ、水泳選手を思わせる引き締まった体躯をしている。アルバイト先ではさまざまな誘いがあったが、すべて断った。そんな天馬の心を癒してくれたのが、一匹のトイプードルだった。高校三年生のときに、息抜きのためにと父親が買ってくれた犬だ。この犬のお陰で、天馬は自らを失うことなく、目標を追い続けることが

できた。そして今の自分がある。天馬にとって、最高の相談相手であり、心の拠り所であり、苦楽をともにする仲間だ。

六年後、天馬は医学部を卒業した。医師免許は取得したが、病院勤務の道は選ばず、日本感染症総合研究所へ入所した。

天馬は、今、南シグマ島で確認された新型感染症に対処すべく、特別チームのリーダーを任されている。

―南シグマ島の新型感染症を日本へ入れてはいけない。でも、それを遅らせることはできても、完全に防ぐことはできない。いつかは日本にも入ってくる。ワクチンと治療薬の開発を同時並行で進めなければならぬ。時間に余裕はない。さあ、どうする―

重い責任が天馬の両肩にずっしりとのしかかっていた。日本感染症総合研究所は、自所での研究開発も行うが、日本全国の感染症関連の研究施設や研究者たちの司令塔の役割も担っている。

その後、日本国内、世界ともに新型感染症は加速的に拡大していった。日本の感染者数は二次関数的な勢いで増加していく、その入口に差し掛かっていた。人の移動制限や店舗等の営業規制

などによりさまざまな業界が苦境に立たされ、世界経済は再起不能と思われるほどのダメージを受けつつある。

南シグマ島にある北方連合共和国の研究施設をはじめ、世界各国の医療機関、研究所がワクチンや治療薬の開発に躍起になっていたが、長いトンネルの先に明かりは見えない。

その日、玄関を開けるとひとりの女が立っていた。柳治が感染して以降、周囲から孤立していた星山家には、新聞は配達されなくなっていたが、郵便だけは届けられていた。宙美はひと気のない早朝に郵便受けを見ることにしていた。

「ワンちゃんを貸してください」

その女は涙ながらに訴えた。大きなマスクをしていて、すぐには誰だかわからなかったが、自分が小さいころにお世話になった近所の大野さんと気が付いた。

「大野さん、こんなに早くからどうしたんですか？」

「娘が新型感染症に罹ってしまいました。昨夜から状態が良くありません。最近では、病院のベッドも一杯で入院させてもらえません。薬は出してもらえましたが効きませんでした。お父さんのルートで罹ったのではないことはわかっています」

「娘さんって、百合ちゃん・・・」

宙美が話し終える前に太田は泣きながらその場に膝間づいた。

「プーちゃんを貸してください。お父さん、プーちゃんの力で助かったんですよ。どうか、百合を助けてください」

柳治は奇跡的に命を取り留めていた、プーに顔や口を舐められた後、急速に症状が回復したのだ。数日後には、すぐにでも自宅へ戻れるほどに回復していたが、しばらく入院を続けることになった。万が一のことを考慮したのと、医師たちにも、なぜ回復できたのか、柳治の身体のなかで何が起きたのか、継続して検査したいという思いがあった。

柳治が助かったという情報は、どこから漏れたのかはわからない。病院の関係者がリークした可能性もあるが、病院関係者もそのことを知っている者は限られていた。あるいは、柳治が重症化したと聞いていた近所の住民が、家族の安堵した表情を見て、勝手に推察したのかもしれない。

「プーがお父さんを救ったのかどうかわかりませんが、大野さんには小さいころにとってもお世話になりました。百合ちゃんとも一緒に遊びました。今から、プーを連れていきます。でも、このことは絶対に誰にも話さないでくださいね」

それから四日後、六月六日の朝、星山家の前に行列ができていた。外が騒がしいことを訝った宙美が二階のベランダから外を見て気が付いた。五十人はいる。まだ、あたりは薄暗い。朝陽が昇るころには行列はさらに延びた。殺気立つ者もいる。美雪が恐る恐る玄関の前に立った。

先頭の女が美雪に泣きついてきた。三十歳ぐらいだろうか。

「息子を助けてください」

すると雪崩を打ったように、助けを求める声が行列のいたるところで沸き起こった。

「夫が危篤なんです。夫に死なれたら、家族は生きていけません」

「母が危ないんです。母の命を救ってください」

もはや、美雪には誰が何を訴えているのか、聞き分けることができない状況だ。

「私は星山君の上司の細井です。息子を助けてください」

中年の男が行列から抜け出して美雪に迫った。小柄でお腹が出ている。柳治が感染の疑いを報告したとき、頭ごなしに罵倒した上司に違いない。柳治と同じ年のはずだが、六十歳ぐらいに見える。

「みなさん、ちょっと待ってください。確かに、夫は助かりました。しかし、それはうちの犬のおかげかどうかは・・・」

「近所の大野さんの娘さんも助かったというじゃないか。偶然なんかじゃないだろう」

「うちの子を見殺しにしないでくれ」

「お願いです」

「私は星山君をいつも評価してきた。大卒じゃないご主人が今の地位にあるのは、私が引き立ててきたからだ」

騒然としてきた。行列はすでに崩れ、家の前に大勢が群がる構図になっている。

そのとき、宙美が玄関前に立った。

「あなたたち、お父さんが感染したときに、さんざん悪口をいった人たちじゃないの！お父さんが感染して、お父さんや私たち家族のことを気遣ってくれた人は誰もいなかった。それなのに・・・」

あとは涙が出て言葉にならない。

玄関前を取り巻いていた人たちは、互いに顔を見合わせたり、うつむいたり、手を左右に振って自分は違うとアピールしたり、さまざまな反応を示した。

そのときだ。

「ちよつと道を開けてください」

甲高い声が響いた。ふたりの警察官に先導されて、よれよれの黒いスーツを着た男が近づいてくる。身長は百六十センチほどの痩せ型で、猫背。五十歳ぐらいだろうか。薄汚れた捨て猫を思わせる風貌だ。後ろには、少し離れて、み空色の作業服姿の女がいる。こちらは身長百七十ぐらい。凜としている。ふたりとも医療用マスクとフェイスシールドをしている。男が身分証明書を右手に持ち、腕を伸ばして高く掲げた。

「厚生労働省のネコタです。新型感染症対策本部長、内閣総理大臣ですな、その命を受けてきました。星山さん、お宅の犬を預からせてもらいます」

高圧的で一方通行ない方だ。胸には「猫田」の名札が付けられている。行列は静まり、全員が猫田を注視する。

「それは・・・」

美雪もどう応えてよいかわからない。

「それは拒否できるのですか？」

宙美が毅然として聞いた。

厚生労働省を名乗るその男は、ちよつと困った表情を見せたが、ひと呼吸おいて甲高い声で一気にまくし立てる。

「内閣総理大臣からの命令だと申し上げた。法的な根拠はまだないが、そんなものどうにでもなる。それに、今こうやって大勢に取り囲まれて困っているのはあなた方だ。近所の人だって迷惑している。このような蜜の状態は厳禁だ。そもそも、あなたのお父さんが早い段階で感染して、国内に感染を広めたのではないかね。あなたたちに拒否することなんてできない」

「お父さんは誰にもうつしていません！」

宙美はハッキリといった。事実、そのとおりだ。

咳払いをひとつして、猫田は続ける。

「とにかく、今、この状況を收拾するためには、私たちにお宅の犬を預けるしかない。悪いようにはしない。私たちは責任を持って預かり、ここの犬を調べて、治療薬を開発する。それで、日本が、いや世界が助かるんだ」

「犬じゃありません。プーちゃんは私たちの家族です。私の妹です」

いつの間にか玄関に珠美が出てきていた。

周りは再びざわめきはじめた。今、この犬を連れていかれたら、私の夫は、私の子供は、もう助からない、そう危機感を抱いたのだ。

「犬を連れて行くのは明日でもいいでしょう。その前に助けてください。お願いします」

「今日一日あれば、この近所の人たちだけでも何とかなるんじゃないか」

「そうだ、そうだ。そのためのご近所だ。ご近所同士で助け合ってきたんだ。私はこの家の旦那さんが入院して心配していたんだよ。外部の人は黙っていてくれないか」

「あなたにこの犬を連れていく権利はあるの？ そんな強引なことは総理大臣でも許されない！」

宙美たちを取り囲んでいた群衆が、一斉に猫田に抗議を始めた。

猫田は後ずさりしながらいつそう甲高い声を上げる。

「すでに内閣総理大臣から命令が出ている。あなたたちの自由にはできない。あなたたちを救うためにこの犬が衰弱したらどうする？ 国は目先の百人ではなく、百万人、一千万人の命を救う道を選んだ。さあ、ここから立ち去って。このような密な状態は違法行為だ。警察の人、いうことを聞かない人は逮捕して」

この様子を見ていた警察官は、戸惑った表情で隣にいる作業服姿の女を見た。女が宙美に近づいていく。

「私も犬を飼っているの。シヨコラって名前。プーちゃんのこと、私が大切に守りますから」
殺気すら感じる荒々しい雰囲気の中、落ち着いていて柔らかな口調だった。マスクで顔はよくわからないが、三十代半ばだろうか。胸には、「日本感染症総合研究所」の名札が付けられている。天馬というらしい。

警察官たちは、集まっている人たちに自宅へ帰るよう促した。少しずつその場を離れていくが、大半の人たちは、途中で何度も未練を残した表情で振り返った。細井も渋々その場を離れた。最後に美雪を見たその目には、未練ではなく恨みが宿っていた。

その日の午後、二台の白バイに先導されて黒塗りのワゴン車が星山家の前に横付けされた。後ろにはパトカーもついている。白バイとパトカーには愛知県警の表示がある。

ワゴン車のスライドドアが開き、作業服姿の天馬が降りてきた。猫田の姿はない。パトカーからもふたりの警察官が降りて周りを警戒する。ワゴン車の運転手と助手席の男は特殊部隊のような服装だ。

天馬が玄関のインターフォンのボタンを押す。

「しばらくお待ちください」

インターフォン越しに返事があった。

しばらくして、美雪、宙美、球美の三人が玄関から出てきた。美雪がプーを抱き、宙美はキャリーケージを、球美はプーが大好きな餌の袋を握っている。

プーはただならぬ雰囲気を感じておとなしくしている。

「この車には大きなケージが設置されているの。だからそのケージは必要ないかな」
宙美がぶら下げているキャリーケージへ視線を落としながら天馬が優しくいった。

「どこまで行くのですか？プーは使い慣れたこのケージの方が安心するはずです」

宙美を安心させようと天馬が穏やかに語りかける。

「そうかもしれないわね。でもね、この車は特殊車両なの。VIP用を改造して、外からの攻撃や事故にあってもケージは守られるようになっていたの。だって、プーちゃんには百万人、世界的には何億人も命がかかっている。それにね、プーちゃんを横取りしようとする動きがあるかもしれない。だから到着するまでは、このケージの中に入ってもらわないと困るの。そうそ

う、行先は長野県阿西村よ。ここからだど二時間ぐらいかしら。でも、その場所は秘密だからね」

普段、阿西村へは三時間はかかる。しかし、緊急事態宣言により、一般道はガラガラだ。高速道路は許可された車しか走っていない。二時間もあれば到着するだろう。

上空にヘリコプターの音が聞こえてきた。宙美たちが見上げると、そこには自衛隊のヘリコプターが飛んでいる。

「上空からもプーちゃんを守るわ」

天馬は自信を示した。

プーとのしばしの別れの時が来た。

「プーちゃんを傷つけたりしないですよね。いつ戻してくれますか？無事に返してください」

宙美はきつい口調で、訴えかけるように聞いた。

「一週間ぐらいお借りします。大丈夫です。プーちゃんからは、唾液やおしっこをいただく程度です。傷つけたりはしません。」

「血液は少しいただく予定だけど」

天馬はその言葉を飲み込んだ。

「私も一緒に行っていていいですか？その方がプーちゃんも安心する」

宙美の目が、まっすぐ天馬を睨んでいる。天馬も宙美の澄んだ目を見た。少し間が開く。

「そうね、そうしていただこうかしら。お母さん、娘さんをお借りします。帰りは警察の車で送り届けますから安心してください」

天馬は宙美の表情から強い意志を感じ取って了承した。

宙美はキャリーケージをワゴン車の二列目の奥に突っ込み、そのまま二列目のシートに座った。横には特殊構造のケージが備え付けられている。

「では、参ります。プーちゃんをお預かりします」

プーは美雪から宙美へ渡され、特殊ケージへ移された。

「ひゅーん、ひゅーん」

悲しそうなプーの鳴き声が響いた。

「これ、プーちゃんが大好きな餌です。多分ドックフードはこれしか食べません。ササミは食べるけど。それと、これも一日一回食べさせてあげてください」

球美はそういって、ドックフードの入った袋と、黒い塊の入った袋を天馬に手渡した。天馬はそれを受け取ると、三列目に乗り込んだ。

「さあ、急ぎましょう」

天馬の合図でワゴン車の電動スライドドアが閉まり始めた。

ピーピーピー

ドアが閉まる瞬間、プーが「ワン」と大きく一回吠えた。プーが強い決意を示したかのようだ。美雪が球美の肩を抱き寄せた。ふたりは車が見えなくなっても、しばらくその場に立ち尽くしていた。

ワゴン車は、二台の白バイに先導され、後ろはパトカーに守られて走り出した。上空からは陸上自衛隊の多用途ヘリコプターUH-60JAが見守っている。特殊ケージの中のプーは、中央に置かれたクッションの上で丸まっている。

「この特殊ケージはね、上下と四方に特注のエアバッグがセットされているの。事故などで衝撃を受けると、プーちゃんはケージの中央部分にできる空間で守られるという仕掛けになっているわ」

天馬がそう説明した。

「あなたのお名前、まだ聞いてなかったわね」

高速道路に乗ると三列目のシートから天馬が聞いてきた。

「そらみです。宇宙の宙に、美しいと書きます」

宙美は答えたが、その目はプーの方を向いたままだ。

「宙美ちゃんっていうのね。高校生？」

「二年生です」

「宙美ちゃん、今の感染状況は知っている？」

「国内の感染者は七百六十万人。死者は七万人だと思います」

宙美は今朝のニュースでアナウンサーが話していた数字を答えた。その目は、相変わらず隣のケージでうずくまっているプーを向いたままだ。

「そうね。その通り。でもそれは昨日の数字。感染者は指数関数的な勢いで増えているから、今日の夜にはもっと増えているわ。それにね、その数字は事実を表していないの。報道されている人数は、感染者数の場合は病院の検査で判明した数。死者は行政が把握できた数なの。すでに病院は一杯で入院が困難になりつつあるわ。国はホテルや自衛隊の施設なども使って何と

か受け入れようとしているけれど、感染者が増えるスピードに追い付いていない。自宅で耐えている人や、自宅ですでに亡くなっている人がたくさんいるはずよ。だから・・・、プーちゃん人は人類の希望なの」

宙美は黙って聞いている。天馬は続けた。

「あなたのお父さんが感染したという情報はすぐに新型感染症対策本部へ報告されたわ。愛知県豊河市在住の星山柳治、四十九歳。国内感染第一号の水先人と東京で濃厚接触の可能性あり、とね。その水先人が東京の自宅へ戻る経路と、お父さんの東京出張の経路が重なっていた可能性が考えられたので、お父さんは濃厚接触者の候補としてリストアップされたわけ。あなたのお父さんは立派ね。発症する前から自らを隔離状態に置き、実際誰にもうつさなかった。水先人は五月二十四日に亡くなった。六十七歳だった。その年まで、現役で働いていたのね。でもね、今回の新型感染症は、高齢者だけが重篤化しやすいというものではないの。サイトカインストームといって免疫が過剰に反応する現象があつてね、若い人でも重篤化しやすいというデータも出ているわ。だから、私たちは、一旦重篤化したあなたのお父さんはもう助からないと考えていた。ところが回復したというレポートが届いて私たちは驚いたわ。早速、病院へ問い合わせをした。どんな治療をしたのか確認するためにね。そしてまた驚いたの。犬が舐めて直したというのだから。私たちはそれは何かの偶然だと思って、病院から詳しい治療情報を

取り寄せた。そのデータは、治癒不可能ということを示していた」ひと呼吸開いた。「三日後、あなたの家の近くで、犬によってもうひとりの少女が生き返ったという報告が入った。」

生き返ったわけではないが、天馬はそう表現した。

―いつ死んでもおかしくない、瀕死の状態だったのだろう―宙美は百合のことを思い出していた。

―幼いころはよく一緒にママごとをして遊んだ二つ下だったかな。私がいつも母親役だった。百合ちゃんとはいつから遊ばなくなったのだろうか？ そうだ、妹の球美と遊ぶようになってからだ。百合ちゃん助かって良かった―

「その子が助かったという情報は、SNSにアップされていた。もちろん、本人や家族がアップしたのではないのよ。その子のことを心配していた友達がアップしたらしいわ。この情報を得た私たちは、早速動いた。あなたのお父さんの情報は極秘扱いで一部の人しか知らないはずだけど、その子のことはネット上に出してしまった。私たちは、家族に事実を確認して、ネット上の投稿をすべて削除するように動いた。でも、さすがネット社会ね、少し遅かったわ。今朝、あなたの家の前には百人以上が集まっていたものね。私たちは大きな危機感を持った。このまま放置しておいたら収拾がつかなくなる。もしかしたら暴動が起きるかもしれない。人類の希望を失うか

もしれない。だから、今日はちょっと強引だったけど、プーちゃんを引き取りに来た。何度もいうけど、この子は人類の希望なの」

「プーちゃんが人類の救世主になるかもしれない」

宙美はそう思うが、うれしさよりも、不安の方が大きい。

「こんなに小さいのに。まだ一歳にもなっていないのに」

「トイプードルの唾液には、今回の新型感染症に効く特別な成分が含まれているのではないかと期待して、早速何匹も試してみたの。でもね、治癒するどころか、トイプードルにも感染するところがわかったわ。犬は感染しても発症はしないけれど、ウイルスのキャリアになる可能性はある。だから、プーちゃんの情報も拡散して、マネをする人が出てくると、かえって感染を拡大させてしまうことになりかねない・・・」

その後も、天馬は新型感染症についていろいろなことを話し続けた。海外における感染状況、ウイルスの正体についての研究状況、ワクチンや治療薬の開発状況などだ。宙美に向けて話しているというよりは、自分のなかで情報を整理するために話しているようでもあった。

「H5N1というのはね、人から人へ感染する新型インフルエンザとなった場合、人類にとって脅威になる可能性が高いとして、以前から最も恐れられてきたものなの。インフルエンザウイルス

スは抗原性の違いから、A型、B型、C型、D型に大きく分類されるわ。日本国内で主に冬に流行する季節性インフルエンザは、人から人へ感染し、その原因ウイルスは、A型のH1N1、同じくA型だけどH3N2、これはA香港型ね。そしてB型の3種類ね。鶏に対して高い病原性を示すウイルスに変異したものを高病原性鳥インフルエンザウイルスというのだけど、鳥から人への感染事例が報告されている高病原性鳥インフルエンザとして、H5N1はとても恐れられているわ。幸い、H5N1については、人から人への感染は食い止められているけど、新型インフルエンザとして人から人への感染が現実化した場合には、未曾有の被害がもたらされるわ。二十世紀に大流行した新型インフルエンザでは、一九一八年のスペインインフルエンザ、通称スペインかぜで全世界人口の二五〜三〇%が発症し、約二千万人から五千万人が死亡、一九五七年のアジアインフルエンザ、通称アジアかぜでは百万人から四百万人が死亡、一九六八年の香港インフルエンザ、通称香港かぜでも百万人から四百万人が死亡したと推計されているの。四十年から十年ぐらいの間隔で発生しているわね。新型インフルエンザ発生による日本での健康被害をかつて厚生労働省が試算したことがあるの。それはね過去に発生した軽度から中度の弱毒型の新型インフルエンザを参考にして試算したものだけど、それでも罹患者数三千二百万人、死者数十七万、六十四万人と想定されたわ。強毒性のH5N1新型インフルエンザだったらさらに甚大な被害が出るはずね」

今回のウイルスの正体は強毒性インフルエンザH5N1に分類されるものだとえられるが、複雑な変異をしているようで、核心の部分はまだつかみ切れていないらしい。

宙美は天馬の話しをいつの間にかほとんど聞き流していた。難しい話を聞くほどに、プーのことが心配になってきたのだ。

一時間後、プーと宙美を乗せたワゴン車は、ウインカーを左に出すと、中央自動車道の恵那峡サービスエリアに滑り込んだ。

「休憩じゃないの。トイレはもう少し我慢してね。長野県に入ったから、先導の白バイと護衛のパトカーが、長野県警へ交替になるの。面倒くさいわね」

三列目のシートから一方的に話し続けていた天馬が、少し身を前に乗り出すようにして宙美に話しかけた。

プーを連れていく研究所までは、高速道路で愛知県、岐阜県、長野県を經由しなければならぬ。ワゴン車の護衛について三県の県警本部が協議した結果、岐阜県警は周辺的一般道を警戒するという理由で、高速道路の護衛を愛知と長野の両県へ委ねた。この結果、長野県警は全長約9kmの長さを誇る恵那山トンネルの警備も引き受けることになり、警備上最大級の警戒を要する

と判断して、愛知県警からの引継ぎポイントを、恵那山トンネルの手前にある恵那峡サービスエリアに設定していた。

サービスエリアの施設や店舗の照明は点いているようだが、人はほとんどいない。駐車場には大型トラックが数台止まっているが、これは、緊急事態宣言に伴う移動制限下で、許可を受けて医薬品や生活必需品などを輸送するトラックだろう。

ワゴン車はスピードを徐々に落としていく。前方に警察官の姿が見えてきた。長野県警の車両もある。

そのときだった、駐車場の端に止められたバンタイプのトラックの荷台から男がひとり転げ落ちた。警察官の制服を着ている。手足は縛られ、口はテープで塞がれているようだ。その状況は天馬たちには見えていなかったが、上空の陸上自衛隊ヘリコプターUH-60JAが捉えている。ただちに、ヘリコプターからワゴン車と後ろを護衛しているパトカーへ専用の特殊無線が入る。

「前方の長野県警は何者かと入れ替わっている可能性があります」

パトカーはすぐさま加速し、ワゴン車と白バイの前へ出た。二台の白バイは左右に分かれ、ワゴン車の両脇をガードする隊形を取った。前方でワゴン車を止めようとしていた数人が左右に散る。ワゴン車は、その場を振り切るようにさらに加速すると、一気に本線へ抜けていった。

蹴散らされた男たちは、すぐさま長野県警のパトカーや白バイで後を追おうとしたが、UH―60JAが急降下して威嚇した。ヘリの隊員が重機関銃を向けている。男たちは両手を挙げて降参の意思を示し、パトカーと白バイから離れた。重機関銃はそれらを容赦なく撃ちぬく。一台のパトカーから火が吹き上がった。

この状況はすでに長野県警へ通報されているはずだ。しかし、県警の応援部隊が到着するまでにはもう少し時間がかかるだろう。UH―60JAはやむなくその場を離れ、高度を上げるとワゴン車の後を追った。今はプーを守ることが最重要任務だ。

プーの奪取に失敗した男たちはUH―60JAが高度を上げると、一台のトラックに乗り込み、その場を離れた。十五分後、駆け付けた県警の部隊によって、止まっていたトラックの荷台に閉じ込められていた警察官らが救出された。行方をくらませたトラックは、高速道路の通行許可記録や、自動車ナンバー自動読取装置、通称「Nシステム」で所有者や位置を確認できると考えられたが、発見することはできなかった。

ワゴン車は、家を出てから二時間後に目的の研究施設に到着した。入口の門柱には「日本感染症総合研究所・高度研究センター」のプレートが掲げられている。両脇には自衛隊員が小銃を抱えて警備している。日本とは思えない光景だ。

ワゴン車が門の手間に止まると、自衛隊員が近づいてきて車の中を確認する。天馬は車を一旦降りて隊員へ身分証明書を提示すると、入口ゲート脇に設置された指紋認証システムに掌をかざした。

「後ろの席に移ってもらえる」

そういって、宙美と席を交代し、ゲートが開くのを待つ。認証自体は瞬時に行われるが、遠隔監視カメラ四台の映像をAIが分析し、保安員が確認するため時間がかかる。三十秒後、ゲートが開くと、先導してきた白バイ二台とヘリコプターは引き返していった。ワゴン車とパトカーは敷地内へ入ったが、建物らしい建物は見えない。二百メートルほど進むと、道路の左右に駐車場が現れ、その先にもうひとつのゲートが見えてきた。

天馬はワゴン車の窓をスイッチで下げると、窓から顔を突き出し、個人認証システムを覗き込んだ。こちらのセキュリティシステムは顔認証が採用されている。ゲートはすぐに開き、二台の車はゲート先のスロープを地下へ降りて行った。

「ここはね、地下研究施設になっているの。何かあったときに、施設ごと隔離できるでしょ。もともとは水力発電所があったところみたい。発電所があったところだから、地震にも強いらしいの」

天馬が解説する。この説明がなければ、ここへ足を踏み入れる人の多くが、もうここからは出られないのではないかと錯覚してしまうだろう。そう思えるほどに異次元の世界だ。ワゴン車は地下の車寄せに着いた。

入口の自動ドアが開き、天馬と同じ作業服を着たふたりの男がストレッチャーを押し近づいてきた。その上には小型のケージが固定されている。

「お疲れさまでした」

男たちが天馬に挨拶する。

天馬は軽く会釈すると、車の中の宙美に向かって話しかけた。

「プーちゃんをこちらのケージに移してほしいの」

宙美はワゴン車のケージの中からプーをそっと出して抱いた。車を降りて、ストレッチャーのケージへ移そうとすると、プーが激しく暴れた。危うく落としそうになったが、ぎゅっと抱きしめて静かにさせた。

「プーちゃん、大丈夫だよー

新しいケージに移されたプーは、ケージを前足でガリガリと搔いたが、宙美と目が合うとおとなしくなった。

「ここまで付き合ってくれてありがとう。おかげさまで、無事にプーちゃんを連れてくることができたわ。ぷーちゃんのキャリーケージは帰りまで預かっておくわね」

天馬はそういつて入口をくぐった。プーを乗せたストレッチャーが続く。宙美はプーの餌を持ってそれに続いたが、入口ロビー先のゲートのところで警備員に制止されてしまった。

天馬が急いで宙美のところへ戻ってくる。

「ごめんなさい。あなたが今日ここへ来ることは急に決まったでしょ。事前の入所手続きが間に合っていないみたいなの」

天馬が申し訳なさそうにいった。

「中へは入られないのですか？プーちゃんがどんなどころへ連れていかれるのか見ておきたいのですが」

宙美は少し不満げだ。

「この手続きは厳格なの。それにね、中の施設や研究設備には秘密のものが多くて、ほんの一部しか見せてあげられないの。プーちゃんが入るところは無理ね」

天馬は研究所のセキュリティの厳格さを説明した。

「プーちゃんは私の妹。私たちの家族です。家族でも見られないなんて・・・だったら」

その先を宙美が話す前に、天馬が右手を少し挙げて遮った。そして、小さな声で話しかける。

「わかったわ。だったら、写真を送ってあげる。でもこれは内緒よ。特別。届いた写真は、誰にも転送したりしないでね。SNSなんかにはアップしちゃダメよ」

そういうと、天馬はほかの職員たちに先に行くように手で合図した。宙美はこの提案を受け入れるしかなかった。ゲートをくぐってプーが見えなくなる瞬間、宙美は大きな声で叫んだ。

「プーちゃん！」

プーがケージをガリガリこする音が聞こえてきた。宙美とふたりになった天馬は、自分のスマホを胸ポケットから取り出し、トークアプリで宙美と友達になった。天馬のトークアプリのプロフィール写真は、トイプードルだ。

「私もトイプードルを飼っているっていったでしょ。もうお婆ちゃん。私はシヨコラを大切にしている。だから、プーちゃんを傷つけるようなことはしないわ」

―私は犬派。猫派の猫田なんかには好きにはさせない―

この言葉は、宙美に不安を与えるだけだと察して、グツと飲み込んだ。

宙美はプーの好物の餌が入った二つの袋を天馬に委ねた。

研究所の事務棟から奥の研究棟へと向かった天馬は、途中でストレッチャーからプーが入っているケージを外し、それを持ってエアシャワールームに入ろうとした。そこには、厚生労働省の猫田が待ち構えている。

「あなたの仕事はこの子を飼い主から引き離すことで終わったはずよ。ここから先は私たちが研究者の仕事。邪魔しないでください」

天馬は猫田に向かって不機嫌そうにいった。

「上からサポートするようにいわれてね」

―犬派のお前じゃ、どうせ中途半端な検査しかできないさ。猫派の俺が監視して、この犬をとことん調べるように仕向けてやる。それに……―

猫田はそう考えていた。天馬と目が合った猫田は、心の中が見透かされたような気がして、作り笑いをした。

「ところで、それは？」

猫田は天馬が手に持っているビニール袋を指さした。

「この子の餌よ。これが大好物らしいの」

「ひとつは市販のドックフードみたいだな。でも一旦開封したやつはダメだ。同じ銘柄のものを俺が調達してこよう。もうひとつは？」

猫田はそれを強引に天馬からひったくると袋の口を開けた。

「うわっ、なんだ！これは？こんな得体のしれないのもの、この先のバイオクリンルームへは持ち込めない。俺が処分しておいてやるよ」

「ちよつと、この子にはそれが必要なのよ」

天馬は取り返そうとしたが、猫田はさっさとその場を離れて事務棟へ戻ろうとした。

「もつとおいしい餌を調達してきてやるよ」

猫田は振り向きもしない。いや、振り向けないのだ。その目が笑っている。

「捨てちゃだめよ。事務棟の冷蔵庫に保管しておいて」

猫田の背中に向かって天馬は怒鳴った。

宙美　―躍動―

「ご自宅までお送りします」

玄関ホールから出てきた宙美に、パトカーの警察官が話しかけてきた。宙美が乗ってきたワゴン車はその場にはもうなかった。

「ありがとうございます・・・」

そういつて宙美はパトカーの後部座席に座ったが、あとは無言を続けた。宙美は、不機嫌だったわけではない。静かに目を閉じて考え始めた。パトカーの運転席と助手席の警察官は宙美を氣遣って話しかけることはなかった。

―あの特殊な能力はプーだけのもののだろうか。犬が飼い主の顔を舐めることはよくあることだ。ほかにも同じような能力を持った犬がいたとしたら、新型感染症から人を救ったという話しはほかでもあるはずだ。だけどそんな噂は聞こえてこない。プーだけが特別なの？―

―アツ！―

思わず声が出そうになった。

「プーは「青」だった。ほかに一緒に生まれた「赤」と「黄色」がいる。その子たちはどうだろう。「赤」と「黄色」にも同じ能力があるかもしれない。もしもそうだったら・・・やばい・・・」

夕方、パトカーに送られて自宅に戻った宙美は、玄関でマスクを外し、手洗い・うがいを済ませると、すぐに母親の美雪と妹の球美を集めた。

「なんだかすごいリーダーシップねー」

美雪はそう思った。うれしかった。

「プーちゃんのほかに、赤と黄色がいたんでしょ。その子たちにも、プーちゃんのような能力があるんじゃないかって思ってた」

「それはあるかもね」

球美が興味を示した。

「今朝、あの人たち、プーちゃんを横取りしようとする動きがあるかもしれない、そういつていたでしょ。実際に今日、高速道路のサービスエリアで怪しいやつらが警察官を装ってプーちゃんを奪おうとした。だから赤と黄色が危ないと思う。お母さんがアップしたSNSで、プーをどこかで購入したかわかっちゃうとヤバいと思うんだけど大丈夫？」

宙美の問いかけに、美雪は慌ててスマホを手にした。

過去の投稿を読み返したが、美雪の投稿内容からでは、ブリーダーを特定することはできそう
ないと思われた。しかし・・・

「プーちゃんを譲り受けたあの日、ブリーダーさんが私たちの写真を撮ったわ。ホームページに
アップしたいといっていた」美雪は思い出すと、急いでブリーダーのホームページを開いた。ま
ず目についたのは、「ブリーダー業務は当面の間休止します」という投稿だ。一日前に更新された
ままだ。そのことを美雪が話すと、宙美は「ちよつと貸して」といってそのスマホをつかみ、す
ごい勢いでスクロールしながら確認していく。過去の投稿記事はまだ残っている。「豊河市のHさ
んの子どもになりました」という投稿を見つけた。

―やばいかも―

美雪は早速、ブリーダー宅へ電話をかけたが、何回コールしても出ない。

「今から行ってみようよ」

宙美はそう提案したが、外はすでに薄暗くなっていた。美雪は少し思案して答える。

「明日の朝一番で行ってみましょう。今からだと、もしも何もなければブリーダーさんに迷惑を
かけることになるから」

宙美は不満だったが、美雪の次の言葉で諦めた。

「それに、ブリーダーさんのところで、赤や黄色の飼い主さんのことを聞けたとしても、この時間からじゃ動けないでしょ」

その晩、宙美は天馬へトークアプリでメッセージを送った。

「プーちゃん、元気になっていますか？泣いていませんか？ゴハンは食べましたか？」

長い一日だった。ベッドの中で眠りに落ちる前にスマホを見たが、天馬からの返信はなく、宙美が送ったメッセージに既読マークも付いていなかった。

翌朝、宙美たちは美雪が運転する車でブリーダー宅へ向かった。助手席に宙美、後部座席に球美が座った。移動中、宙美のスマホにトークアプリの着信があった。

「プーちゃん、元気ですよ。朝ゴハンもちちゃんと食べましたー
そう書かれていた。」

「プーちゃん、元気だった」

宙美はうれしそうに報告した。

自宅を出て四十分ほどでブリーダー宅の前に着いた。門は閉じられている。宙美は車を降り、門の前に立って敷地の中を見渡したが、変化は感じられない。遠くで犬の鳴き声がある。美雪が降りてきて、そこから電話をかけるがやはりつながらない。

門扉に鍵はかかっていた。宙美が門扉を静かに開けると、後部座席に座っていた球美が慌てて車を降りてきた。三人は恐る恐る奥へ進み、玄関の前に立ち止まった。美雪が宙美に目配せをする。宙美が一呼吸おいてチャイムを押した。

ーピンポーン、ピンポーン・・・ー

宙美の心拍数が上がる。五回鳴らしたところで、中から返事があった。

「どなたさまですか？」

女性の声だ。

「十月にこちらのトイプードルをいただいた豊河市の星山です。ご無沙汰しています」
美雪はほっとした様子で返した。

「あら、星山さん、お久し振り。ちょっと待ってね」

玄関はすぐに開いた。

「こんなに早くからどうしたんですか？何かあったの？」

ブリーダーのお母さんの問いかけに宙美がすかさず答える。

「とりあえず中に入れさせてください。誰かに見られたくないので」

三人は、プーを譲り受けたときの対面室に案内された。宙美と球美は初めて入る部屋だ。美雪は、プーが夫の柳治を救ったことについてブリーダーのお母さんに説明した。

「やっぱり青だったのね。飼い主を助けた犬は青じゃないかって、主人と噂していたの。たしか、名前はプーちゃんでしたよね」

お母さんは手元の小さい手帳を見ながら、少し興奮気味に答えた。手帳には自分たちが譲り渡した犬の名前が記入してある。飼い主がホームページへアップする近況から名前を把握して、こまめにメモしているようだ。自分の子を送り出したという愛おしさがあるのだろう。

「でも、赤と黄色の飼い主さんからは、そんなすごい能力について報告はないし、噂も聞こえてこないわね。赤はアカネ、黄色はジョンという名前よ」

ブリーダーのお母さんは、少し残念そうだ。

「そうですか。ところで、なぜ電話に出られないのですか？ 昨夜にもかけたのですが。ちょっと心配になりました」

宙美が聞いた。

「トイプードルが新型感染症の重症患者を救ったという噂が流れたでしょ。そうしたらすぐにトイプードルを譲ってくれとか、貸してくれという問い合わせがひっきりなしに来るようになったの。中には百万円出すから売ってくれという人もいたわね。今お譲りできるトイプードルはいませんと断ってもね、とにかく一度見せてくれとうるさいの。あまりにもうるさいから、今日でも電話線を引き抜いてやろうと思っていたところなの」

宙美たちはお母さんの話しぶりにクスツと笑ってしまった。

「アカネちゃんとジョン君はどうしているのでしょうか？ちよつと気になることがあります。

アカネちゃんとジョン君の飼い主さんに急いで連絡を取りたいのですが・・・」

宙美が心配そうな表情で聞いた。

「何か問題も起きているの？」

「実は今、うちのプーちゃんは国の感染症研究施設に預けてあるのですが、プーちゃんを横取りしようとしている動きがあるのです。きつと、どこかのヤバイ組織だと思います。もしもアカネちゃんやジョン君にもプーちゃんと同じような能力があるとしたら、強引に連れていかれる、要するに誘拐される可能性があります。プーちゃんは一週間ほどで帰ってくる予定ですが、誘拐されたら、戻ってくることはないと思います」

「そんな恐ろしいことが……。わかりました。早速、飼い主さんたちに連絡してみましよう」
ブリーダーのお母さんは、そういうとメモ帳を開いてスマホを手にした。

「スマホも持っているんだ。そりゃそうだよねー」

宙美は肩透かしをくらった感じた。

「……そうですか。それはお気の毒さまでした」

宙美たちはお母さんの通話に聞き耳を立てていた。どうやら、ジョンの家らしい。

電話は三分間ほどで終わった。

「ジョン君の飼い主さん、お父様がね、新型感染症に罹ったそうなの。トイプードルが新型感染症の患者を回復させたという噂は知っていたので、ジョン君で試してみたそうだけど、効果はなくてね、お父様は亡くなられたそうよ」

お母さんがジョンの家の状況を話してくれた。

「アカネちゃんの方はどうだろうか。電話がつながるとよいのだけどー」

宙美は少し焦りを感じていた。

アカネの飼い主にもすぐにつながった。新型感染症が国内蔓延期に入り、ほとんどの人が外出を控えている。アカネの飼い主によると、親しい知人に頼まれて、重症化した患者に試してみたが、回復させる効果はなかったようだ。しかし、アカネの家では、四人家族の誰も新型感染症に罹っていない。それは、アカネのお陰かもしれないと考えているようだ。アカネは毎日、買い主たちの顔を舐めているらしい。

「アカネちゃんとジョン君の住所と電話番号を教えてください。もう少し詳しく聞きたいことがあります。飼い主さんたちには、私、宙美が会いに行くことを伝えておいてください。それと、プーがお父さんを救ったということは内緒にしておいてください」

相手に有無を言わせぬ圧力だ。お願いというより指示に近い。ブリーダーのお母さんは宙美の気迫に押されていた。

その後、プーを譲り受けてからのエピソードなどについてしばらく歓談した後、三人はブリーダー宅をお暇することにした。

「お母さんたちも気を付けてください。それに、プーのお父さんとお母さんはまだ生きているでしょ。その二匹も狙われる可能性があります」

宙美はいつの間にか、プーちゃんではなく、プーと呼んでいた。

「あの特別な餌はまだありますか？プーが帰ってきたら、食べさせてあげたいので」

玄関を出るところで、宙美が聞いた。

「あれね。まだ冷凍保存しておいたものが残っていますよ。でもね、この先はしばらく品切れになると思うの。だって、あれは南シグマ島から取り寄せているのだけど、あの島は新型感染症で行き来できなくなっているでしょう。実際には南シグマ島のすぐ横の島に自生しているって聞いたわね」

お母さんはそういうと、飼育小屋の方へ餌を取りに行った。

宙美の頭の中で何かがひらめいた。

―あの特別な餌は、南シグマ島の隣の島で採れるんだ！―

車が動き出すと、宙美が話し始めた。少し興奮気味だ。

「お母さん、今朝、スマホのニュースで見たんだけど、今回の新型感染症の震源地になった南シグマ島と、その周辺の島は感染が広がってひどい状況になっているけど、その中でひとつだけ感染者が異常に少ない島があるらしいの。あの特別な餌が採れるのはその島かもしれない。その島の人たちは、あの植物を食べている。だから感染者が少ない。もしもそうだとしたらプーの特別な能力とその植物には何か関係があると思うんだ・・・」

そこまで話すと黙り込んだ。長考に入ったようだ。球美は後部座席で寝息を立てている。

―果たして、植物に感染症を予防したり、治療したりする薬効があるのだろうか―

自宅に戻った宙美は、インターネットで調べてみた。インフルエンザの特効薬として有名なタミフルは、スイスの製薬大手が製造しているが、その原料は、中国料理に使われる「八角」という植物、トウシキミの果実であり、そこから抽出したシキミ酸から複雑な工程を経て生産されるらしい。お父さんが飲んでいた「麻黄湯」は、麻黄、桂皮などの生薬が配合された中国の古典的な漢方薬で、インフルエンザの治療薬として医者から処方されることもあるようだ。いろいろなことがわかった。植物を原料とした漢方薬は古くからウイルス性感染症の治療薬として用いられ、その薬効も確かだ。南シグマ島の隣の島にしか自生しない植物に、漢方薬に似た薬効があってもおかしくない。

翌日、宙美はアカネの飼い主に行きのために朝早くから準備を整えた。宙美たちが住む豊河市の隣、刈屋市に住んでいる。自転車で一時間ぐらいの距離だ。梅雨入りはしていないが、朝からとても蒸し暑い。

「この暑さで大丈夫なの。私が車で一緒に行けたらいいのだけど、お父さんの病院へ行かなければならないの。もうすぐ退院できるみたい」

これから出発しようとする宙美に、美雪がいった。

宙美はOKマークを右手で作って自転車のペダルを踏み込んだ。中学時代、ソフトテニスで鍛えた体力には自信があった。持久走も全校一早かった。

途中の道路は外出自粛で空いていた。車がほとんど通らないが信号機は動いている。信号が青に変わるのを待つのはじれったいが、宙美はそれを守った。

四十五分ぐらいでアカネの家に着いた。少し汗をかいたが、息切れはしていない。あらかじめ電話を入れてあったので、玄関もスムーズに通してもらえた。玄関先でマスクを付け「使わせていただきます」といってアルコールで念入りに手指消毒を行った。

飼い主のお母さんが応接間の扉を開くと、中からトイプードルが勢いよく飛び出してきた。

奥のソファには飼い主のお父さんが笑顔で座っている。

「プーちゃん！」

宙美は一瞬そう思ったが、アカネだ。アカネは、宙美のところへくると、クンクンと匂いを嗅いだ。プーの匂いが付いているのだろうか。

宙美はこれまでの経緯を一通り話し、アカネに危険がおよぶ可能性があることを説明した。アカネの飼い主夫婦はときどき質問をはさみながら、宙美の説明を真剣に聞いている。

「ところで、アカネちゃんはブリーダーさんから取り寄せる特別な餌は食べていますか？」
宙美の質問に、飼い主のお母さんはやや戸惑いながら答える。

「これまでは定期的にあげていたのだけど、今回の新型感染症が南シグマ島で発生したというから、一カ月ぐらい前からあげていないの。だって、あの餌は南シグマ島から輸入されているんですよ。なんだか気持ちが悪くない？」

アカネの飼い主は、あの餌が南シグマ島から輸入されていることを知っていたようだ。
宙美はひとつの仮説を思いついていた。やはりあの餌に何か秘密がある。

「あの餌はまだ残っていますか。もしも残っていたら、アカネちゃんに食べさせてみてください。アカネちゃんにもプーのような能力が備わるかもしれません。でも、このことは絶対に内緒にしておいてください。この先、家族を救うことになるかもしれませんが、家族以外には試さな

いでください。それと、アカネちゃんに関するSNSへの投稿はやめた方がいいと思います。過去の投稿もできるだけ削除してください」

宙美は一気にまくし立てた。

帰り際、宙美は気になっていることをもうひとつ聞いた。

「アカネちゃんは食糞をしますか？」

プーに何とかして止めさせたいと思っていた癖だ。

「うちのアカネはしないわね。お父さんは見たことある？」

お母さんが振り返った先でくつろいでいたお父さんが、手を左右に振っている。

「プーちゃん、早く戻ってくるといいわね。一度、うちのアカネと合わせてあげたいわ」

席を立った宙美に向かってお母さんがいった。宙美は夫婦にお礼をいい、アカネの口元を撫でた。プーを思い出して、ギュツと抱きしめたくなる衝動を抑えて、その家を後にした。宙美は自宅への帰り道、自転車のペダルをこぎながら考えた。

「ジョン君には新型感染症を治す能力はない、それはジョン君が男の子だからかもしれない。でも、昨日、ブリーダーのお母さんは、ジョン君の家からはあの餌の追加注文は一回もなかったといっていた。やはり、あの餌だ。アカネちゃんは、最近あの餌を食べていない――」

キー、車が急ブレーキをかける音がして宙美は我に返った。考え事に夢中で赤信号を渡っていたのだ。すんでのところで衝突は免れた。

しばらくすると、宙美はまた考え始める。

―食糞は何か関係があるのだろうか？例えば、食糞をすることで、糞の中に残っているあの餌の成分がもう一度口に入り、薬効成分が濃縮されていく。あるいは唾液や胃液で生成される。そのような作用が起きるのかもしれない……―

自宅が近づいたとき、宙美はジョンのところへも行こうかと考えたが、少し遠いし、飼い主が新型感染症で亡くなったばかりなので、行くのがためらわれた。それに、宙美が立てた仮説は確信になりつつある。ジョンのことを聞いても仮説には何の影響もなさそうだった。

―でも、気を付けるようにアドバイスだけはしておかないと―

しかし、どのような伝え方をしたらよいのか、宙美には思いつかなかった。ジョンが南シグマ島のあの餌を食べていたら、飼い主の男性は助かったかもしれない。今さらそのことを話しても家族の心を傷つけるだけだ。

夜、宙美は美雪と相談し、ジョンの飼い主にはブリーダーのお母さんから注意を促してもらうことにした。南シグマ島の餌のことは一切話さないことにして。

「このデータはいったいどうなっている？」

日本感染症総合研究所のデスクで、天馬のPC画面を覗き込みながら、厚生労働省の猫田が怒り声をあげている。

「あの犬の一日目、二日目のデータでは、確かに新型コロナウイルスを無力化する効果が明らかだった。なのに、昨日から数値が下がってきている。何が起きているんだ」

天馬を責めるような猫田のいい方に天馬が反発する。真横にいる猫田からは、タバコと汗の強烈な臭いが漂ってくる。マスクをしていなかったら、気分が悪くなるぐらいだ。

「そんなに近づいて覗き込まないでください。必要ならいくらでもプリントアウトしますから。それに数値が下がってきている理由なんて、私にもわかりません。家族から離されて、元気がなくなってきたからじゃないですか。それとも、私が知らない間に誰かが悪さをしているとか・・・」

天馬の言葉には皮肉が込められていた。

「猫は数日ぐらい家に残されても平気だ。犬だって旨い餌でも食わせておけば大丈夫だ。元気がないのではなく、そう見せているんだ。犬はざる賢いからな。血液のデータはどうなっている？」

猫田は犬をバカにしたようないい方をした。天馬はイライラしてきた。

「犬は飼い主を大切にするんです。飼い主と離れると、飼い主のことが心配になるの。猫は違いでしょ！」

天馬はそう反撃しながら、PCの画面を血液データのページに切り替えた。

「血液のデータには変化はありません。でも、これ以上の血液採取は、プーちゃんの命にかかわります。もうやめる必要があります」

「この犬と、何十万人の命とどっちが大事なんだ。この犬が死んだら、二十万円でも払っておけば済むことだ」

猫田の発言に啞然とした天馬は、反論する気にもなれなかった。

—この男は絶対に許さない—

その日の午後、天馬は宙美にメッセージを送った。

アカネの家から戻った宙美は、美雪と球美を集めて自分の仮説を披露していた。球美はキョトンとして聞いていたが、美雪は真剣に聞いていた。それは宙美の話しを理解しようとしているわけではなく、宙美のこの二週間ほどの変化に驚いていたのだ。

そのとき、宙美の携帯に天馬からトークアプリの着信があった。

宙美は真剣な眼差しで画面に見入った。美雪と球美も覗き込んでくる。

「どうやら、昨日ぐらいからプーの調子が良くないらしいの」

画面の一番下には、プーの写真が添付されていた。

「少しやつれたみたい」

宙美は自分が立てた仮説を整理して、天馬へメッセージで送った。アカネのこと、ジョンのことも書いたが、その二匹がどこにいるのかは書かなかった。二匹が研究所へ連れていかれるのを阻止したい、守りたいという思いがそうさせた。

「プーを絶対に元気な状態で戻してください」

宙美は最後にそうトークアプリに打ち込んだ。

「ネコの猫田をすぐに呼んできて！早く！」

宙美からのメッセージを読んだ天馬は、すぐさま猫田を探すように周りに向かって大声で叫んだ。

数分後、猫田がふてくされた態度で戻ってきた。どうやら、喫煙ルームでタバコを吸っていたようだ。離れていても、マスクを通してタバコの匂いが漂ってくる。相当癖のあるタバコを吸っているのだろう。しかもかなりのヘビースモーカーに違いない。

「今回の新型感染症は肺炎にはなりにくいみたいですが、以前のコロナだったらイチコロですよ。タバコはやめたらどうですか。ところで、プーちゃんがここへ来たときにあなたが取り上げた餌、あれは今どこにあるの!？」

天馬は猫田を見下ろしながら厳しい口調で詰問した。その剣幕に猫田はたじろぐ。猫田はいつも厚生労働所の権威を笠に着て威張っているが、それは虚勢を張っているだけで、実は小心者だ。

「ああ、あれね、ちゃんと保管してあるさ。必要なら持ってくるけど」
「すぐに持ってきて！」

猫田はノロノロと事務棟の給湯室にある冷蔵庫へ向かった。冷蔵庫を開けたが、そこにはなかった。慌ててチルド室も、冷凍庫も開けたが、出てこない。

「探したが、ない。俺は確かに冷蔵庫へ入れた」

トボトボと戻ってきた猫田の報告を聞いて、天馬は大声で叫ぶ。

「誰かー、冷蔵庫の中に入れてあった黒い塊が入った袋、知らない？」
少し離れたところで若い研究員が恐る恐る手を半分だけ挙げた。

「あなた知っているの？」

「すいません、誰が入れたのかもわからないし、気味が悪かったので、昨日自分が捨てました。だって、共用の冷蔵庫に私物を入れるときには、名前を書くルールになっているじゃないですか。あの袋には何も書かれていませんでしたよ」

天馬はごみの集積場所へと突進した。ごみ箱をひっくり返すと、それは出てきた。しかし、袋の口を開けると、中身はすでに腐り始めているようだ。異臭がする。

「ちくしょうー」

天馬は急いで宙美へメッセージを送った。あの餌をプーに与えていなかったことも詫びた。そして、その餌の入手先を聞いた。宙美からは、ブリーダーから取り寄せていること、自宅にも先日ブリーダーから買ったものが少し残っていると返信があった。

しかし、天馬は、ブリーダーのそこへ直接取りに行くことにした。すべての餌を手に入れておいた方が良く考えたのだ。

―今から警察車両を手配しても時間がかかるだけだ―

天馬はロッカールームで作業服を脱いでライダースーツに着替えた。地下駐車場には天馬のオートバイが置かれている。一〇〇〇ccの大型バイクだ。天馬はヘルメットを被ると、バイクにまたがり、エンジンをかけた。

―ブリーダーの家はわかっている。この方が早い―

天馬はこれからブリーダーのところへ餌を受け取りに行くことをトークアプリで宙美へ伝えると、大型バイクで勢いよく研究所の門を飛び出していった、

宙美は中学時代の親しい仲間六人をトークアプリのグループに登録して連絡を入れた。ソフトテニス部で中学の三年間一緒だった六人だ。

―宙美です。久しぶりだね。みんな新型感染症は大丈夫？―

仲間から順次返信が入る。六人とも元気だった。

―宙美のお父さんがトイプードルに助けられたって、すごい噂になってるね！―

―そうなんだけど・・・うちの犬、トイプードルのプーちゃん、今、新しい薬の開発のために長野の研究所へ行っているの―

—えー、寂しいね—

—今日は、みんなに協力してもらいたいことがあって、今からすぐに集まってほしいの—
—やることなく、毎日ヒマだから大丈夫!—

—十分後に豊河中に集まって—

—キャプテン宙美に呼ばれたんだから、すぐに行くよ!—

—チーム宙美の再始動だね!—

このようなやり取りの後、七人は自分たちが三年間過ごした中学校に集まった。

宙美、美緒、芽衣、一花、結衣、朱里、巴菜の七人だ。全員マスクをしている。

六人が宙美と会うのは一年半ぶりだ。普通だったら、手を取り合って喜ぶシーンだが、ソーシャルディスタンスにも慣れてきていた。みんなでピースサインを送りあった。

「みんなありがとう。それと、一年半もみんなとの交流を断ってしまってゴメンなさい」

宙美は、これまで親友たちからの気遣いをスルーしてきたことを詫びた。そして、これまでの出来事をかいつまんで説明した。みんな真剣に聞いている。

「今日みんなに集まってもらったのは、今からプーを買ったブリーダーさんの家へ行くのに付き合ってもらいたい。ちょっと気になることがあって、さっきブリーダーさんのスマホへ電話を

かけたんだけど、電源が切られているみたいなの。プーを横取りしようとしている悪い組織があるみたいで、ブリーダーさんが襲われるかもしれないの。だからひとりだとちょっと不安なんだ……」

「ちよつとドキドキするね！」

「よしわかった！行くよ！」

「それで、どこまで行くの？」

「太府町だよ」

チーム宙美の七人は、少しずつ間隔を空けて円形に並んだ。全員が右手を円の中央に伸ばした。豊河中ソフトテニス部の定番フォーメーションの変形だ。本来のフォーメーションは、左腕は左隣のメンバーの肩の上に置く。

「チームソラミー行くよ！オー！」

七人は氣勢をあげて、人差し指を伸ばした右手を真っすぐ天に向けた。

七人の自転車は一本のきれいな車列を組んで中学校を出発した。快調に進む。そのペースは、自動車で走るとほとんど差がない。いつの間にか、豊河中の校歌をみんなで歌っていた。宙美

は先頭を走りながら、ブリーダーのお母さんのスマホがつながらないことに、胸騒ぎがしていた。

—こんなときにお母さんが行けないなんて—

その日、美雪は柳治の実家へ年老いた両親の様子を見に行っていた。

宙美たちがブリーダー宅に近づくと、どこからかブーンという音が聞こえてきた。

—ハチがいるのかな？—

周りの果樹園を左右に見ながら、宙美はそう思った。

研究所を出て二時間半後、天馬はブリーダーの家に着いた。しかし、門の前には赤色灯を回した複数のパトカーが停まり、数人の警察官が動き回っている。

天馬は、ヘルメットを脱ぎ、医療用マスクとフェイスシールドをつけると、胸元から日本感染症総合研究所の身分証を引っ張り出して警察官に見せた。

中へ入ろうとする天馬を若い警察官が制止する。

「新型コロナウイルス対策本部の命令で動いています。内閣総理大臣の特命です」

強い口調で警察官にいい放つと、制止を振り切って家の中へ入っていった。

天馬はひとしきり家の中を探したが、肝心なものは見つからなかった。玄関へ戻ると、立入禁止の区画テープの向こう側に、宙美の姿が見えた。周りに何人か、同年代の女の子たちがいる。天馬は急いで玄関を飛び出して宙美のところへ駆け寄った。

「来てくれていたのね。皆さんは宙美ちゃんのお友だち？」

天馬が宙美に向かって話しかけた。

宙美たちは、中学校を出発して一時間ほどで到着していた。

「私たちの方が早く来られると思って・・・でも来てみたら、ブリーダーさん夫婦はいないし、部屋の中が荒らされているみたいだったので、急いで一一〇番しました。ところで、例のものは見つかりましたか？」

天馬は首を横に振った。

「あっ、そうだ、紹介します。私の中学のときの部活の友だちです」

宙美が紹介すると

「私たち、チーム宙美です！」

ひとりが元気よく応えた。

「ちよつと心当たりがあるんです。あの餌のことはまだ私たちしか知らないはずです。だから、あの餌までは奪われていないと思います。先日、お母さんとここへ来たとき、ブリーダーのお母さんは飼育小屋の方へ餌を取りに行ったような気がするんです」

そういつて宙美は立入禁止の区画テープの脇を通って、飼育小屋の方へ進んで行く。

それは、小屋の奥の作業場のようなところに置かれていた。業務用の大型冷凍庫だ。

—これだ！—

中には、例の餌がいくつかに小分けして保管されていた。しかし、その量は多くはない。南シグマ島からの輸入が止まっているからだろう。

門のところまで戻った天馬は、大型バイクの後ろに餌の袋を縛り付けようとしたが、保冷バッグを持ってくるのを忘れていたことに気が付いた。

「ちよつと待っていてください」

宙美はそういうと、自分が乗ってきた自転車のかごから保冷バッグを取り出し、天馬に手渡した。中には保冷剤が入れてある。

「必要になると思って持ってきました」

「宙美ちゃん、さすがね！緊急時に冷静に対応できるのはすごいことよ」

天馬は保冷バッグを受け取ると、その中に餌の袋を詰め込み、バイクに縛り付けた。

警察官のひとりが慌てて走り寄ってくる。門の前で天馬を制止した若い警察官だ。

「現場から勝手に持ち出してもらっては困ります」

「内閣総理大臣の特命だといったでしょ。なんなら、今から対策本部に電話してもいいのよ。

警察庁の幹部も常駐しているから、あなた直接話してみたら」

警察官はスゴスゴと退散していった。

「家の中でブリーダーさんのスマホを見ませんでしたか？二時間前にかけたら、電源が切れているか圏外かということでした。つながらなかったんです」

バイクにまたがろうとした天馬に宙美が聞いた。

「餌のことばかり気になって、スマホには気が付かなかったわね。ちよっと待って」

天馬はそういうと、先ほどの警察官を探して手招きした。

「ちよっとあなた、そうあなたよ」

警察官が走ってくる。

「家の中にスマホは落ちていなかった？もう一度調べてほしいの。この宙美ちゃんがいかにね、二時間前にかけたら電源が切られていたそうなの。ここは圏外じゃないから。もし電源が切

られていたら、それは犯人が切った可能性が高いでしょ。まあ、プロの仕業みたいだから、スマホは持ち去られている可能性が高いかな」

天馬はそこまで話すと、バイクにまたがり、エンジンをかけた。

宙美はエンジンの音にかき消されないように大きな声で叫んだ。

「プーを頼みます」

天馬からの返事は聞こえなかったが、バイクが見えなくなる手前で、天馬が左手で小さくガッツポーズをしたのが見えた。

飼育小屋からは、すべてのトイプードルがいなくなっていた。

不正　―別れ―

天馬が研究所へ戻ったのは日没後だった。ロッカールームでライダーズスーツから作業服に着替えて、エアシャワールームを通ってプーの元へ行くと、プーは弱弱しく天馬を見上げた。

―何かおかしい・・・―

天馬は急いで事務棟へ戻ると、そこにいた猫田を問い詰めた。

「プーに何をした？何をしたんですか！」

「本部から、プーの血液を送れと指示が来たので、ほかの研究員に頼んで十ミリほどいただいた。それだけだ」

猫田はしぶしぶ答えた。

「バカ！血液のデータはいたって普通なんだから、血液なんて調べても仕方がない」

―本部はいったい何を考えているんだ！―

後からわかったことだが、新型感染症対策本部のメンバーを務める感染症の大御所が、血液をもっと詳しく調べる必要があると強く主張したらしい。

「権威か大御所か知りませんが、現場を離れた人には黙っていてほしかった。あのとき、プーの血液を採取する指示がなかったら、不正を防ぐことができたと思います。そうであれば、治療薬はもっと早く完成していたはずです。それで救えた命は、何百万、何千万人にもなったでしょう」

天馬は後々悔しそうにそう語った。

プーには早速、輸液を行いながら、大好きな餌を流動化して与えられたが、回復の傾向は見られなかった。この状況は宙美へも正直に伝えなければならぬ。

—どうしたらいい—

天馬は苦しんだ。

—正直に話せば、プーをここへ留めておくことはできないだろう。でも、プーが特殊な能力を持つ理由がわかった。もう少しで新薬開発のブレークスルーができる。でも、このままプーが回復しないと新薬の開発は遅れてしまう。でも、宙美との約束は守りたい。一旦飼い主に戻した方が回復は早いかもしれない。急がば回れか。そうだ、アカネが代わりになるかもしれない、でも—
でも、でも……が続いた。

結局、天馬はあと一日様子を見ることにした。

翌朝、猫田が人目につかないようにトイプードルを連れてきた。

「その子、どうするんですか？」

コソ泥猫のような不審な動きをしている猫田に気が付いて天馬は厳しい口調で指摘した。いたずらが親にばれたような顔をして猫田が反応する。

「あ、あの犬の代わりだ。今、世間ではトイプードルがほとんどいなくてね。何とか探して、五十万円出して買ってきた。もちろん経費だけだ」

「その子ではプーの代わりは務まらない。そんなことはわかっているでしょ！」

「違う、違う。この犬の写真を撮って、あの家族へ送るんだ。そうすれば、もうしばらく研究を続けられるだろ」

「そんなことは絶対に許さない！」

天馬は猫田の発想を厳しく非難した。

その日の昼、猫田は天馬が昼食のために食堂へ向かうのを見て、行動を開始した。自分が連れてきたトイプードルをバイオクリーンルームの中へ連れていき、やや離れたところから写真を撮った。ピントは少しぼかしてある。

その写真データは、電子メールで美雪のスマホへ送られた。

―厚生労働省の猫田です。お借りしているワンちゃんの写真を送りします。あと数日でお返しできると思います―

メールにはそう書かれていた。

―よし、これで大丈夫だ。あの家族が騒ぎ出すことはないだろう―
猫田はそう高をくくった。天馬と宙美がトークアプリでつながっているとは、思ってもみなかった。猫田からのメールを受信した美雪は、宙美と球美に見せた。

「ほら、プーちゃんよ。元気そうね」

そのとき居間のサイドテーブルに置かれた電話が鳴った。美雪がでると、夫の柳治が入院している病院からだ。

「はい。はい。・・・わかりました。それでは明日」

美雪の話し声が聞こえてくる。

「お父さん、帰ってこられるって。明日迎えに行ってくるね」

美雪は嬉しそうだった。宙美は、美雪のスマホを借りると、自分のスマホへプーの写真を転送した。

宙美は疑念を抱いていた。

「なぜ、天馬さんじゃなくて、猫田から写真が送られてきた？天馬さんと私がトークアプリでつながっていることを猫田は知らない。天馬さんから送られてくる情報や写真は、研究所には内緒になっている。だから、今回の写真は研究所あるいは厚生労働省として正式に送ってきたものということ？でも何かおかしい」

宙美は写真を拡大してスクロールしながら細かく確認した。一見するとプーだ。しかし、前日に天馬から送られてきたプーの写真は少しやつれていた。一日で回復したとは考えられない。ピンボケで、しかも遠くから撮影されているので、なかなか確証が得られない。前日の写真との比較も細部にわたって行った。

十分間が過ぎたころ、宙美は決定的な証拠を発見した。

「尻尾の長さが少し違う」

トイプードルは生まれてすぐに尻尾を切られることが多い。断尾だ。

断尾は、予防医学的な理由と美容目的で行われることが多い。予防医学的には、たとえば、猟犬が藪の中を移動するとき尻尾を負傷するのを防止する、牧羊犬が大型の家畜に尻尾を踏みつけられて怪我をするのを防止する、尻尾に糞が付着して不衛生になるのを防止するという効果が期待される。美容目的の場合は、「犬種標準」と呼ばれるその犬の理想的な姿を規定した基準に合致させるために行われるもので、約五十種の犬について習慣化している。ヨーロッパ諸国を中心に断尾を禁止している国も多く、実際に猟犬や牧羊犬として活動させないペット犬の断尾や、ペットシヨップにおける売れ行きをよくするための断尾については批判的な意見がある一方、尻尾が曲がって生まれてくるケースや、成長の過程で曲がるケースがあり、断尾を肯定する意見もある。賛否両論だ。

トイプードルの場合は断尾されることが多く、生後一週間以内の尻尾が柔らかい間に行われるが、その長さは微妙に異なる。

宙美は天馬へトークアプリでメッセージを送った。電話をかけたかったが我慢した。電話だと自分の感情を抑えることができず、天馬と喧嘩になると思ったのだ。

—今日のお昼過ぎ、厚生労働省の猫田から母のスマホへプーの写真が送られてきました。元気そうなおなプーに見えますが、この写真はプーじゃない。どういふことですか？プーは今どうしていますか？—

事務棟で仕事をしていた天馬は、宙美から届いたメッセージを見て、血液が沸騰するような怒りを感じた。噛み締めた奥歯が欠けそうだった。

—猫田のやつ！絶対に許さないといっておいたのに！—

事務棟を見渡したが猫田の姿はない。

—あいつ、またタバコか！—

喫煙ルームへ走った。ガラス越しに猫田の姿が見える。啜えタバコでスマホを見ている。思いつきりガラスを叩く。ガラスが割れそうだった。猫田は啜えていたタバコを床に落として、慌てて拾った。

「ネコター、あなたいったい何をしたの！」

猫田は首根っこをつかまれた子猫のように無抵抗だ。デスクまで引っ張っていき、PCを開かせた。

「送信したメールを見せて！」

送信済みフォルダの中に美雪へ宛てたメールがある。強引にマウスを奪うと、そのメールを開いた。

「なんですか！この写真は・・・」

猫田の顔が青ざめていく。もともと血色の悪い肌の色だから気味悪い。

「あなた！昨日、プーから十ミリリットルの血液を採取したといったけど、それは本当なの？
犯罪者を詰問する剣幕だ。十ミリリットルでプーがあんなに衰弱するはずがない。

「・・・実は、五十ミリ」

「じゃあ、残りの四十ミリはどうしたの！本部へは十ミリしか送っていないでしょ」

「もしものときのために、自分用にと・・・」

天馬は猫田を床に引きずり倒した。床に手をついて顔を庇った猫田の目は不気味に笑っていた。

後で判明することだが、このとき、残りの四十ミリリットルの所在をその場で確認しておくべきだった。「自分用に」というからには、猫田はそれを保管しているはずだが、実は保管していなかった。天馬は後になって反省した。

犬の血液量は体重一キログラムあたり約九十ミリリットルとされる。プーの体重は二・五キログラムだから血液量は二百二十五ミリリットルだ。採血量はその二五％が上限とされる。プーの場合、五十六ミリリットルを採血すれば危険だ。

もともと、プーから血液を抜くことは、宙美たちには話していない。犬が病気になって獣医のところへ連れて行けば、少量の血液を採取されることがある。それと同じことだと考えていた。宙美たちに無用な心配させたくないという思いもあった。しかし、奥底にあったのは、そのことをいうとプーを渡してもらえないかもしれないと不安だ。

しかし、猫田が送った写真のせいで、宙美たちはこの研究所が不正を行っている疑い始めた。これ以上、黙っていることはできない。天馬は宙美へメッセージを送った。プーの実際の写真も添付した。そこには、弱弱しいプーが写っている。すでに心は決めていた。

―プーを返そう―

夜になっていたが一刻も早い方がよい。天馬は上司の小野寺へ連絡して事情を説明した。プーを返すことに小野寺は反対したが、天馬はこれからの新薬開発方針を説明して納得させた。

「プーの特殊な能力は、プー自身の特殊な体質による部分もありますが、餌との相互作用によるものです。その餌はすでに入手しました。そして、プーの体質的なことについては、プーの唾液

と胃液があれば、プーがいなくても解明できると思います。大丈夫です。プーの唾液と胃液は確保してあります」

天馬は小野寺にゴリ押しして、警察車両を動かす了解を得た。

天馬は不思議に思った。自分はゴリ押ししたつもりだが、小野寺からの回答はあっさりしている。小野寺が厚生労働大臣に招聘されて対策本部へ詰めているとはいえ、しよせん一介の研究者上がりの所長だ。なぜ、そうも簡単に警察を動かすことができる？

第一回の対策本部会議における出来事など、天馬は知る由もない。

大賀が小野寺を信頼して任せたように、小野寺もまた天馬を信頼し、天馬に人類の未来を賭けていた、

—今から三十分後に警察の車両がお宅に到着します。プーちゃんを迎えにきてください—

天馬は宙美へメッセージを送った。手配された警察車両で宙美は二時間半後に研究所へ到着した。すでに深夜になっている。入門セキュリティシステムは、警備員がその場に立って対応した。

玄関ホールで天馬と宙美が対峙する。ケンカ腰で火花を散らしているわけではないが、微妙なバランスで成り立っている空間だ。天馬の腕の中にはプーが抱かれている。無言のまま、宙美に近づいた天馬はプーに顔を寄せて「ごめんね」とつぶやいた。プーは、天馬の顔をペロリと舐めた。

―プーは嫌いな人の顔は絶対に舐めない―

宙美は、ここで何が行われたのか、プーの身に何が起きたのかはわからなかったが、天馬はプーを傷つけてはいないと察した。

「こんな車で送り返すなんてね。でも今の私にはこれが精一杯。この子は人類の救世主になるかもしれないのにね・・・」

その目からは涙が溢れていた。

プーの身体はひと回り小さくなっていった。体重もずいぶん減っている。

―プーちゃんごめんね。怖かったね。よく頑張ったね―

宙美はプーを抱きしめた。プーの匂いと体温がとても懐かしい。プーの尻尾がかすかに動いていた。

天馬との別れ際、それまで無言だった宙美が口を開いた。

「プーは食糞をする癖がありました。あの餌をプーが食べることで唾液のなかに特殊な成分が合成され、さらに糞の中でも濃縮される。それを食べることでその成分はさらに強くなる。これを実験室で再現できないかな・・・」

宙美とプーを乗せた警察車両は、赤色灯を回して中央自動車道を走った。後部座席では、宙美に抱かれたプーが安心したように眠っている。

車は夜中の三時過ぎに宙美の自宅に着いた。宙美とプーが玄関に入るとき、運転席と助手席の警察官は車から降りて、直立して最敬礼を送った。

四日前のことだった。プーが研究所に到着した翌日の早朝、猫田はJR名古屋駅前にいた。外出制限下で人の姿はほとんど見られない。ロータリーに黒塗りの高級車が滑り込んできて、猫田の前で止まった。助手席の窓が降りる。

「これだ」

猫田は運転席を確認することなく一言そういうと、「坂角のゆかり」の紙袋を助手席に落とし、窓を上げながら車が走り去っていく。

プーが帰ってきたその日、陽が昇ると柳治も病院から帰ってきた。十八日ぶりの自宅だ。

居間に入るとプーが眠っている。柳治の命を救ったプーは今、生死の境を彷徨っているようだ。

「プー、助けに来てくれてありがとう。頼むから死なないでくれ。お前は家族なんだ。五人家族なんだよ……」

柳治はプーを撫でながら泣いた。

その夜、遅い時間に獣医が来た。天馬からの指示で、プーの治療に来たという。プーが帰ってきたことは近所に知られてはいけない。知られば、自宅前には再び行列ができるだろう。それは、宙美たちを再び苦しめることになる。そう考えた天馬が、夜中に獣医を寄越したのだ。

しかし、獣医の治療も、宙美たちの懸命な看病も、プーを回復させることはできなかった。

二日後の夜、ついにそのときが来た。

宙美たちが見守るなかで、プーの心臓の動きは徐々に鈍くなっていく。柳治、美雪、球美の順に、プーにキスをした。そして、最後に宙美が口を近づけると、プーは最後の力を振り絞るように、宙美の口を一回ペロリと舐めた。

プーは静かに息を引き取った。

「ぷーちゃん」

宙美の叫び声が部屋を揺らした。

美雪は自分を責めた。プーを守れなかったのは自分のせいだ。宙美も自分を責めたが、やがて怒りへと変わっていった。

―猫田は絶対に許さない。絶対にあいつが何かしたはずだ―

宙美は流れ落ちる涙を唇で受け止めながら、歯を食いしばった。

その晩、プーを真ん中に寝かして、家族が川の字に並んで寝た。五人家族が一緒に寝るのは初めてだった。

翌朝、美雪は市役所へ電話をかけた。何度かけてもつながらない。やっと相手が出て用件を伝えても、新型感染症の拡大でペットの火葬対応は中断しているという。人間の火葬で職員たちも精一杯なのだ。

家族で協議をした。庭に埋める案は、土の中で時間をかけて朽ちていくプーがかわいそうだと、いって球美が否定した。結局、柳治の提案により、自分たちで火葬することにした。

「ほら、僕がときどき星の写真を撮りに行っているあの山の上。僕が満天の星空の下でお母さんにプーポーズしたあの山だよ。あそこで火葬しよう。そうすれば、あの山へ行くたびにプーに会える」

ペットの個人による火葬は本来違法だろう。しかし、行政が対応できないのなら仕方がない。柳治は、納戸に仕舞ってあった日曜大工の余りの板材や段ボールで、プーの棺を作った。大きめに作ったつもりだったが、完成するととても小さく感じられた。

「我が家の三女はこんなにも小さかったのか。小さいのに、よく頑張った――」

翌朝、陽が昇ると、宙美たちは山へ向かった。車で一時間半ほどのところだ。後部の荷台には、キャンプ用品一式と薪が積まれている。

三十分ぐらい走ると、白色の商用車が後ろにピタリとついてくる。柳治がバックミラーで気づいた。柳治は左のウインカーを点滅させ、道路の左に寄って車を止めると、ハザードランプを点滅させた。

「どうしたの？忘れ物？」

後部座席の美雪が聞いた。膝の上には、タオルにくるまれたプーが抱えられている。

「怪しい車がついてくるんだ」

白い商用車が何事もなかったかのように通り過ぎていく。

しかし、しばらく車を走らせると、どこからか現れてまた後ろにつく。細い道へ迂回してから国道へ戻っても同じだった。煽ってくるわけではない。球美は後部座席から首を回してそつと後ろの車を観察した。スマホで写真を撮る。

「男の人がふたり乗っているよ。後部座席には誰も乗っていないみたい」

「このまま山へ向かうとヤバイよ」

助手席の宙美が柳治に訴えた。山道に入ると他人の目がなくなって危険だ。柳治は国道脇のコンビニの駐車場に車を滑り込ませ、そこでしばらく様子を見ることにした。白い商用車はコンビニの前を通過して見えなくなった。

助手席の宙美はトークアプリの無料電話で天馬にコールした。「もしもし、宙美です。プーちゃんが一昨日の晩に息を引き取りました。今、プーちゃんを自分たちで天国へ送るために車で移動していますが、怪しい車につけられています」

天馬はそこまで聞くと、詳しい事情を確認することなく、宙美たちの居所を聞いた。

「プーちゃんの遺体を奪って、調べるつもりか。これ以上プーちゃんを傷つけさせるわけにはいかない」

あのブリーダー夫婦とトイレプードルを誘拐した犯人が動いているのに違いない。そう考えた天馬は、新型感染症対策本部の小野寺へ電話を入れ、警察に動いてもらうよう依頼した後、折り返し宙美へトークアプリ電話をかける。

「今から警察に向かってもらいます。サイレンは鳴らさずに行くので、ちょっと時間がかかります。二十分ぐらいは待てる？それと怪しい車のナンバーと特徴を教えてください」

宙美は、球美が後部座席から撮影した白い商用車の写真を天馬へ送った。

警察が来てくれる。四人の緊張がホッと和らいだ。

「コンビニのトイレへ行ってくる」

そういつて、球美が左の後部座席から降りてコンビニへ歩いていった。

駐車場に止まっている車はほかに一台あるのみだ。店の前はがら空きだったが、柳治は店の入口からは死角になっている位置に止めていた。買い物をする予定がなくて気が引けたからだ。

柳治と宙美は、前の座席でカーナビの画面を覗き込み、この先のルートを確認している。

「ガチャ」

左の後部ドアが開く。

「お帰り」美雪はうつむいてプーをなでながら球美に声をかけた。しかし、美雪が顔を上げると、そこに立っていたのは男だ。美雪の瞳孔が一瞬大きく開き、すぐに恐怖へと変わった。声が出ない。

「その荷物、俺たちに売ってほしいんだけど」

ドアを開けた男が車内を覗き込みながら、ぶっきらぼうにいった。

柳治と宙美が振り返る。

美雪は慌ててドアを閉めようと腕を伸ばすが、プーを膝の上に乗せているので左側には手が届かない。次の瞬間、もうひとりの男が右側のドアを開けた。美雪はプーを抱きしめるようにして体を丸める。柳治は運転席から降りて男と対峙した。スーツを着ているが、まだ若い。

「車でつけてきたのはあんたたちか。何の用だ？」

「お宅らが運んでいる荷物を買取ってこいと頼まれたんだよ」

「荷物なんか運んでないぞ」

「その人が膝の上で抱えているやつは荷物だろ」

左側の男が腕を伸ばしで奪い取ろうとする。宙美は助手席から降りて、その男のスーツの背中をつかんで引き離そうとするが、手が滑ってその場で尻もちをついた。

コンビニから出てきた球美はその異様な光景を目にすると、店員に「助けて」と一言残し、転倒した宙美に背を向けて車の中へ右手を伸ばしている男に向かって全力疾走した。そのまま肩からぶつかる。男はうめき声をあげながら転倒した。

「何するんだ！」

右側の男が声を上げながら転倒した男のところへ駆け寄った。

立ち上がった宙美は、身体をぶつけるようにして、左側のドアを勢いよく閉めた。柳治は右側を閉めると外からロックした。阿吽の呼吸だ。柳治と宙美、球美の三人はコンビニへ向かって走った。美雪とプーには申し訳ないが、そうするしかない。男たちは、ドアを開けようとするが開かない。窓をどんどん叩く。

「早く開けろ！五十万円出すから渡せ！」

コンビニから男性店員が出てきた。右手には防犯用カラーボールを、左手にはモップを握っている。店員は離れたところから男たちに向かって叫んだ。

「警察を呼んだぞー」

男たちは慌てて逃げていく。

その直後、パトカーのサイレンが聞こえてきた。天馬が手配していた警察車両だ。

コンビニの先の脇道に潜ませてあった商用車に逃げ込んだふたり組の男たちは、駆け付けた警察官によって職務質問を受けた。彼らは学生だった。ふてくされた様子で警察官の質問に答えた。

前日、街で知らない男に声をかけられ、アルバイト代として二十万円をもらった。新型感染症でアルバイトができなくなっていた学生ふたりにとって、破格のオファーだ。仕事の内容は次のとおり。今夜から星山家を見張り、柳治たちが家を出たらそれを追跡せよ。服装は会社員風にせよ。車は自分たちで用意すること。レンタカーは借りるな。少し離れて追跡し、怪しまれるようなことはするな。タイミングを見て、それを五十万円で購入すると申し出よ。買い取りができない場合は、五十万を置いて奪ってこい。このような指示だった。

学生たちは、奪うという行為にリスクを感じたが、もともとは二十万円ぐらいの品物だと聞いたので、五十万円出せば買い取れるものと高をくくっていた。白い商用車は運転していた学生の父親のものであった。この学生たちには、五十万円が入った封筒、連絡用のスマホ、柳治の車の下に付けられたGPS発信機の受信機、買い取った「荷物」を入れるクーラーボックスが渡されていた。

ふたりを動かした首謀者はブリーダー夫婦をトイプードルとともに誘拐した犯人の可能性がある。学生たちは当然そんなことは知らないまま、その場で逮捕された。脅迫したつもりもなく、暴力を振るったわけでもない。こうなるとは思ってもしなかったふたりは、半泣きである。

警察署で学生はひとりずつ別々の取調室に入れられ、厳しく問い詰められた。しかし、結局、首謀者が誰なのかを突き止めることはできなかった。それほどに用意周到なのだ。外国の機関が関与している可能性が疑われた。隆治たちはコンビニの駐車場で待機していた。しばらくすると、宙美のスマホへ天馬からトークアップリ電話がかかってきた。

「もう大丈夫。男たちは警察が逮捕したわ。どうやら、宙美ちゃんの家には盗聴器が仕掛けられ、車にはGPS発信機が付けられているそうよ。宙美ちゃんたちの行動が筒抜けになっていたみたい。もう安心だと思うけど、次が仕込まれているかもしれないので、この先も十分注意して。・・・それと、プーちゃんのことゴメンね。守ってあげることができなかった。ゴメン」

「助かりました・・・」

宙美はしばらく無言のままだ。何かを話そうとしたが、結局そのまま電話を切った。

柳治は車の下を覗き込んだがGPS発信機を見つけたことができなかった。やむなく、途中のレンタカーショップで車を借りることにした。これから山へ登るので、四輪駆動車に乗り換えた
いと受付で伝えた。

十時前、目的の山頂に着いた。誰もいない。見上げると、そこには雲ひとつない美しい紺碧の空が広がっている。柳治たちはプーの棺を囲んで、家から持ってきたおにぎりを食べた。遅めの朝食だ。プーが大好きな餌と茹でたササミもある。美雪はそれをプーの口元に置いて頭を撫でた。五大家族、最後の食事だ。おにぎりがしょっぱく感じる。

食事が終わると、柳治は火葬の準備を始めた。車の荷台からキャンプ用の薪を下ろして組んだ。美雪と宙美と球美は、棺からプーを出すと、抱きしめながら、持ってきたブラシでプーの毛をやさしくといた。

しかし、柳治は薪に火をつける気になれない。もう少し一緒にいたい。美雪たちも同じだった。

茜色の夕焼け空が広がった。意を決した柳治はバーナーに点火した。薪から煙が立ち始める。火の勢いが強くなると、プーの棺を四人で持ち上げ、その上にそっと置いた。あたりは漆黒に包まれつつある。火の粉がいくつもいくつも天高く昇っていく。やがてそこには満天の星空が広がった。

その晩、柳治たちは山の上で一晩を過ごすことにした。念のためのテントも用意してきたが、結局、朝まで眠ることはできなかった。プーとの思い出は、朝まで語り合っても尽きることはなかった。朝、プーの遺灰を丁寧に集めた柳治は、密閉できるガラス容器の中に丁寧にしまった。

お昼前、自宅へ戻ると家の周りが騒がしい。近所の人たちが集まっている。知らない人も何人かいる。駐車場へ車を入れることができない。仕方なく道路脇に車を止め、柳治が降りた。

柳治の周りに一気に人が集まってくる。

「ワンちゃん帰ってきたんでしょ。うちの息子を助けてください」

「娘が危篤なんです」

妻が、夫が、母親が、父親が・・・皆、口々に助けてほしいという。柳治は、美雪たちを家中へ入れると、プーの遺灰を入れたガラス容器をリュックサックから取り出し、皆の前に掲げた。

「うちのプーは帰ってきましたが、このように遺灰になって帰ってきました。もう皆さんを助けることはできません。しかし、プーから採取された体液で、今、新薬の開発が行われています。プーは頑張ってくれました。どうか、どうか・・・」

柳治はその場で泣き崩れた。

―最愛の家族のひとりが国の責任で、厚生労働省の猫田の仕業で、その命を奪われた―

宙美はそう考えていた。

―猫田は絶対に許さない。どうやって責任を取らせるか―

一方で、猫田を責めることは、天馬の立場を悪くするかもしれない。そうも考えた。

―猫田のことだ、天馬さんに責任を押し付けるかもしれない。それに、天馬さんが責任を問われることになれば、治療薬の研究が遅れてしまうかもしれない。それではプーの死が報われない―

宙美は悩んだ。合法的に猫田の責任を問うことはできないのだろうか？

その日の深夜、宙美はペットが被害に遭う事案についてインターネットで調べてみた。そして愕然とした。日本の法律においては、ペットなどの動物は基本的に「物」として扱われているという。民法ではペットについての規定はなく、民法八十五条の規定「この法律において、『物』とは、有体物をいう。」に基づいて「物」にあたるかと解釈されているというのだ。

このため、ペットが何らかの事故によって、負傷したり死亡したりしても、あくまで「物」と同様に扱われ、人が負傷したり死亡したりしたときのような高額な慰謝料を請求することはできないとされている。刑法も同様であり、ペットが誰かに傷つけられても、飼い主の所有物を破壊したとして同法二百六十一条の器物損壊罪が成立するのみだ。この罪の場合、三年以下の懲役又は三十万円以下の罰金もしくは科料が科せられる。

―ペットを自宅に残して自分たちだけ避難することはできない。そういつて死んでいく人たちがいる。ペットがどん底の苦しみから救ってくれることがある。そのくらいペットは大切な存在なのに、その命の価値は、日本では「物」と同じなのか―

宙美はさらに調べてみた。ペットが単なる「物」とは異なる特別な取扱いを受ける場合もあるようだ。動物の愛護及び管理に関する法律では四十四条四項において、犬や猫を始めとするペットについて、「愛護動物」として、「物」とは異なる扱いをすることが規定されており、これらの

「愛護動物」をみだりに殺し、又は傷つけた者に対しては、二年以下の懲役又は二百万円以下の罰金が成立するとされている。

宙美は、ペットが「物」以上の扱いを受けるケースがあることを知り、少し留飲を下げたが腹落ちすることはなかった。

―そもそも、猫田の行為は「みだりに殺した」と認定されるのだろうか？ムリだ。今は我慢するしかない。でも、治療薬が完成して、この新型感染症が落ち着いたら、猫田を訴えてやる。絶対に許さない―

宙美はそう心に誓った。諦めることなんてできない。

六月三十日、美雪が発熱した。新型感染症に罹ったとすると、ウイルスを体内に取り込んだのは、プーの死後数日たったころだ。美雪は、プーを死なせたことで自分を責めていた。柳治が入院している間、プーを守れなかったのは自分の責任だと考えたのだ。

―私たちが家族の絆を取り戻すことができたのはプーのお陰だ。バラバラに離散していた家族の心をひとつにしてくれた。そして、柳治の命を救ってくれた。それなのに、プーを守ってあげることができなかった。もっと別の選択ができたのではないか、研究施設に送り出してからも、見守る方法があったのではないか―

後悔の念が次々と美雪の心に突き刺さり、次第に美雪の免疫力を失わせていたのだ。

柳治は、美雪を自分が発症したときにこもっていた客間に寝かせると、インフルエンザ治療薬を二倍飲ませた。このときのために用意してあった漢方薬も飲ませた。この時期にはすでに病院は医療崩壊の危機にあり、患者が溢れていて、入院することはできなかった。

同じ日、天馬のもとへ一通の電子メールが届いた。南シグマ共和国の保健省の研究員がまとめた報告書が添付されている。天馬がWHOを通じて南シグマ共和国へ調査を依頼していたのだ。

プーの特殊な能力の源は南シグマ島の隣の島で採れる植物だ。この植物だけでは新型感染症の治療薬を創り出すことはできないが、症状の進行を遅らせることはできるかもしれない。それに、プーの唾液などから抽出した特殊な成分を使って治療薬を製造する技術が確立された場合にも、その植物は必要になるだろう。そう考えて調査を依頼していたのだ。報告書にはこう書かれていた。

『その植物は地元では「タチキン」と呼ばれています。以前は、南シグマ島にもたくさん生えていましたが、解熱効果などの薬効があることから、島民が薬として頻繁に使い、さらに島の開発で群生エリアが縮小したことから、南シグマ島からはいつの間にか見られなくなってしまいました。今では隣のゼータ島の限られたエリアに群生地があるのみです。ちなみに、南シグマ諸島では島と島との移動は制限されていますが、現在のところゼータ島における新型感染症の発症者の数は、人口比率でも、ほかの島と比べて非常に低い値となっています。南シグマ共和国全体では、約六〇%の感染率ですが、ゼータ島は一桁少ない八%という状況です。この数値と「タチキン」とは何か関係があるのでしょうか?・・・』報告書は詳細な内容へと続いている。

報告書の最後に天馬をくぎ付けにする文章が書かれていた。

『島の長老に話しを聴いたところ、「タチキン」はもともと南シグマ島に自生していたものではなく、太平洋戦争当時に、日本陸軍の兵士によって日本から持ち込まれたものとのことだ』メルにはタチキンの写真が添付されていた。

―日本から持ち込まれた・・・―

天馬は早速インターネットで調べた。もちろんタチキンは島民たちが付けた名前か、日本陸軍の兵士たちが呼んでいた名前を聞いて島民たちが発音しやすいように言い換えたものだろう。だから「タチキン」で調べてもヒットしない。天馬はいろいろなキーワードを使って調べた。やがて、ひとつの植物に行き着いた。

『タチキランソウ』

立金瘡小草、シソ科の多年草、キランソウ属、日本固有種。本州（関東以西）に分布する。

―キランソウの仲間で、キランソウには薬効があるらしい―

『生葉を絞った汁はあせも、切り傷に効き、陰干ししたのものには、高血圧、胃腸病、胆石、神経痛や発熱などさまざまな病気に効く。煎じて服用する。九州では民間薬として用いられている。

別名として、イシャコロシ、イシャタオシとも呼ばれている』

―紫色の独特の花は、まさしく南シグマ島のタチキンそのものだ。これに違いない―

天馬はそう考えた。そして、すぐさま新型コロナウイルス対策本部の小野寺に電話を入れた。

小野寺に調査結果を報告するとともに、日本国内のタチキランソウ、キランソウの採取と、タチキンとのDNAレベルでの比較を依頼したのだ。また、その薬効については、東洋医学や漢方の専門家にも意見を求めることにした。

二日後、DNAの分析結果が出た。タチキランソウとタチキンは、同一のものだった。インフルエンザの薬として用いられているという実績は確認できなかったが、天馬は試してみる価値があると考えた。一方、プーの唾液や胃液を使った治療薬の開発も天馬のチームで着々と進められていた。

タチキランソウとタチキンは同一のものだと判ったその日のお昼前、宙美は母親の美雪が新型コロナウイルスに罹患したことをトクアプリで天馬へ伝えた。

―母が新型コロナウイルスに感染しました。入院はできていません―
―たったそれだけのメッセージだった。

―治療薬はまだできませんか？ 試作段階でもいいからほしい―

その想いをトークアプリに打ち込むことはできなかった。しかし、宙美は天馬からの返信に期待した。そして、天国のプーがきつと守ってくれろと信じた。

天馬からの返信は早かった。宙美の心中をくみ取った返信が届いた。

―残念だけど、薬の完成にはまだ時間がかかりそうなの。でも、必ず完成させる。今、私たちの実験データは、世界中の研究者が検証し、薬の製造方法の検討が行われている。もう少し、もう少し頑張つて。それと、例のプーちゃんの好物の餌だけど、もともとは日本固有のタチキランソウという植物で、それが南シグマ島へ移殖されたらしいの。治療薬にはならないけれど症状の進行を抑えることができるかもしれない。煎じて飲ませてあげてほしい。プーちゃんの餌はまだ残してある?―

残念ながら、あの餌はプーを火葬するとき、一緒に天国へ送ってしまった。宙美はインターネットでタチキランソウについて調べた。ネットにアップされているいくつかの写真には、その撮影場所も記載されている。幸い、ここからそれほど遠くないところにも自生しているようだ。しかし、特徴的な花は、その開花時期が過ぎている。四月〜五月なのだ。多年草だが葉や茎はまだ残っているのだろうか?

宙美は再びトークアプリで《チーム宙美》に連絡を取った。

―また助けてほしいことがあるの。今から集まれる？―

―もちろん―

次々と返信が届く。

―ところで、プーちゃんは帰ってきたの？―

―それがね、プーちゃん、天国へ行っちゃったの―

―えー、なんで？―

―それは後で話すね。三十分後に豊河中に集まって。水筒持参、トレッキングができる服装でね

―キャプテン、了解しました―

敬礼の絵文字が六つ並んだ

三十分後、《チーム宙美》の七人が中学校に集まった。今回は球美も加わり八人だ。

「みんな元気そうだね。家族も大丈夫？」

宙美の質問に、芽衣、結衣、巴菜の三人が家族の中から感染者が出ていることを報告した。

「それは心配だね。今日は、その人たちの分まで頑張るよ」

そういって、宙美は今日の目的を説明する。みんな真剣だ。

「今日みんなに集まってもらったのは、ある植物をこれから採りに行きたいの。でもね、その植物のことは、ほかの人たちには絶対に内緒にしておいてほしいの」

宙美は自宅でプリントアウトしてきた「タチキランソウ」の写真をみんなに配りながら、説明を続けた。

「それで、どこへ採りに行くの？」

「豊河城公園だよ」

七人は、前回と同様に円形のフォーメーションを整えた。球美があわてて加わる。右手を円の中央にそろえた。

「行くよ！オー！」

八人はそれぞれの自転車で、勢いよく中学校を出発していった。

公園に着くと、宙美は入口に設置された平面図の前で八人それぞれの分担エリアを決めた。

「あまり時間をかけることができないの。今から一時間後ここに集まって。大変だけど、みんなよろしくね」

宙美はそういうと、ビニール袋をみんなに配った。一時間後、八人が元の場所に戻ってきた。採取できたタチキランソウは多くはない。この公園が群生地ではなかったということもあるが、花が落ちたタチキランソウは目立たない。見逃した物も多いだろう。

四十分後、八人は宙美の自宅車庫に集まった。まず、採取してきたタチキランソウの半分を洗濯用のネットに入れて陰干しにした。次に車庫の横にある物置からキャンプ用品を引っ張り出し、コールマンに火をつけると、その上にステンレス鍋を置き、ペットボトルから天然水を二リットルどぼどぼと入れ、半分のタチキランソウをそのまま煎じた。インターネットで調べたところ、陰干ししたものを煎じると書かれていたが、その時間が惜しかったのだ。家の中では美雪が寝ているため、作業はすべて車庫で行った。

三十分ほどで煎じ終わると、その液体を四本の空のペットボトルに均等に入れ、三つは家族から感染者が出ている芽衣、結衣、巴菜に一本ずつ渡した。

「陰干ししたものからも作っておくので、また取りに来てね。今日はありがとう。このことは、絶対に内緒だからね」

《チーム宙美》本日のミッション終了である。

美雪は高熱が続き、意識は朦朧としていた。会話ができない容態に陥っている。柳治は宙美が煎じたタチキンソウの汁をスポイトで美雪の口に少しづつ注いだ。新型感染症から快癒した柳治には抗体ができているはずであり、再び感染する可能性は少ないが、念のためマスク、フェイスガード、手袋、医療用ガウンの一式を付けている。約一時間をかけて五十ミリリットルほどを飲ませることができた。

その晩、美雪は夢を見ていた。

プーと一緒に草原を駆け回る夢だ。遠くからプーが勢いよく駆け寄ってくる。そして、草の上に膝をついている美雪に飛び乗った。その衝撃を感じた。

柳治も同じ夢を見ていた。プーが飛び乗ってくる衝撃を感じて目が覚めた。柳治は不思議な感覚を覚えながら、美雪が寝ている一階の客間を覗いた。美雪の手が微かに動いている。柳治は急いで感染防止の装備を整え、美雪の横に座った。熱はまだ高いが少しは下がったようだ。ゆっくりだが会話もできる。柳治はすぐさま宙美と球美を呼んだ。

「お母さんが目を覚ましたぞー」

宙美と球美のふたりは急いで部屋の前まで来たが、部屋へ入ることはできない。フェイスガードなどの装備をしても、感染のリスクをゼロにすることは難しい。フェイスガード、マスク、手

袋、ガウンが最低限の一セットだが、これらを外す、脱ぐ、廃棄用の袋に入れるというルーティンをひとつでも間違えると感染するリスクが高まる。ふたりは部屋の前で留まった。引き戸は十センチぐらい開けてあり、部屋の空気は扇風機を換気扇代わりにして、外へ排出されるように工夫してある。柳治はスマホでグループ通話ができるようにした。

宙美は柳治に訴える。

「アカネちゃんの力を借りようよ。アカネちゃんもあの餌を食べるようになって、病気を治す力ができているかもしれない。飼い主さんに頼んでみようよ」

柳治は悩んだ。何としても美雪を助きたい。柳治は美雪の横へ行き、耳元で宙美の提案を話した。柳治が話し終わると、美雪は苦しそうに、一言ひとことを絞り出した。その声は、スマホを通して、部屋の前にいる宙美と球美にも聞こえている。

「アカネちゃんの力を借りて……もし私が助かると……アカネちゃんは、プーの二の舞になっってしまう……それにまだ、薬は完成していないから……薬を完成させるために……この後アカネちゃんの力が……必要になるかもしれない。だから、今……アカネちゃんに頼むことはできない」

美雪の声は小さいが、強い意志が感じられた。

―プーが待っている。プーに会いたい―

柳治は美雪が最後にそうつぶやいたような気がした。

その晩、宙美はベッドに横になりながら考えを巡らせていた。目が冴えて眠ることができない。
い。

―お母さんをアカネのところへ連れていくことはできない。体力的に無理だ。アカネを連れて来ることはできるだろうか？ 誰かに見られたらそれですべてが終わってしまう。元の木阿弥だ。アカネの唾液をうまく採取できれば誰にも知られずに持ち帰ることができる。しかし、時間がたった唾液でも効果はあるのだろうか？ 天馬さんたちは、プーから採取した唾液などから新薬を創ろうとしているのだから、多少の時間は問題ないはずだ。だったら、アカネの唾液を脱脂綿で吸い取って小瓶に入れて持ち帰れば良さそうだ―

翌朝、宙美は家族が起きる前に身支度を整えた。音をたてないように、そーと裏口を開けて表へ出ると、自転車にまたがった。

「アカネちゃんのところへ行くの？」

いつの間にか、球美が裏口を出たところに立っていた。心配そうに声を潜めて聞いてくる。

宙美は思いつめた表情で首を縦にコクリと動かした。球美はピースサインを送った。ほんの少し希望が持てた表情だ。宙美が背負ったデイバッグの中には、脱脂綿が入れられた高さ三センチほどの小瓶が入っている。

―諦めることはできない―

宙美は自分が描いた小さな希望と、珠美のピースサインに後押しされるように、刈屋市へ向けて、勢いよくペダルをこぎだした。

しかし、自転車で走りながら、宙美は考える。

―でも―

ペダルをこぐスピードが鈍る。

―お母さんが新型感染症に感染したことも、自宅で死を待っていることも近所の人たちは知っている。もしもお母さんが回復したらどうなる？プーの開発中の薬が使われたと疑われるかもしれない。

ない。アカネの存在が知られることになるかもしれない。お母さんが自力で回復しないかぎり、事実と異なることを話すことになる。どうしたらいい？――

その日は、アカネの家まで一時間以上かかってしまった。アカネの家の前に着くと、ちょうどお母さんが玄関から出てきた。アカネを抱いている。アカネを散歩に連れていくところのようだ。

「あら、プーちゃんのお姉ちゃんね。お早うございます。朝早くからどうしたの？プーちゃんはもう帰ってきた？」

「・・・・・・・・」

宙美が応えるまでに、一分間近くの時間がかかった。

アカネのお母さんは、そこに重苦しい空気が漂っていることを察した。

「プーは、研究所から帰ってきましたが、残念だけど二十日前に死にました。でも、プーから採取された唾液や胃液を使って、新薬の開発が進んでいます」

「プーちゃん、天国へ行ってしまったのね。残念ね」

「プーは死にしましたが、プーは今回の新型感染症の治療薬の開発になくってはならないものを遺しました。でも、治療薬の開発を成功させるためには、この先、アカネちゃんの力を借りるようになるかもしれません。．．．ですから、アカネちゃんのことには、誰にも話さないでください。誰も助けられないでください」

そこまでいって、宙美はいい過ぎたことに気が付いた。

「ごめんなさい。でも、もしもひとりでも助ければ、あとは隠しようがありません。プーがそうでした」

アカネのお母さんが、優しく語りかける。

「アカネを抱っこしてもらえらる」

宙美に向かってアカネを差し出した。宙美はアカネを抱いた。やっぱりプーとそっくりだ。

「プーちゃん」

宙美の頬から涙が零れ落ちる。宙美はアカネをお母さんへ返すと、言葉を絞り出した。

「朝早くからごめんなさい。今朝は、それだけをお伝えしたくて来ました」

自分の母親が感染したことを口にするのはなかった。

アカネとの別れ際、お母さんが宙美を呼び止めた。

「アカネを抱っこしてどうだった？ 実はね、アカネのお腹には赤ちゃんがいるの。お父さんもトイプードルよ。もし赤ちゃんが生まれたら、もらってもらえる。プーちゃんの血がつながっているわ」

アカネの家を後にすると、宙美は近くの堤防へ向かった。堤防の上で自転車を止めると、深呼吸をし、雄叫びのように精一杯の声を川に向けて吐き出した。

「ワー、ワー」

誰に対する怒りなのか、何が悔しいのか、宙美にもわからなかった。

「プーが生きていてくれたら――」

「厚生労働省の猫田がプーを殺したんだ――」

「新型感染症を世界へ広めたのはだれだ――」

「なぜ日本国内へ入ってくるのを防げなかった――」

「近所のみんながお母さんを苦しめた。そのせいでお母さんの免疫力が下がった――叫びながら、次々と頭のなかに批判が出てくる。」

「自分は何をした？――」

—自分はベストを尽くしたのか？—

—なんで、自分には何もできないのか？—

—私が高校受験に失敗したのは、お父さんのせいでも、誰のせいでもない。自分のせいだ。それなのに、私が家族を半年間もバラバラにしてしまった—

—お母さんともっといろんな話しをしたかった—

—お母さんと・・・もっと、もっと・・・—

ただただ悔しくて仕方がなかった。自分のことが情けなかった。大粒の涙が零れ落ち、視界が歪んだ。声を上げて泣いた。止めどなく流れ落ちる涙は、やがて悔しさを、ほんの少し洗い流してくれた。

その日の夜、美雪の意識は再び朦朧とし始めた。呼吸が弱くなっている。柳治はフェイスシールドとマスク、そして手袋を外した。再び感染することへの恐れを抱くことはなかった。

—一緒にプーが待っている天国へ行こう—

—宙美と球美を遺して私たちだけが旅立つわけにはいかないわ—

—宙美と球美なら大丈夫だ。宙美は強くなった—

―そうね。プーのお陰ね。プーが家族になって良かったでしょ―

―この新型感染症がなければ、不幸な半年間を取り戻すことができたのに―

―プーは、あつという間に私たち家族の絆を取り戻してくれたわ―

―プーに感謝しないとな―

―そうね―

―俺も、プーに会いたいよ―

―あなたは生かされたの。それにはきつと理由があるわ―

―こんな俺に何ができる。単なる偶然だよ―

魂の会話が続く。柳治の手は美雪の手を握り続けていた。

やがてその手は美雪の顔へ移っていく。美雪の頬を両手で包みながら、顔を近づけ、そっとキスをした。何年ぶりのキスだろうか。美雪のこの体温を、もう感じることはできない。柳治の眼からは、大粒の涙がボロボロと落ちた。

―なんで自分は助かって、美雪は助からないんだ。あ――

部屋の外では、宙美と球美が心配そうに様子を窺っている。

しばらくして、美雪はゆっくりと大きな息をひとつして、静かに深い眠りについた。

柳治は首を横に振った。宙美と球美は、部屋の外で泣き崩れた。

新薬の開発 ―人類の総力―

数日後、天馬たちの研究チームのひとつがタチキランソウの有効成分の濃縮に成功した。それを新型感染症の患者に飲ませてみた。回復する傾向は見られなかったが、症状の悪化を遅らせる効果が確認できた。

しかし、天馬はこの濃縮液の製法を広く知らしめることができない。なぜなら、タチキランソウは日本固有の植物で、本州の関東以西にしか自生していない。もし、この事実が公表されてしまうと、我先にタチキランソウを手に入れようとする人たちに荒らされてしまう。この先、新薬を製造する際にも必要になるかもしれない。今は我慢して、温存しなければならぬ。

天馬は、有効成分の濃縮に成功したこと、症状の悪化を遅らせる効果があること、そして治療薬の開発状況を新型感染症対策本部の小野寺へ報告した。対策本部でもこの濃縮液の扱いについて協議されたが、結論は同じだった。公表しないという決定だ。

しかし、天馬のチームが濃縮した有効成分約百人分の活用方法については侃々諤々の議論が繰り広げられた。これを有効に活用すれば、百人の症状を安定化させ、治療薬の完成を待つことが

できる。では、その百人は誰を選ぶのか？ 対策本部のメンバーである閣僚たちは、それぞれ自分の意見を主張した。

「医療従事者を優先すべきだ」

「子供や妊婦を守るべきではないか」「ライフライン、特に電気の従事者を守らないとすべての機能がマヒしてしまう」

「これまでに偉大な功績を遺した、日本の誇りたる人物を助ける必要がある」

「この先の経済復興に欠かせない大企業の経営者や、有望な若手経営者を助けるべきだ」

「この先の政権安定のためには、地元有力者を守らないと次の選挙で負ける」

「影響力の大きい芸能人やスポーツ選手を助ければ国民に希望を持たせることができる」

「高額納税者を優先しないと、この先の税制度が崩壊する」

しかし、百人分という量は少な過ぎた。誰に投与するかということについて、結局意見はまとまらなかった。最終的に、対策本部長の大賀が決断した。

「誰にも投与しない」

百人分の濃縮液は、そのまま治療薬の開発に回されることになった。

一方、治療薬の開発は終盤に差し掛かりつつあった。しかし、あと一步のところまで十分な効果が得られない。ウイルスの増殖を抑える効果はあるが、ウイルスを減らす効果までは確認できないのだ。天馬たちのチームは焦っていた。

―初期のプーの唾液には、ウイルスを急速に減らす効果があった。それが再現できない―

―しかし、現状でもウイルスの増殖を抑制する効果がある。感染初期に投与すれば重症化を防ぐことはできるだろう。それだけでも十分な特效薬だ―

―しかし、すでに重症化しているか、これから重症化する患者を見捨てて良いのか?―

―どうしたらいいの? プーちゃん助けて―

天馬が目をつむると、そこにプーの姿が蘇った。プーはトイレのまわりをグルグル回ると、やがて糞をした。

―そうか、糞だ。宙美ちゃんも食糞のことを話していたではないか―

天馬は考えた。タチキランソウの成分を、プーから採取した唾液と胃液を培養したもので繰り返し分解、生成、濃縮することで今のレベルまで来た。この方法は宙美のアイデアに基づいてい

るが、宙美が思いついたプロセスは、少し違うのではないか？プーの体内で起きていたプロセスの肝心な部分を見落としていたに違いない。

プーがいなくなって以降、食糞のプロセスまで再現することまでは試みていなかった。代わりに、唾液と胃液を使ったプロセスを増やしてきたのだが、腸のなかにはさまざまな微生物が住んでいる。唾液や胃液だけでは足りないのだ。

―糞が必要だ。しかしプーちゃんの糞は残っていない―

プーの糞を冷凍保存しておかなかったことが後悔される。

―アカネを借りることはできるだろうか？―

天馬は悩んだ。プーを送り返したあの日のことが脳裏に浮かぶ。―だけど、ここで諦めてしまつては、プーちゃんに申し訳ない―

意を決すると、スマホを取り出して宙美へメッセージを送った。

―宙美ちゃん、お願いがあるの。アカネちゃんの糞が必要なの。できるだけ新しい方がいい。

アカネちゃんをここへ連れてくることはできる？―

スグに着信がある。

「アカネちゃんは今、お腹に赤ちゃんがいます。今、アカネちゃんを動かすことは危険です。新しい糞を急いで運ぶ方法があればいいのだけどー」

天馬は新型感染症対策本部の小野寺へ電話を入れた。

「ヘリコプターを飛ばしてください」

「天馬さんからの電話はいつも緊急だな。わかった、理由は聞かない。どこへ飛ばせばいいんだ？ 大型ヘリか、小型か、どっちだ？」

小野寺は、細かいことは聞かなかった。

「小型で結構です。まずは、研究所のヘリポートへ着けてください。私が乗ります」

天馬は宙美へトークアプリで質問を送る。

「アカネちゃんの家近くにヘリコプターが着陸できそうなところはある？ グランドとか、河川敷とか」

宙美は、先日大声を上げて泣いた川を思い出した。

「すぐ近くに河川敷があります」

スマホの画面にアカネの家の周辺地図を表示させると、そのデータを天馬へ送った。

—今から、アカネちゃんのところへ行きます—

宙美はトークアプリでそう返信すると、家を飛び出していった。

—いつも肝心なときにお母さんは家にいないんだから—宙美の自転車はスピードを上げた。

アカネの家に到着するころ、上空からヘリコプターの音が聞こえてきた。見上げるとオレンジ色のヘリコプターが河川敷へ向かっている。

—今、河川敷の上空です。ヘリコプターは県営名古屋空港を基地としている民間ヘリコプター会社が飛ばしてくれました。まもなく着陸します。私も乗っているの。私がアカネちゃんの家に行くと、近所の人に怪しまれるといけないから、河川敷で待っているね—

天馬からのメッセージが届いた。

アカネの家に着いた。あとは、アカネが糞をするのを待つだけだ。

「アカネちゃんはいつも何時ころにウンチをしますか？」

「そうねー、朝ごはんを食べてからまだウンチをしていないので、もうすぐだと思うんだけど・・・」

アカネのお母さんは少し不安げだ。

それからの三十分間はとても長く感じられた。じれったい。

やがて、アカネはトイレのまわりをグルグル回り始めた。

―プーと同じだ―

アカネが糞をする姿勢をとった。お腹はちよつと膨らんで見える。

「すみません、密封できるビニール袋をいただけますか？」

「フリーザーバックでいいかしら」

アカネのお母さんが急いで持ってきてくれた。宙美は、その袋を裏返してアカネの糞をつまむと、袋を元に戻して、ファスナーを閉じた。

―いい形のウンチだ―

アカネの頭と口元をなでる。

「おりこうさんね。プーの分も長生きするんだよ」

「ありがとうございます―」

大声でお礼をいい、アカネの家を飛び出した。河川敷では、オレンジ色のヘリコプターの横で天馬が待っていた。

「また宙美ちゃんに助けってもらっちゃったわね。ありがとう」

天馬は袋を受け取ると、クーラーボックスの中に入れた。

「これがあれば、薬は完成できると思うわ」

天馬がクーラーボックスを抱えて後部扉からヘリコプターに乗り込むと、搭乗員のひとりが扉を閉めて、宙美に向き直った。

「スグに飛び立ちます。離れてください」

搭乗員は宙美に向かって敬礼をすると、パイロットの隣席に飛び乗り、扉を閉めた。ヘリコプターのローターが回転を始める。やがてヘリコプターは離陸し、空高く舞い上がった。見上げると天馬が手を振っている。

二週間後の七月二十四日、天馬のチームは、実験室ベースで治療薬を完成させることができた。そこで製造できる薬の量には限りがあるが、それでも千人分ぐらいは用意できそうだ。あとは、これを化学的に合成、増産できるようにすればよい。

一週間後、天馬は完成したばかりの治療薬のサンプルが入った小瓶をバッグに入れて、宙美の家を訪ねた。手には、花束「一つ」抱えられている。玄関では、宙美がひとりで出迎えた。柳治、美雪、球美の三人は出かけている。天馬は大型バイクではなく、車で来たのだろう。シツクな濃紺のスーツ姿だ。天馬の後ろにはふたりの男が立っている。

「宙美ちゃん、やっと完成しました。プーちゃんのお陰です。これをもとに、今、工場で大量に生産する技術の開発が進められているの。世界中の研究者や技術者が協力しているわ。スパコンもすべて稼働している。もうすぐ完成するはずよ。人類は今回の新型感染症で危機に瀕したけれど、プーちゃんが遺した希望が世界をひとつにしたの。国の名誉も個人の栄光も、特許も財産も、すべて意味を持たなくなっただわ。人類はプーちゃんによって救われたのよ。世界で十億人以上の命が助かることになる。プーちゃんの仏前に花束を供えさせてもらえる？」

星山家の居間に置かれた小さな仏壇には、プーの写真二枚と遺灰を入れた小さな白い壺がひとつ置かれている。一枚目の写真はお座りをして飼い主を見上げている。二枚目はドックランで躍動している姿だ。

天馬は治療薬が入った小瓶をバックから出して遺灰の横にそっと置き、その前に花束を供えた。小瓶には「Pu0815」と印刷されたシールが貼られている。ふたりの男は天馬の両脇に座った。

「世界を救うことになるこの薬の名前です。ピーユーゼロハチイチゴ」
天馬は仏壇の写真に向かって話しかけた。

宙美は思い出した。先日、天馬がトークアプリでプーの誕生日を聞いてきた。プーの誕生日は八月十五日だ。天馬と男たちは、一分間以上、プーの遺影に向かって手を合わせた。天馬の目からは涙が零れ、頬を伝っている。涙を手で拭うと、宙美の方へ向き直った。男たちが宙美に頭を下げる。

「私の上司の小野寺です。こちらは・・・」
天馬が紹介する前に宙美が反応する。

「アッ！」

「大賀です。プーちゃんが日本を、いや世界を救ってくれました」
大賀が涙ぐむ。

「本当にありがとう。実は私もトイプードルを飼っていました。仕事でたまった鬱憤やストレスはケンが解消してくれました。妻を亡くしてからは、疲れ切って歩みを止めようとする私の背中をケンが何度も押ししてくれました。ケンを天国へ送り出したときの悲しみが今蘇ってきました。星山家のみなさんには、とてもつらい思いをさせてしまいました。本当に申し訳ない」

大賀と小野寺が正座をして深々と頭を下げた。

「この治療薬のサンプルは、宙美ちゃんが好きに使っていいのよ。誰か助けてあげたい人はいらる？」

天馬が明るく話しかけた。

「います！芽衣、結衣、巴菜の家族を助けてください」

宙美は、《チーム宙美》のメンバーであり大親友六人うち、三人の家族が新型コロナウイルスに罹患して危険な状態にあることを話した。

「チーム宙美のメンバーとして、宙美ちゃんと一緒に活躍してくれたお友だちね。ブリーダーさんの家へも急行してくれた。彼女たちにはこのサンプルを使う権利があるわ」

大賀と小野寺を送り出した天馬は、宙美と一緒に三人の家を回って「Pu0815」を投与した。天馬は医師免許を持っている。

宙美の家に戻り、天馬はもういちどプーの遺影に手を合わせた。

「宙美ちゃん、そろそろ行くわね」

天馬が切り出した。

「ありがとうございます。．．．あの、私も、天馬さんのような研究者になれるかな？」

天馬の顔がみるみる満面の笑みに包まれる。

「もちろん！研究者にとって大切な素養は、観察力、着想力、仮説を組み立てる力、行動力、そして決して諦めない力。これらはすべて宙美ちゃんに備わっているわ。Pu0815は、プーチちゃんが遺してくれた薬だけど、宙美ちゃんの着想がなければ、私たちには創り出すことはできなかった。宙美ちゃんは、きっと素晴らしい研究者になる。．．．でもね、少しはお勉強もしないとね．．．」

天馬は宙美の手を強く握った。

エピソード

新型感染症の治療薬は、天馬のチームが開発したサンプルをもとに、世界中の大手製薬メーカーの研究者らが協力してその組成が詳しく分析され、化学的な合成手法が確立されると、ただちに量産体制の構築に着手された。

化学的合成プロセスが決定しても、それを量産体制へ持っていくためには、生産ラインの設計、自動化システムの設計、機器類の設計製作などさまざまなエンジニアが必要になる。最初に考案された生産ラインシステムの基本設計図はインターネットで公開され、世界各国のエンジニアがその改良に取り組んだ。その情報は逐一共有され、世界中のエンジニアが二十四時間体制で協業することにより、短期間で最終設計を完成させることができた。

機器類も同時並行で製造が進められていた。地方の零細企業でした製作できない精密部品は、ヘリコプターで空港まで運ばれ、そこからは戦闘機によって迅速に各国へ運ばれた。そこにはもう、国境はなかった。「Pu0815」量産のために世界がひとつになったのだ。

最初の生産ラインが稼働を始め、「Pu0815」のファーストロットが出荷されたのは、折しも八月十五日だった。

「Pu0815」が全世界の患者たちに投与され始めると、新型感染症は急速に終息していった。一方、このころになって、今回の新型感染症の原因ウイルスの詳細が解明された。高病原性鳥インフルエンザH5N1が、これまでに確認されたことがない、特殊な変異を繰り返したものであった。

世界では人口七十七億人の約七割、五十四億人が感染リスクに晒され、その約半数の二十七億人が感染し、八億人が死んだ。

「Pu0815」に代わる治療薬の開発に成功した国はなかった。「Pu0815」がなかったら、世界の感染死者数は二十億人を超え、世界経済の長期にわたる停滞により、さらに多くの犠牲者を出していたかもしれない。

日本の死者は約三十五万人だった。そのなかに、細井と猫田の名前があった。

細井の息子の名前がなかったのは、タチキランソウを陰干しして煎じたものを柳治が細井に提供したからかもしれない。細井も猫田も同様に服用したはずだが、基礎疾患を抱えていたふたりは助からなかった。

九月一日、ブリーダー宅とその周辺をあらためて搜索した警察が、飼育小屋のトイレの中でスマホを発見した。洋式便器の中に沈んでいたのだ。専門家がメモリーを回復させるとともに、ウ

エブ上に保存されていたデータから、最後に撮影された動画に犯人たちの姿と会話が記録されていることが判明した。その会話は、北方連合共和国の言語だった。ブリーダーは、犯人を撮影した後、それを自ら便器の中へ投げ込んだのだろう。

その動画をもとに犯人の割り出しが進められたが、北方連合共和国の特殊機関が関与していると推定されたものの明らかにすることはできなかった。しかし、日本国内で手引していた協力者のひとりが判明した。その協力者を逮捕して調べ上げたところ、所持していたスマホの履歴の中に、猫田の電話番号があった。

猫田は北方連合共和国の特殊機関に協力していた。この事実を踏まえ、プーの体重データをあらためて精査した結果、猫田がプーから採取した血液量は五十ミリリットルではなく七十ミリリットルであることが判明した。プーの体重は特殊ケージによりリアルタイムで計測されていた。猫田は研究者に依頼することなく、自分でプーから血液を抜き取り、体重データを改ざんしていたのだ。

北方連合共和国は、南シグマ諸島の小さな島に育つ「タチキン」と呼ばれる植物に、新型感染症を予防する効果があることに気が付いていた。南シグマ共和国では古くから「タチキン」が風邪薬や解熱剤として利用されてきたこと、今回の新型感染症の発症者が「タチキン」が採

れる島だけ顕著に少ないことを把握していたのだ。そしてもうひとつ、「タチキン」を加工したものが、犬の健康食として日本へ輸出されているという情報も入手していた。

日本でトイプードルが新型感染症の重症者を救ったことを知った同国は、その犬が生まれたブリーダー宅から、トイプードルとその餌を奪取する作戦を敢行した。「タチキン」の加工品を食べたトイプードルが特殊な能力を身に着けたのか、あるいは特別なトイプードルが「タチキン」によって能力を開花させたのかはわからないが、それらを組み合わせることで新型感染症治療薬を創り出すことができると考えたのだ。工業者を装った作業員五人がブリーダー宅を急襲したその日、トイプードルの確保に成功した作業員たちは、餌のありかを探していた。飼育小屋の奥へ進んだその時、ドローンを飛ばして上空から周囲を監視していた作業員が、自転車の列が近づいてくるのを発見すると、彼らは急いでその場を撤収した。その際、奥の作業スペースに隠れていたブリーダー夫婦を発見し、ふたりを一緒に連れ去った。

餌を手に入れることができなかった同国は、日本人協力者の猫田に餌の入手を急がせた。プーが研究所へ来たその日、凶らずも餌を手に入れることができた猫田は、翌朝、名古屋駅前で作業員のひとりにそれを渡した。餌のDNAを解析した同国は、それが「タチキン」であると特定し、南シグマ諸島に生えている「タチキン」すべてを管理下に置くとともに、連れてきたトイプ

ードルを使って治療薬の開発にとりかかった。しかしこの開発は前進しなかった。同国は、日本の研究所に収容されているトイプードルの血液を採取して送るよう、猫田へ指示を出した。

猫田を通じて血液は入手できたものの、結局、同国は治療薬を完成させることはできなかった。新型感染症から人を救うことができるその特殊な能力は、プーとアカネだけが持っていた。実際には、食糞をしていたプーだけが自然と身に着けていたのだ。

十月九日、北方連合共和国でひとりの著名な研究者が新型感染症に罹患して死んだ。同国の洞窟で新種のウイルスを発見した人物だ。その研究室に残されていたパソコンには、新種のウイルスに対応できる治療薬を開発するプランが残されていた。同国は、あらかじめ治療薬を完成させたうえで、そのウイルスを世界へばらまくことを画策していた可能性がある。そもそも、新種のウイルスを探し、洞窟で発見したそれを南シグマ共和国まで運んで研究する必要があったのか？ いずれそのウイルスが自然にパンデミックを起こすリスクを想定したものとは考え難い。しかし、研究者のパソコンとともに、事実はずべて闇に葬られた。

連れ去られたブリーダー夫婦とトイプードルたちも、同国の闇に閉じ込められたままだ。

十月十日、星山家にアカネが生んだ子犬がやってきた。女の子だ。一年前、プーが星山家にやってきたときと同じように、早速、家の中を探索し始めた。

あとがき

地球誕生から現在までを一年間とした場合、最初の生命となる微生物が誕生したのは三月二十五日だ。海中の生物が陸に上がったのは十一月二十日。人類が誕生したのは十二月三十一日の午後二時三十分のことだ。人類よりはるか以前から地球にすみついていた微生物は、地球のいたるところ、そしてあらゆる生物の体内に存在している。

ウイルスの場合、熱帯雨林では約三千六百種が確認されており、さまざまな野生動物を宿主として世代交代を続けている。自然界で形成されていた微生物の感染サイクルだったが、未開の地の開発に伴い、人間が未知の自然環境に身を置くこととなった。未知の動物と接触し、ときにそれを食べるようになったことで、感染サイクルの中に人間が入り込んだのだ。その結果、野生動物を本来の宿主としていたウイルスは人間という新しい宿主に出会い、攻撃を開始するようになった。さらに、地球環境の温暖化が進むことで、自然界でおとなしくしていた微生物が活動を始める危険性にも人間は晒されようとしている。世界はグローバル化が進み、人も物も高速で大量に長距離を移動する時代になった。ウイルスも同様に移動する。

一方で、人間にも進化の過程で備わってきた自然免疫があり、感染を経験することで備わる獲得免疫がある。しかし、表面的には清潔で健康的に見える現代の生活に慣れることで、人間の免

疫力は、ここ数十年で急速に弱まりつつある。(参考文献：『免疫力―正しく知って、正しく整える―』藤田紘一郎著) では、人間社会は感染症に対する十分な備えを行っているのだろうか。国は二〇二〇年までに大企業のBCP策定率を一〇〇%、中小企業は五〇%に到達させることを目標にしてきたが、実績は大幅に下回ったままだ。強毒性インフルエンザ等の感染症を対象としたBCPに至っては、実効性の高いものを策定している企業は極めて少ないだろう。企業の事業活動は、その規模の大小に関わらず、複雑なサプライチェーンによって支えられている。たとえば企業のBCP策定率が一〇〇%に達しても、それらを下支えする中小企業の事業が継続されなければ、やがて大企業の事業活動も停止する。さらに、すべての企業を支えているのは社員であり、その家族である。それぞれの家庭において、実効性の高いBCPが策定され、実践されなければ、現代社会はあつという間に瓦解する。

幸い、人類にとって脅威とされる高病原性鳥インフルエンザH5N1は、鳥から人への感染は確認されているものの、人から人への感染はギリギリのところまで食い止められている。しかし、その日が来るのは明日のことかもしれないし、未知のウイルスによる脅威もすぐ目の前に迫っているかもしれない。

確実にわかっていることは、そこにプーはいないということだ。

完